
遊戯王 J I M

カゲシン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王JIM

【Nコード】

N4049U

【作者名】

カゲシン

【あらすじ】

バトルシテイ
決闘都市準決勝第一試合。城之内克也は激戦の末、マリク・イシユタールの従えし最強の神の攻撃によって倒れた。

その先にあるのは果てなき闇か、永遠の無か……いや、どちらでもなかった。目が覚めた時、彼は異世界へとその身を運ばれていた。数々の未知との遭遇、そこで城之内を待ち受けるものとは……

私、カゲシンの連載小説第二作目です。メインで書いている『ネギドラ!』とは違いサブでの連載となりますので、あちらと比べ更新速度は遅いですがご了承ください。応援よろしくお願いいたします

!

プロローグ&小説概要

「バ、バカな……ありえない……」

「お……俺の、ターン……」

日本本州から遠く遠く離れた孤島『アルカトラズ』

回り全てを海に囲まれたその島にそびえ立つのは、高さ数十メートルにも及ぶ巨大タワー

そこが、『バトルシティ決闘都市』においての決戦の地

最上部では現在、その決闘都市の準決勝戦第一試合が終焉を迎えようとしていた

「神の……ラーの攻撃を受けて、立ち続けていられる奴など、いるわけが……」

目の前の事態に、ただ驚愕するのみの一人の男

名はマリク・イシユタール

そしてその驚きの対象である、準決勝の彼の対戦相手

「ド……ロー……」

城之内克也

つい先ほどまで、彼は『燃えていた』

いや、正確には『焼かれていた』のだ

ダメージがそのままプレイヤーに反映される『闇のデュエル』

千年ロッドの所持者であるマリクによって、そのデスゲームは始まった

遊戯が持つオシリスの天空竜、海馬が持つオベリスクの巨神兵

そして第三にして最強の神、マリクが持つラーの翼神竜

準決勝に駒を進めたその面々の中、唯一神を所持してなかった城之内

それでも彼は、所持者であるマリク相手に善戦

それどころか、後一步で勝てるというところまで来た

しかし、すんでのところでマリクはついに神を呼んだ

そして神の能力で、城之内の場のモンスターを破壊した

これだけなら、まだ問題はない

だが、これは闇のゲームであることを忘れてはならない

城之内のモンスターを破壊したラーの攻撃は、そのまま躊躇なく城之内までもをその炎で焼き払う

灼熱に叫び声をあげる城之内、そして彼の名を叫ぶ仲間達

それらをマリクは、喜々とした表情で聞き入った

それから数十秒後、もう充分だろうとラーを引き上げさせたマリク

この攻撃で城之内は力尽き、デュエル続行不可能

よって自身が勝利となり、決勝戦へと進出

上記二文までが、マリクの思い描いていたシナリオ

しかし、それは目の前で覆されたのだ

「メイ……ン……フェイズ……」

「バカな！バカな！」

城之内はこうして、目の前で立っていた

そしてカードという名の剣を手に取り、戦いを続行

無論、ラーの攻撃を受けて無事でいられるはずもない

もはや城之内は、己の精神力のみで動いていると言っても過言ではなからう

「ギア・フリードを……召喚……」

ゆっくりと城之内は、先ほどドロ―したカードをそのままデュエルディスクへと表向きに置く

墓地より蘇った不死鳥、ラーは再びその墓地へと舞い戻った

あとは、今召喚したモンスターで攻撃さえすればいい

そうすれば、城之内は

（遊戯と……決勝……）

己が親友と最高の舞台で決闘^{たたか}える

闇のゲームによって引き起こされた、今のような禍々しい闇の光景もない

ただ、晴れ晴れとしたこのタワーの上で

向かい合う遊戯、そして自身

ラーの攻撃で意識が消えゆくそうになる中、城之内はこのビジョンをハッキリと目にした

「バトル……フェイス……」

倒れそうになりながらも、城之内は声を絞り出す

あとは、そう、一言だけ言えばいいのだ

『ギア・フリードで攻撃』と

「ギ…ア…フリード、で……」

「バカなあああっ！」

「こ……う……げ……」

「城之内君！」

そこで、城之内の意識は途切れた

最後に聞こえたのは親友、武藤遊戯の叫び

倒れる身体と、真っ暗に闇へと落ちる目の前

「……………んっ……………」

そして、それからどれ程の時間が流れたのだろう

「……………ここ……………は……………」

「あーよ、よかった、目が覚めたんですね！」

次に城之内が目を覚めたのは

「どこ……………だ……………？」

見覚えのない場所、どこか室内のベッドの上

「あの、大丈夫ですか？身体の何処かが痛んだりとかは……………」

身体を起こす彼に話しかけるのは、眼鏡をかけた赤髪の少年

歳は大体十歳ほどで、ベッドの横に椅子を置いて座っていた

「いや、何ともねえ…それより……」

少年の問いに対し、城之内はそのまま正直に答える

「……お前、誰だ？」

続いて今度は逆に、彼の方から少年へと尋ね返した

いくら記憶を掘り返しても、目の前の少年には覚えがない

ここはどこなのか、決闘都市はバトルシティどうなったのか

訊きたいことは山ほどあったが、まずはこれについて訊くことにした

「僕の名前は、ネギ・スプリングフィールド……この麻帆良学園で、教師をやらせてもらっています」

「俺は、城之内克……って、教師？」

少年、ネギの自己紹介を受け、名乗り返そうとする城之内

だがネギの口から出た言葉を思い返し、思わず言葉を止めた

「それに、麻帆良学園？」

「はい……ここは埼玉県麻帆良市、『学園都市』とも呼ばれる麻帆

「良字園です」

ブログ&小説概要（後書き）

城之内

「やつほー読者のみんな！城之内克也だぜ！」

ネギ

「ネギ・スプリングフィールドです」

城之内

「つーわけで始まったな作者の新連載！しかもこの俺が主役だぜ！」

ネギ

「あくまで『ネギドラ！更新不可時の代原的連載小説』ですけどね、なので更新は不定期です」

城之内

「けど作者の学校の定期考査ことには更新出来そうなんだろ？それと月に一回くらい」

ネギ

「らしいです、その時も一日一本投稿方式でやっていくとか」

城之内

「ちなみにこのあとがきコーナーなんだけどよ、毎回司会は俺達二人でやるのか？」

ネギ

「いえ、それだとネギドラ！のと方式が結構かぶるので『その話で活躍したキャラ数名』をゲストとして毎回起用するみたいです。で

すから基本は城之内さん＋数名になりますね」

城之内

「だから今回はお前なのか、まあマリクとか呼ぶのも嫌だしな……」

ネギ

「さて、今回は『この小説の諸設定』についてお話したいと思います」

城之内

「今後この小説を読んでいくにあたって重要だからな、みんなも一回は目を通してくれよ！」

ネギ

「まず一つ目、『この話は“城之内　ネギま！世界”のトリップもののクロス小説となっています』」

城之内

「つまり、俺のいたのとは全然違う世界なわけだな」

ネギ

「二つ目、『舞台がネギま！の世界にも関わらず、やるのは基本決闘^{デュエル}です』」

城之内

「いいじゃねえか！俺としては大歓迎だぜ！」

ネギ

「三つ目、『ネギま！の世界でも、名称は“遊戯王OCG”ではなく“デュエルモンスターズ”です』」

城之内

「そこは俺のところで一緒にだな」

ネギ

「四つ目、『デュエルモンスターズの流行度は、城之内のいた世界と殆ど変わりません。決闘^{デュエル}万能主義もおそらく適用されます』」

城之内

「よっしゃ！」

ネギ

「五つ目、『ネギま！の時代設定が2003年とか一切関係なく、現実世界の最新カードとかも普通に登場します。シンクロモンスターとかデフォルメです』」

城之内

（シンクロモンスターって何だ？）

ネギ

「最後に六つ目、『物語の舞台は時間軸的にヘルマン戦の少し後くらいとしています。つまり麻帆良祭前です』」

城之内

「お！祭りがあるのか？」

ネギ

「とまあ、こんなところらしいです」

城之内

「じゃあ最後に、次回予告だな」

ネギ

「はい、次の話は僕と城之内さんが麻帆良学園内を廻るお話です」

城之内

「決闘^{デュエル}シーンはあるのか!？」

ネギ

「それは?~?の間の?になりますね」

城之内

「くううううう!ワクワクしてきたぜ!」

????

「まったく、暑苦しい人ですね」

城之内

「ん?誰だお前?」

????

「それは第1話が始まってからのお楽しみということぞ」

ネギ

「次のあとがきコーナーは第1話の最後、つまり?の終了後になります」

城之内

「……てことでまあ、次の楽しみに待っていてくれよな!」

第1話 初麻帆良、初決闘（デュエル）？（前書き）

昨日に引き続き投稿、今度は第1話です。

明日以降投稿する残りの？～？も1話に含まれますので、読む際のテンポ的なことを考えて前書きは？以降カットします。あと前回の後書きにも書きましたが、？～？の後書きもカットです。

『何かテンプレだな』とか思われた方、どうかご勘弁を（汗）ではどうぞ！

第1話 初麻帆良、初決闘（デュエル）？

「異世界……異世界ねえ……」

ラーの攻撃に倒れ、それから目を覚まして数十分

麻帆良学園女子中等部校舎の保健室

そのベッドの上で、城之内はネギから簡単な説明を受けた

まず、ここがいる世界は自分が元いた世界ではないという

ネギが言うには、童美野町という場所はこの日本には存在せず、
バトルシティ
決闘都市という大会の開催も聞いたことがない

デュエルモンスターズというカードゲームはこの世界にもあり流
行しているが、制作しているのはI2社ではなく普通のおもちゃ会社

そもそもI2社も存在しない

無論、海馬コーポレーションも言わずもがな

そしてネギが城之内を見つけたのは、今日の早朝

中国拳法の師匠古菲と、朝の稽古に励んでいた時のこと

突然、学園のシンボルとも言える存在『世界樹』が大きく発光

時間にすればほんの一、二秒だったが、発光したのは紛れもない事実

それを目撃したネギ達が世界樹に向かってみると、城之内が酷く衰弱した様子で倒れていた

これは一刻を争う、とネギは急いで学園側に報告

治癒術師を呼んでもらい、すぐさま城之内の容体は回復

あとは目覚めるまで様子を見よう、ということとで運ばれたのがこの場所

現在時刻は午前九時過ぎ

今日は土曜日だったのが幸いし、ネギは付きっきりで城之内の横についてたという

「何か実感が湧かねえんだよな……」

「いきなりですから無理もないです、あの人も初めはそうでしたし」

「あの人？」

ネギの漏らした言葉に、城之内は怪訝そうな表情

首をかしげると、ネギはさらに言葉を続ける

「あ、まだ言ってますでしたね。実は二週間ほど前にもう一人、

城之内さんと同じく異世界の方がこの麻帆良に突然やって来たんです」

この突然の情報に、城之内は眼を見開いた

「マジかよ！？じゃあそいつも、世界樹とかいう樹から……」

「はい、それと城之内さんと同じく……童美野町がある世界から、です」

「何だって！？」

さらには、ベッドから降りてネギに詰め寄る始末

「そいつに、今から会えるか！？」

「あ、会えることは会えますが……まず学園長室まで来てもらえませんか？『目が覚め次第連れてくるように』と言付かってますので……」

童美野町がある世界から来た

だとすれば自身がいたのと完全に同じ世界

それに加え、知り合いである可能性が高いのではないか

早く会いたいという衝動に駆られた城之内だが、ネギは慌てつつも城之内へ返答した

少し落ち着きを取り戻した城之内は、静かに口を開く

「……分かった、とりあえずはこの学園長に会ってくりゃいいんだな？」

「はい、今からでも大丈夫ですか？」

「ああ、さっきも言ったがもう身体は平気だ」

既にベッドから降りて両足で立っているのだ

城之内は、大丈夫だとアピールするかのよう伸びし、そのあと腰に両手をあてる

「じゃあ案内しますね、学園長室はこの校舎の上の階ですので」

「おう」

先に保健室から出るネギの後を、城之内はついていった

（学園長室）

「ほうほう……君が世界樹から突如現れたという二人目の異世界人かね」

「……………」

そして入った直後、城之内は学園長を見て絶句する

失礼なので口に出してはいないが、原因は主に頭部

「名前は？」

「じよ、城之内克也……………」

「ふむ、城之内君か…………ん？ワシの顔に何かついとるかね？」

「い、いや！別に何も無いっすけど！？」

『顔にというか、後頭部に随分と何かありますけど』

本音としてはこうなのだが、無論口に出せるはずもなく

「そうかそうか…………一人目の子よりはちゃんと礼儀をわきまえてるようじゃな」

（何て言っただろそいつ…………）

訊きたくなったが、これも流石に自重

「さて、本題に入るかのう…………とりあえず君に対しての処遇じゃが」

城之内はゴクンと唾を飲む

何しろ自分は、この世界では素性も知れない身である

どんなことを言われるのか想像もつかない

コホンと一つ咳払いし、学園長は城之内へこう言い放った

「いつになるかは分かんが、君が元の世界に戻るまで……ワシ
ら麻帆良学園は君を保護することにしよう」

もちろん生活費も負担しよう、と続ける

これには城之内も面食らったようで

「……え？」

拍子抜けした声を思わず口から漏らした

「当然分かってるじやろうが、君はこの世界には本来存在しない人
間……つまり戸籍がない。この学園を出て暮らそうにも、家も借り
られぬし仕事にも就けん。違うか？」

「いや、それはある程度覚悟してたっつーかなんつーか、確かにあ
りがたいんスけど……生活費とかも全面負担？」

「そうじゃ、といっても当然タダ飯食らいはさせんぞ？一つ、ある
仕事をやってもらおう」

「はあ……」

そう言つと学園長は机の引き出しを開け、取り出したのは一枚の資料

建物が一棟カラーで写っており、それを城之内の方に向けてスツと見せる

「これはウチの学園の女子寮の一つなんじゃが……君には、その副管理人をやってもらいたいんじゃないよ」

「……え？」

「じゃから副管理人じゃよ、副管理人。さっき言つた一人目の子に管理人……つまりは寮長をやらせておるから、その補佐を頼みたいんじゃない」

「……え？」

「元々副管理人はおつたんじゃよ？しかし先週突然、理由も説明せずになだ『辞めます』と言つていなくなつてのう……」

「……え？」

「君も彼と同じく童美野町とかいう町の出身だそうじゃし……色々話が合うんじゃないかと思つてのう」

「……は？」

「というわけで早速今日から女子寮で生活してくれ、荷物はさっき手配して送つておいた。なあに、ネギ君も住んでるから大丈夫じゃ

て……何か困ったことがあったら、彼や管理人君に訊けば心配いらんわい」

「……はあああああつ!？」

いきなりの命令、しかも予想だにしない仕事内容

城之内の叫びが、学園長室中に木霊こだました

「あーあ、肉体労働とかならまだしも、何で俺が女子寮の副管理人なんか……」

「まあそう言わないでください……学園長の言うとおり、僕に出来ることなら何でも相談に乗りますから」

「そんなこと言っただって……」

そこから時は少々流れ、現在午前十時半

学園長室を跡にしたのち、城之内とネギは学園内を徘徊していた

個人的には、早く寮に行って一人目の異世界人なる人物に会いたかった城之内

しかし、『先に麻帆良の地理を把握しておいた方が良いじゃろ』と学園長が提案

そういうわけでネギの案内のもと、今に至るわけである

「だってお前まだ十歳だろ？ガキに『相談に乗ります』とか言われてもよお……」

「あ、バカにしないでくださいよー！」

城之内の足取りは重く、歩幅が断然小さいネギの横にようやくついて行ってる状態

不満を漏らす城之内に、ネギは頬を膨らませ抗議した

「とにかく、麻帆良は広いんですから！はぐれないように気を付けてくださいね？」

「（子供に心配される俺って……）まあ、確かにバカ広いよなここ……」

やや俯き気味だった城之内は面を上げ、周囲の風景を見渡す

学校と呼ぶにはあまりにも広いこの麻帆良学園

自身が通う童美野高校とは、比べるまでもないだろう

「幼稚園から大学まで教育機関は一通り揃ってますからね……初めにも言ったでしょ？学園都市って」

（ここって、下手すると童美野町より広いんじゃないか？）

そんなことを考えながら進んでいると、ネギは前方を指出す

「あ、見えてきました。あそこは図書館島と言って、世界中の書物が収容されている国内最大規模の図書館なんです」

「……あれが図書館？」

ネギが指差した場所は、言葉通り『島』

そこに図書館があるから、文字通り『図書館島』

といってもちゃんと陸路はあり、歩いて向かうこと自体は普通に可能である

「あれが……図書館？」

これまた、童美野町のととは比べるに及ばず

思わず同じことを二度呟いた城之内の手を、ネギは掴んで引いていく

「試しに入ってみましょうか。今の時間なら多分、部活で僕の生徒さんがいると思います」

「え？おいネギ！」

「大丈夫、みなさんいい人達ですから。それに副管理人としての挨拶にもなりますし、ね？」

抗う城之内を無理やり連れ

（な、何でこいつガキのくせにこんな力強いんだ！？）

「さ、行きましょう！」

ネギら二人は、図書館島へと足を踏み入れた

第1話 初麻帆良、初決闘（デュエル）？

「うつわ、凄っげえ本の数……見てて頭痛くなってきた……」

「城之内さんは、読書とかはあまりされないんですか？」

「マンガとかは普通に読むけどよ……こういう字ばっかの本はちょっとよ……」

現在図書館島館内の、一階を徘徊しているネギと城之内

ネギの説明によれば、図書館島は地下何十階にも及ぶ超巨大図書館

さらには盗難防止のため罾も多数仕掛けられおり、一般者が入れるのは地上部のみ

その図書館地下を探検する『図書館探検部』なる部活までも存在し、そんな彼らでも入れる階には学年ごとに制限が掛けられるという

「ここって、ホント普通じゃねえよな……」

「まあ、それが麻帆良ですから」

城之内の呟きにネギは苦笑し、辺りを見回す

目的は自身の生徒の搜索なのだが、まだ一人も見つけられていない

「もしかして地下の方に行っちゃってるのかな……」

「なあ、さつさどこ出ねえか？マジで目眩してきそう……」

「そう言わないで、城之内さんも探してくださいよ」

「いや、俺お前の生徒の顔知らねえから……」

「あ、そうでしたね」

歩をゆつくりと進めながら会話を二、三交わす二人

するとネギが突然思い出したように、城之内のズボンのポケットを見やって口を開いた

「……そういえば、城之内さんもデュエルモンスターズされてるんでしたよね？」

「ん？まあな、確かこつちの世界でも流行ってるんだったか？」

城之内はポケットに仕舞っていたデッキを取り出し、ネギに訊き返す

初めにネギが保健室でしてくれた説明で、この世界にデュエルモンスターの存在があることは認知済み

デュエリスト
決闘者である城之内としては、こちらでも決闘デュエルが出来るというのは大変嬉しい話

ちなみに城之内が身に付けていたデュエルディスクは、寮へ荷物として搬送

街中でデュエルディスクを付けて歩き回るといふ習慣は麻帆良にも流石になく（というかデュエルディスク自体市販されてない）、目立つだろうと考慮しての処置だ

そのためセットされていたカードを取り出し、こうしてデッキだけを裸で持っているのである

「はい、僕のクラスでも殆どの人がやってます」

「じゃあお前もやってんのか？」

「とりあえず形だけは……数日前、生徒の皆さんに『やってみたら？』と誘われたんです。ルールはすぐに覚えられたんですが、デッキ構築とかが中々難しくくて」

「カードはちゃんと揃ったのか？話を聞く限り、初めてまだ数日なんだろ？」

「はい、生徒の皆さんが使わないカードとかを分けてくれて。いいんちよさんがアタッシュケース単位で持ってきたのは流石にビックリしましたけど……」

（いいんちよ？ネギの生徒のあだ名か？）

そんなこんなでさらに会話を弾ませる二人

それから数分ほどして、ネギが何か見つけて駆け出した

「いましました、ようやく見つけましたよ……のどかさーん！」

どうやら、目的の人物を探し当てたようだ

城之内もネギの後を追う

見ると、自販機で飲み物を購入している少女が一人

「あ、ネギせんせー、どうかされたんですか？」

ネギの声に気付いた少女、宮崎のどかは取り出し口から飲み物を取るとネギの方を向いた

他の者にも買ってくるよう頼まれたのか、さっきの一個以外にも数個ほど飲料パックを抱えている

「いえ、ちょっと寮の新しい副管理人さんと案内がてら学園内を回っていました。寮住まいの人を見つけたら軽く紹介しようと思ってたんです」

「副管理人さんって……今こっちに歩いて来てるあの人ですか？」

ネギの話を一通り聞くと、向かってくる城之内をのどかは指差す

「はい、一応のどかさんだから教えておきますけど、あの人も管理人さんと同じで……」

「え、二人目ですか!？」

「そういうことです、ですのでこのことは夕映さんとか以外には…

…」

「わ、分かりました」

のどかが事情を聞いて了解すると、ちょうど城之内はネギの横で立ち止まった

「よお、城之内克也だ。突然副管理人になっちまったんだけど、よろしくな」

「は、はい、宮崎のどかです……こちらこそよろしくお願いします」

初対面の城之内にオドオドした様子を見せながらも、のどかは飲料をバックを落とさぬよう浅く頭を下げる

「ところでどかさんは、買い出し何かですか？」

「はい、地下一階にいる夕映達の分を。部活の休憩中にみんなで決闘^{デュエル}してたんですけど、人数が奇数だったので余った私が買いに」

「お、決闘^{デュエル}してんのか！」

「……城之内さんも決闘^{デュエル}されるんですか？」

「当然、デッキだってほら！」

のどかが尋ねると、城之内は誇らしげに自身のデッキを彼女へ見せた

「のどか、って言ったよな。俺もそこ行ってみていいか？」

「え？まあ、地下一階くらいなら部員の私が同伴すれば大丈夫とは思いますが……」

「よし、決まりだな！俺もそこに行つて決闘する！」
デュエル

「え！？」

デュエル
決闘と聞いて血が騒いだのか、城之内のテンションが上がっているのが容易に見て取れる

ネギは思わず、くすつと笑みを見せた

「……では僕からもお願いします、のどかさ」

「は、はい……ネギ先生がそう仰るなら……」

ネギの笑顔に顔を赤らめ、のどかは二人に背を向けて歩き出す

「え、えと、こっちです……」

「あ、飲み物少し僕も持ちますよ」

「じゃあ俺も」

「ありがとうございます……」

三人は一路、図書館島地下一階へと進んでいった

そして数分し、程なく到着

「着きましたー」

「うわ、一階より回り一面本だらけ……」

「地下だから少し暗いので、足元気を付けてくださいねー」

地下図書館は初めてである城之内に、探検部部員であるのどかはしっかりと注意を払う

一度入ったことがあるネギは、そのへんは分かっているのか城之内よりも足取りは落ち着いていた

「んで、どこで決闘^{デュエル}してんだ？」

「あそこです」

のどかが指差す先には、複数の明かり

見ると、本来読書用と思わしきテーブルの上でカードを広げる少女達が数組

近づいていくと、その中の一番手前側の一組の勝負が決着を迎えていた

「じゃあ私のターンですね、ドロ……あ、来たです」

「え！？マジで！？」

「はい、ほら。これで私の逆転勝ちですね」

「うわー！もうちょっとだったのにー！」

勝ったのは、城之内達から見て左側

広いデコが印象的なその少女は、自らの手札を相手に見せて軽く笑み

その相手の方は悔しそうな顔をした後、テーブルにバタンと突っ伏す

こちらは下縁メガネと、頭頂部にある触覚のような髪型が印象的

「ゆえー、ハルナー、ただいまー」

「あ、お帰りですのどか。お願いした抹茶コーラはあったですか？」

「うん、はいこれ」

「どうもです」

勝った方、綾瀬夕映はのどかから『抹茶コーラ』なる怪しげな飲

み物を受け取り

「ネギ君も来たんだ……って、そっちのお兄さん誰？」

負けた方、早乙女ハルナはネギと城之内の存在に気付き、首を傾げた

「へー、私達の寮の新しい副管理人さんか……ようやく見つかったんだ」

「まあ、そういうことです」

「城之内克也だ、よろしくな」

それから、簡単な紹介を夕映達二人に済ませたネギ

納得したような表情でハルナは頷き、夕映はいつも通りの表情を保ったまま

既にのどから受け取った抹茶コーラにストローを刺し、チューチューと飲み進めている

「そういえば、木乃香さんは来てないんですか？」

「木乃香さんなら、今日は占い研究会の方に行ってるです」

もう一人いるはずの自分の生徒を探すネギだが、夕映が即座に説明

次にハルナが、城之内の方にぐぐつと顔を突き出した

「城之内さん、手に持ってるそれって城之内さんのデッキ？」

「ん？そうだけどそれがどうした？」

「やつぱり……ねえねえ、挨拶も兼ねて今から決闘デュエルしない？」

「お、いいじゃねえか！」

元より、決闘デュエルするつもりで地下までやってきた城之内だ

このハルナの申し出には、快く了承した

「ただし、相手は私じゃなくて……こっち」

「ちよつ、ハルナ！？」

するとハルナは、隣にいた夕映の服を掴んでこちら側へ引き寄せる

「図書館探検部中等部部員一の実力者。この、ゆえっちこと綾瀬夕映がね」

「……流れるに、そこはハルナが相手をするべきなのでは？」

「いやいや、ここは城之内さんの実力を測るべく一番強い夕映に……
…ね？」

「要は観戦側に回りたいと」

「そういうこと、てことでよろしく」

ジト目で見てくる夕映の背を、ハルナは笑いながらポンと叩く

夕映は渋々といった様子で席に着き直し、ハルナは自分が座つて
た席に城之内を座らせる

「よし、麻帆^{いっち}良に来てからの初決闘^{デュエル}！燃えてきたぜ！」

「じゃあさっさと始めましょうか、まず初めにデッキシャッフルを」

「おう！」

城之内と夕映は互いに相手のデッキを受け取り、シャッフル

「ところで、ライフは4000と8000どっちにするです？」

「……普通4000だろ？」

「いや、公式ルールでは8000でしょ……まあ、私達の間では時間短縮を目的で4000にすることもたまにあります」

「（こっちではそういうルールも変わってんのかよ……）じゃあお

前に任せる」

「では、個人的に早く終わらせたいので4000にします」

それが終わるとデッキを返却、返してもらった自分のデッキを右手側に置き

「^{デュエル}決闘！」

二人の勝負が始まった

第1話 初麻帆良、初決闘（デュエル）？

「じゃあ俺が先行だな、ドロー！」

じゃんけんにより、先攻は城之内

実はこれの少し前、城之内が

『先攻はもらうぜ、俺のターン！』 『ちよつ、いきなり何やってる
ですかあなたは！』

と、勝手に始めたので夕映が慌てて制止

改めてじゃんけんで決め直し、今に至る

（そういや、デュエルディスクを使わず決闘するのにも久しぶりだよ
な……）

バトルシテイ
決闘都市が始まるよりもより前

学校の教室で遊戯デュエルらと決闘していたのを思い出す城之内

（遊戯達、どうしてんだろっな……って、今は決闘デュエルに集中しねえと
！）

そんなことを考えながらも、城之内は手を決めフィールドにプレイする

「よし、まずはこいつだ。漆黒の豹戦士パンサーウォリアーを攻撃

表示で召喚」

漆黒の豹戦士パンサーウォリアー

攻撃力2000 / 守備力1600

（む、一ターン目からいきなりデメリットモンスターですか……）

「リバースカードを二枚セットしてターンエンドだ」

城之内 LP 4000 手札3

「私のターン、ドロー」

とりあえず夕映は、城之内のフィールドを改めて確認

（パンサーウォリアーは攻撃時にモンスターのリリースが必要なカード……同じ獣戦士族のジェネティク・ワーウルフの存在を考えれば、普通の戦闘型デッキで率先して採用されることはまず無いです）

ジェネティク・ワーウルフ

攻撃力2000 / 守備力1000

（強いて勝る点を挙げるなら、攻守合わせた総合的なステータスの高さ……となれば、伏せカードはその補助カードの可能性が高いですね。おそらくスキルドレインか、トークン生成カード。もしくは次のターンに、何か相性の良い効果モンスターを召喚するか……）

しばし思考した後、夕映は場にカードをセット

「……モンスターを裏守備でセット、続いて伏せカード一枚でターン終了です（まずは様子見ですね）」

夕映 LP4000 手札4

「おっと待った、エンドフェイズ時にリバーズカードオープン。スケープゴートだ！」

（やはり補助カード！）

「このカードの効果で、俺のフィールドに四体の羊トークンを守備表示で特殊召喚する」

羊トークン×4

攻撃力0 / 守備力0

「これでパンサーウォリアーのための生贄は確保出来た……俺のターン、ドロー！そのままバトルフェイズ、羊トークンを生贄にしてパンサーウォリアーで攻撃！」

漆黒の豹戦士パンサーウォリアー 攻撃力2000

VS

裏守備モンスター 守備力？

「攻撃を通します、伏せモンスターは不幸を告げる黒猫です」

不幸を告げる黒猫

攻撃力500 / 守備力300

不幸を告げる黒猫 破壊！

「よし、文句なしで撃破だぜ！」

「ただし表になったことで効果発動、デッキから罠カード一枚を選択してデッキトップへ置きます。置くのは便乗です」

（便乗？そっぴゃそんなカード、あつたような無かつたような……）

「もうバトルフェイズは終了ですよね？」

「あ、ああ……メインフェイズ2にワイバーンの戦士を召喚」

ワイバーンの戦士

攻撃力1500 / 守備力1200

「これでターンエンドだ」

城之内 LP4000 手札3

「（ワイバーンの戦士！？何でそんな雑魚モンスターを！？パンサーウォリアーと併せて考えるなら、獣と獣戦士を混ぜたビーストデツキ？確かに同じ獣族である巨大ネズミで呼び出すのは可能ですが……）私のターン、ドロー。モンスターをセットして伏せカードを一枚、これでターンを終了します」

夕映 LP4000 手札3

「俺のターン、ドロー！そのままバトルフェイズ、羊トークンを生

賛にしてパンサーウォリアーで攻撃！」

漆黒の豹戦士パンサーウォリアー 攻撃力2000

VS

裏守備モンスター 守備力？

「伏せモンスターはキラートマトです」

キラートマト

攻撃力1400 / 守備力1100

キラートマト 破壊！

「よし！また撃破！」

「キラートマトの効果発動、攻撃力1500以下の閥属性モンスターを攻撃表示で特殊召喚。出すのは二体目のキラートマトです」

「ならそいつもぶっ倒してやる！ワイバーンの戦士で攻撃だ！」

ワイバーンの戦士 攻撃力1500

VS

キラートマト 攻撃力1400

キラートマト 破壊！

夕映 LP4000 3900

「これくらいのダメージなら無問題です。キラートマトの効果を発動、D・HEROディフェンドガイを特殊召喚です」

D・HEROディフェンドガイ
攻撃力1000 / 守備力2700

「守備力2700だと！？遊戯のビクシールドガードナーより高い守備力じゃねえか！」

「（遊戯って誰です？）まあそういうことです、次のターンで守備に変更して壁にさせてもらいます」

「城之内さん気をつけてよ。高い守備力もそうだけど、ディフェンドガイのモンスター効果は夕映の便乗と……」

「ハルナ、そういう助言の類は慎むです」

ハルナが城之内に何か言おうとするが、それを夕映はピシヤリと黙らせる

事実、そういった行為はマナー違反として取られても文句は言えない

（俺のデッキのモンスターだと、純粋な戦闘で倒せるのはギルフォードしかいねえな……しかもまだ手札には来ていない）

ギルフォード・ザ・ライトニング
攻撃力2800 / 守備力1400

「（早いところ引き当てねえと……）ロケット戦士を召喚してターンエンドだ」

ロケット戦士

攻撃力1500 / 守備力1300

城之内 LP4000 手札3

（ようやく少しはまともなモンスターが……つてええ！？今度は何故に戦士族！？）

「どうした？お前のターンだぞ？」

「わ、分かってます……（いよいよ訳が分からなくなってきましたです……あの人のデッキは一体何なんです！？）ドロー」

原因が自分のデッキ構成のせいだとも知らずに、何事かと夕映に声を掛けた城之内

夕映は悟られぬよう、平静を装ってプレイを続行する

しかし、驚いているのは何も夕映だけではない

（な、何よこの手札……）

後ろに立って観戦してるため、城之内の手札が見えているハルナはより顕著だった

城之内の手札

インセクトクイーン
昆虫女王

格闘戦士アルティメーター

おろかな埋葬

インセクトクイーン
昆虫女王

攻撃力2200 / 守備力2400

格闘戦士アルティメーター

攻撃力700 / 守備力1000

（おろかな埋葬はまだ分かるとしても……他の二枚が場のカードと比べてバラバラ、それにアルティメーターはどのデッキにも普通入らない！）

「メインフェイズ、ディフェンドガイを守備表示に変更。そして伏せていた速効魔法、手札断殺を発動するです」

夕映は伏せていたカードを捲り、続いて手札を四枚の内二枚墓地に送る

「手札を二枚墓地に送った後、デッキから二枚ドロします。これは双方のプレイヤーに影響するので、城之内さんも墓地に送ってカードを引いてください」

「つまり手札入れ替えカードか……」

「そうです、というか結構メジャーなカードですよ？」

夕映が墓地に送ったカード

暗黒界の取引

ダーク・バースト

「よし、じゃあ俺はこの二枚にする」

城之内が墓地に送ったカード

インセクトクイーン
昆虫女王

格闘戦士アルティメーター

（うんうん、普通それだよね……ってうわ、やっぱり夕映ビックリしてる）

（な、何故に昆虫族の最上級モンスターと低レベル戦士族のバニラですか！？）

「それで、互いに二枚ドローだな」

「は、はいです」

（今度は一体どんなカード？）

ハルナが再び覗き込む

城之内が引いたカード

悪魔のサイコロ

クイズ

（つて、ギャンブルカード……）

「では城之内さんが通常ドロー以外でカードをドローしたため、伏せていた罠カードを発動します。さっきあなたも見た便乗です」

「便乗……」

「発動以降あなたが通常ドロー以外でカードをドローする度、私はカードを二枚ドローするです」

（俺のデッキにドロー加速カードは殆ど入ってない……大して問題ないな）

「続いて手札から、二枚目の手札断殺を発動します」

「また手札交換かよ……つて、まさか！」

「その通り、この効果であなたはカードをドローするため、私は追加で二枚ドローが可能です。さ、手札を捨てて早くドローするです」

「く、くそ……」

夕映が墓地に送ったカード

ダスト・シユート

深淵の暗殺者

深淵の暗殺者

攻撃力200 / 守備力500

「この瞬間深淵の暗殺者の効果発動、墓地にあるこのカード以外のリバー効果モンスターを手札に。これにより不幸を告げる黒猫を墓地から加えます」

「しかもさらに手札が増えるのかよ……」

城之内が墓地に送ったカード

悪魔のサイコロ

クイズ

「そして互いに二枚ドローです」

夕映 手札4

城之内 手札3

「便乗の効果で、私はさらに二枚ドローです」

夕映 手札6

「手札が一気に六枚に……」

「モンスターをセットして伏せカードを二枚、これでターン終了です（今度はギャンブルカード……）」

夕映 LP3900 手札3

「俺のターンだ、ドロー！」

「ではディフェンドガイの効果発動、このカードが相手ドローフェ

イズ時に表側表示で存在しているのでさらに一枚ドローしてください」

「ビックシールドガードナーと同じでデメリット搭載ってわけか、けどこの場合のドローは……」

城之内 手札5

「私にはメリットなのです。便乗の効果で私も二枚ドローします」

夕映 手札6

（お、ようやく一枚来たですか……とりあえず、しばらくはディフェンドガイに守って貰っ）

「よし、来たぜ！俺はワイバーンの戦士を生贄に、人造人間サイコシヨッカーを攻撃表示で召喚だ！」

人造人間サイコシヨッカー

攻撃力2400 / 守備力1500

「なっ、今度は機械族のサイコシヨッカー！？」

「このカードがいる限り、場の罨カードは無効。したがって便乗の効果も発動は出来ないぜ！」

（くっ、さっきのディフェンドガイのドローで引かれたですか……）

「ナイスじゃない城之内さん！これで次のターンから、ディフェンドガイの効果で一方的に追加ドローが……」

「いや、俺はここで一気に攻めさせてもらう」

ハルナが言い終わるより先に、城之内は手札からもう一枚のカードを手にとった

「続いて速効魔法、天使のサイコロを発動」

「またそんな不確定要素満載のカードを……」

「サイコロを振って、自軍のモンスターの攻守を出た目×100ポイントアップさせ……あ」

カード効果を言って得意気になったところで、城之内の口が止まる

「ど、どうしたですか？」

「……悪い、お前サイコロ持っていないか？」

「何故にあなたが持っていないのですか!？」

「（デュエルディスク使うと本物いらねえんだよね……）い、いや、ちよつとすっかり忘れちゃったみたいで……」

「私はサイコロ処理のカードはデッキに入れてません、なのでサイコロも持っていないです」

「じゃあ私の使っているですよ？デッキに一枚サイコロ処理カードを入れてるんで、普段から持ち歩いてるんです」

「お、助かったぜ！というわけでそら！」

ハルナからサイコロを受け取り、城之内はポイと放る

（ディフェンドガイの守備力とサイコショッカーの攻撃力の差は300、つまり……）

（4以上の目で当たり、確率は二分の一だ！）

サイコロの出目 5

「うつ……」

「よっしゃ！これで俺の場のモンスターの攻守は全部500ポイントアップだ！」

人造人間サイコショッカー

攻撃力 2400 2900

守備力 1500 2000

漆黒の豹戦士パンサーウォリアー

攻撃力 2000 2500

守備力 1600 2100

ロケット戦士

攻撃力 1500 2000

守備力 1300 1800

羊トークン×2

攻撃力 0 500

守備力0 500

（あれ？これって夕映けっこうやバくない？）

「羊トークン二体を攻撃表示に変更して、バトルフェイズ！」

（ぐぐ、伏せていた罠カードが使えないです……）

「サイコショッカーで、ディフェンドガイを攻撃！」

人造人間サイコショッカー 攻撃力2900

VS

D・HEROディフェンドガイ 守備力2700

D・HEROディフェンドガイ 破壊！

「よし！これで厄介な壁モンスターは消えた！」

（残りのモンスターの総攻撃力は5500、対して夕映は伏せモンスター一枚で残りライフ3900……）

（羊トークンで攻撃してそのまま戦闘破壊出来れば、残りのモンスターの攻撃で俺の勝ちだ。あれが守備力300の不幸を告げる黒猫ってというのが理想パターンだが……）

（どっちで来るです？羊トークンか、それとも他の二体のどっちかか……）

「（ここは、一気に勝ちにいくぜ！！）羊トークンで伏せモンスターを攻撃！」

（よし！）

羊トークン 攻撃力500

VS

裏守備モンスター 守備力？

「どうだ！」

「伏せモンスターを不幸を告げる黒猫と読んだようですが……残念ながら違います」

「なっ、クリッターだと！？」

クリッター

攻撃力1000 / 守備力600

城之内 LP 4000 3900

（うわ、このミスはちょっと痛いかな……）

「だ、だったらロケット戦士で攻撃だ！」

ロケット戦士 攻撃力2000

VS

クリッター 守備力600

クリッター 破壊！

「クリッターの効果発動、デッキから攻撃力1500以下のモンスター……（向こうにはサイコショッカー、もうなりふり構ってられないです）封印されしエクゾディアを手札に加えるです！」

封印されしエクゾディア

攻撃力1000 / 守備力1000

夕映 手札7

「エ、エクゾディアだと！？」

「はいです（そっぴいえばエクゾディアパーツを公開情報として晒すのはこの決闘中^{デュエル}で初めてでしたね……もしかして、そういう目的のデッキ構成だと気付いてなかった？）」

（そっぴなのよね……夕映の使うデッキは、通称便乗エクゾ。手札入れ替えカードや相手にドロさせるデメリット効果を持ったモンスターを筆頭に、便乗での高速ドロを狙ってエクゾディアを完成させるデッキ。本来なら勝負が必然的に長くなる初期ライフ8000が一番強さを発揮するけど、4000でもデッキが回れば一気に勝ちに行ける。事実4000でやつても勝率五割以上は普通にいつてるし……）

「（エクゾディアといえはあの時のトラウマが……けど初期ライフが8000じゃなかったのは好都合！さっさと向こうのライフを削

りきつてやる！）もう一体の羊トークンでダイレクトアタック！次に羊トークンを生贄にして、パンサーウォリアーでダイレクトアタック！」

羊トークン 攻撃力500

漆黒の豹戦士パンサーウォリアー 攻撃力2500

夕映 LP3900 3400 900

「ターンエンドだ！」

城之内 LP3900 手札3

「（もし先にロケット戦士で攻撃してきてたら、残りライフは僅か400……天使のサイコロとサイコソッカーは想定外でしたが、これは幸運だったです）私のターン、ドロー！」

（これで、向こうの手札は合わせて八枚か……）

「（くっ、折角地砕きが引けたのにパンサーウォリアーが邪魔です……少しリスクは伴いますが仕方ありません）手札から、電動刃^{チェインソー・インセクト}を召喚、バトルフェイズに入ります」

チェインソー・インセクト
電動刃虫

攻撃力2400 / 守備力0

「今度は攻撃力2400の四つ星モンスターか！」

「パンサーウォリアーに攻撃です！」

チェンソー・インセクト
電動刃虫 攻撃力2400

VS

漆黒の豹戦士パンサーウォリアー 攻撃力2000

漆黒の豹戦士パンサーウォリアー 破壊！

城之内 LP3900 3500

（伏せカードは最初のターンから伏せていた鎖付きブーメラン……サイコシヨッカーがいるから使えないな）

「（よし、速効魔法の類は無かったですね）チェンソー・インセクト電動刃虫の効果発動、このカードが戦闘を行った後相手プレイヤーはカードを一枚ドロします」

「けど、便乗は無効化されてるからお前のドローは無いな」

城之内 手札4

「もうその無効化も終わりです、メインフェイズ2に入って手札から地砕きを発動。守備力の一番高いサイコシヨッカーを破壊です」

人造人間サイコシヨッカー 破壊！

「なっ、そんなカードを引いてたのか！くそ……」

「これで再び便乗が使えます。次に伏せていた神の恵みを発動、力

ードを二枚伏せてターン終了です」

夕映 LP900 手札4

「俺のターンだ、ドロー！なら今度は無効どころか破壊してやる、手札からサイクロン発ど……」

「カウンター罠、魔宮の賄賂発動。サイクロンを無効にして破壊です」

「……もしかして、それもドロー効果付属か？」

「当たりです、無効にした後相手はカードを一枚ドローします」

城之内 手札5

「よって便乗の効果で二枚ドロー、さらに神の恵みの効果でライフ回復です」

夕映 LP900 1400 手札6

（よし、これでパーツカードは三枚……）

「なら羊トークンを守備表示に変更して、手札からリトル・ウィンガードを召喚！」

リトル・ウィンガード

攻撃力1400 / 守備力1800

「さらに稲妻の剣を装備して、攻撃力を800ポイントアップさせ

るぜ」

リトル・ウイングガード

攻撃力1400 2200

（成程、ロケット戦士の効果を使う気ですね。さて、どうするですか……）

「ロケット戦士、無敵モードに変形！電動刃虫チエーンソー・インセクトを攻撃だ！」

「……通しますです」

ロケット戦士（無敵モード） 攻撃力1500

VS

電動刃虫チエーンソー・インセクト 攻撃力2400

「ロケット戦士の効果で、無敵モード中は戦闘で破壊されず俺への戦闘ダメージも0！」

「そして攻撃したモンスターの攻撃力を、ターン終了時まで500下げる。」と」

電動刃虫チエーンソー・インセクト

攻撃力2400 1900

「戦闘自体は行ったから、そいつの効果で俺はカードを一枚ドロ」

城之内 手札4

「そして便乗の効果で、私も二枚ドロです。同時に神の恵みでライフ回復」

夕映 LP1400 1900 手札8

「だがこれで、そのクワガタ虫の攻撃力はリトル・ウィングガードより下回った！攻撃だ！」

「ふ、甘いですね……」

「何？」

リトル・ウィングガード 攻撃力2200

VS

チエーンソー・インセクト
電動刃虫 攻撃力1900

「私がサイコショッカー召喚前から伏せてたカードを忘れたですか？畏発動、聖なるバリアミラーフォース」

「げげっ！？」

リトル・ウィングガード 破壊！

ロケット戦士 破壊！

「相手攻撃表示モンスターを全破壊。羊トークンをあらかじめ守備に変えられていたのが少々残念でしたが」

「……ロケット戦士の攻撃時に発動しなかったのは、便乗でのドロ
ー狙いだったわけか」

「そういうことです、見事引つ掛かってくれてこちらも大助かりで
す」

「モンスターは戦闘前に破壊されたからドロー効果は無し……カー
ドを二枚セットしてターンエンドだ」

城之内 LP 3500 手札 2

「私のターン、ドロー。神の恵みでライフを回復」

夕映 LP 1900 2400

「手札から魔法カード、封印の黄金櫃発動です」

「封印の……黄金櫃？」

「（このカードも知らないですか……）デッキからカードを一枚選
択してゲームから除外、二ターン後のスタンバイフェイズに手札に
加える効果です」

「何！？まさかそのカードってのは……」

「言うに及ばず、これです。デッキから封印されし者の左腕を選択、
ゲームから除外」

封印されし者の左腕

攻撃力200 / 守備力300

「これで少なくとも二ターン後、手札にはパーツカードが二枚……」

「（既に今の時点で手札に三枚ありますがね）そしてさらに、伏せていたもう一枚発動です」

「何だと!？」

「お次は、封印されし者の右足をゲームから除外しますです」

封印されし者の右足

攻撃力200 / 守備力300

（これで二ターン後、私のエクゾディアは完成です）

（こりゃ城之内さんも終わったかな…… 夕映が黄金櫃使うのは、これで手札に加えた分と、今ある手札のを合わせて五枚全部揃う」
時が殆ど、でなきゃパーツを晒すデメリットが大きいし。てことは今夕映の手札にはパーツカードが三枚か……）

（といっても、来るのは二ターン後ですからライフを0にされる可能性も否定出来ません……ここは場も制圧して二段構えでいかせてもらいましょう）

夕映は城之内の墓地ゾーンを見据え、さらに手札から魔法カードを仕掛ける

「そして、最後に手札から死者蘇生を発動。あなたの墓地のサイコショッカーを私の場へと特殊召喚」

「げげっ！？だけど、そんなことしたらお前の便乗の効果が使えなくな……」

「あなたの伏せカードを封じる方が重要です、そんなに焦るということとは三枚とも罨カードですか？もしくはブラフとか」

「うつ……」

（図星ですか……というかもう便乗は必要無いんですよ、パーツカードはもうデッキに残っていませんし）

夕映は失礼と一言述べ、城之内の墓地からサイコショッカーを拝借

攻撃表示で電動刃虫の右隣へと置いた
チエーンソー・インセクト

「チエーンは無いですよね？」

「あ、ああ……」

「ならバトルフェイズ、サイコショッカーで羊トークンを攻撃です」

人造人間サイコショッカー 攻撃力2400

VS

羊トークン 守備力0

羊トークン 破壊！

「さ、最後の羊トークンが……」

「これであなただの場のモンスターは全て無くなりました、チェーンソー・インセクト電動刃虫でダイレクトアタックです」

チェーンソー・インセクト
電動刃虫 攻撃力2400

「ぐ、ぐうつ……」

城之内 LP3500 1100

「だが、チェーンソー・インセクト電動刃虫の効果でカードを一枚ドローするぜ」

「どうぞです、サイコショッカーがいるので私のドローとライフ回復はありません」

城之内 手札3

（！？これは……）

「（何かいいカードでも引いたですか？ここは念のため……）モンスターをセット、伏せカードを二枚セットしてターン終了です」

夕映 LP2400 手札4

（伏せモンスターはライトニング・ボルテックス系統のモンスター破壊カード対策。それに伏せカードは月の書と強制脱出装置……これで次にどんな手が来ても無問題です、ライフも2000以上あります）

「……俺のターン」

城之内はゆつくりとデッキに手を伸ばし、カードの端をつまむ

「（頼む！来てくれ！）ドロー！」

オーバークションでデッキトップからカードを引いた城之内

そのカードを視界の中へと入れ、おそろおそろ確認する

「……………来た！」

直後、城之内の顔に浮かんだのは歓喜の表情だった

（え、嘘！？つまりこれって…………いや、だけど…………）

そしてハルナも城之内の手札を改めて確認し、その事実気付く

「まずは魔法カード、ハリケーン発動！場の魔法・罠カードを全て持ち主の手札へと戻す！」

「し、しまったです！」

城之内 手札6

夕映 手札7

「これで罠カードを警戒する必要はなくなったぜ！次に、時の魔術師を攻撃表示で召喚！」

「何ですと!？」

時の魔術師

攻撃力500 / 守備力400

「こいつのモンスター効果を発動だ! コイントスで表裏を当て、当たればお前の場のモンスターは全滅、外れれば俺の場のモンスターが全滅する」

(表裏関係なくですから、伏せモンスターもろとも破壊されてしま
うです……)

「コインコインと……あ、あったあった。それじゃあ俺は表を選
択する」

城之内が自らのズボンのポケットを漁ると、ちょうど出てきた一
枚の百円玉

それを右手親指の爪に乗せ

「よっ!」

指パッチンの要領で指を弾き、コインを真上へと飛ばす

(そう簡単に当たるわけないです……それに、仮に当てたところで
……)

一秒も経たず、コインはチャリンと音を立ててテーブル上に落下

「……………よっしゃ、大当たりだぜ!」

コイントスの結果 表

「くっ……」

桜の描かれた表の面がそこにはあった

「これで、お前の場のモンスターは全破壊！」

人造人間サイコショッカー 破壊！

チェーンスー・インセクト
電動刃虫 破壊！

裏守備の闇の仮面 破壊！

闇の仮面

攻撃力900 / 守備力400

「サイコショッカーは返してもらっぜ！」

城之内は手を伸ばし、サイコショッカーを手に取ると自らの墓地へと戻す

「し、しかし時の魔術師の攻撃力はたったの500、次のターンで体勢を立て直……」

「いや、お前に次のターンはねえ」

「!？」

「お前がロケット戦士の攻撃を通してくれたおかげで、俺はこのカード達を手札に揃えられた……行くぜ！手札から融合を発動だ！」

「融合！？」

「場にいる時の魔術師と、手札のベビードラゴンを融合……」

ベビードラゴン

攻撃力1200 / 守備力700

「融合召喚！数百年の時を経て、ベビードラゴンは千年竜へと姿を変える！」

サウザンド・ドラゴン

千年竜

攻撃力2400 / 守備力2000

「そ、そんな……ドラゴン族の融合モンスターまで……」

「バトルフェイズ、これでトドメだ！千年竜でダイレクトアタック！」

サウザンド・ドラゴン

千年竜 攻撃力2400

夕映 LP 2400 0

「ま……負けました、です……」

「夕映が、負けた……」

「よっしゃー！」

啞然とする夕映とハルナ

一方で城之内は、右手の握り拳で嬉しそうにガッツポーズを決めていた

これが城之内、麻帆良での初めての決闘^{デュエル}

「俺の逆転勝ちだぜ！」

そして、初めての勝利

第1話 初麻帆良、初決闘（デュエル）？

「くっそ、あのデコチビめ……何が『あんな下手くそ構築デッキに二度も負けません』だよ……」

「まあまあ、決闘^{デュエル}自体はちゃんと勝てたんですからいいじゃないですか」

図書館島地下内で先程行われた、城之内の麻帆良初決闘^{デュエル}

エクゾディア使いの実力者、綾瀬夕映を得意のギャンブルカードを使い逆転

それが終わり、ネギと共に図書館島を跡にして今に至る

実際のところ、夕映はあの敗北に納得がいかなかったようで

『今すぐ8000制で再戦を申し込むです！』

と、決闘終了直後城之内に再戦を要求^{デュエル}

しかしあらかじめ設定していた部の休憩時間が終了し、夕映やハルナはやむ無く部活動を再開

じゃあ帰るか、と城之内達が地下を出ようとしたところで『下手くそ構築デッキ』等と吐いたのである

そのため、互いに対する嫌悪感が残ったままの状態

相手が自分の生徒なだけに、ネギは必死に城之内を宥めていた

「それに夕映さんとは、城之内さんが副管理人をする女子寮でこれからも顔を合わせるんですから……早く仲直りしてくださいね？」

「そういやそうだったな……デュエル決闘に夢中でしたっかり忘れてたぜ……」

これから自分が送る生活を思い出し、再びげんなりする城之内

自然とまた、その足取りは重くなってゆく

「性格悪いガキは嫌いなんだよ……しかもああいうのに限って能弁だし」

「そう言えば、夕映さんのお爺さんは哲学者だったそうなんです。哲学研究会にも所属してますし、ちょっと言い方が厳しいのはその影響かもしれませんね。僕からも言っておきますので、さっきのことは大目に……」

「うわ、余計に悪印象」

「え！？」

フォローしようとしたのだが、逆に裏目

城之内はさらに顔を嫌そうにし、ネギの横について歩いて行く

慌てて別のことを言おうとするネギだが、上手く言葉が出てこない
すると、ふと城之内はその足を止めた

「……そういや、腹減ってきたな」

「え？あ、ホントだ、もうすぐ正午ですね」

元の世界でも、バトルシップを降りてから何一つ食べていなかった城内

ラーの攻撃に倒れて、それから何時間経ったのかは分からない

だが、今現在自分が空腹になっているということは容易に把握出来た

ネギも近くにあった時計柱を見上げ、城内の言葉に同意する

「城内さん、お昼どうしますか？」

「どうするつたって、俺あんま金がな……」

あるのはポケットに入っていた小銭数枚

しかし合わせて五百円と少しで、昼食代としては少々役不足か

「じゃあ僕が奢りますよ。先生の仕事でちゃんと給料貰ってるので、今も少しくらいならお金持ってます」

「いや、十歳の子供に奢られるってのもちょっと……」

「うーん、困りましたね……あ、そうだ！」

「ん？どうした？」

ネギは踵を返し、少し先にある駅の方へと向かって歩き出す

「城之内さん、今からもう女子寮に行きませんか？この時間なら木乃香さん部活から帰ってると思いますし、ちょっと頼んで作ってもらいましょう」

「木乃香？」

「あ、ネギ君おかえりー」

それから数十分後、城之内はネギと共に女子寮に到着

数人の女子生徒からの視線を少々気にしながら、ネギの住む645室の前に立っていた

そんな彼らを出迎えたのは、エプロンをつけた黒髪ロングストリート少女

ネギの生徒が一人、近衛木乃香である

「よかった、やっぱり帰ってたんですね」

「占い研究会の部活は午前中で終わったからなー、でもネギ君急にどないしたん？今日お昼は外で済ませる言ってなかった？」

「実は、こっちの方に昼食を作ってもらえないかと……」

「……その人誰？」

「それについても詳しく話したいので、とりあえず部屋の中に」

「うん、ええよー」

木乃香がささつと引き返し、部屋の中のキッチンへと戻る

どうぞとネギが言うので、城之内は靴を脱いで入室

続いてネギが上がったところで、ボソリと城之内はネギの耳に口を寄せた

「なあネギ……お前、自分の生徒と同居してんのか？」

「はい、木乃香さんもアスナさんもみんな優しくて良い人です」

（……………まあ十歳のガキだし、仕方ねえ……………のか？）

少々疑問が残りつつも城之内は歩を進め、カーペットの上で腰を下ろす

するとすぐに、皿に盛られたチャーハンがテーブルの上に置かれた

「はい、ちょっと作り過ぎてたから助かったわ」

「お、サンキュー」

「ネギ君も食べてくやる？」

「は、はい。それじゃそうします」

まるで予め用意してあったかのように、その後食卓の上には三人分のチャーハン

「」「」「いただきます」「」「」

手を合わせ（城之内も二人に合わせた）、三人は昼食をとり始めた

「へー、ここの寮の副管理人さんになるんやー」

「はい。それに管理人さんと同じで、実はこの人も世界樹から今朝突然……」

「あ、そうだったんや……だからネギ君、お昼いらん言ったんやね」
そうして腹を満たしながら、ネギは木乃香に城之内のことを紹介
木乃香はうんうんと頷き、蓮華を使ってチャーハンを口に運んで
いく

「城之内克也だ、というわけでよろしくな」

「ウチ近衛木乃香、よろしゅうな」

簡単に挨拶を交した二人

それから数分とせず、城之内はチャーハンを完食

「ごちそうさん、美味かったぜ」

「お粗末さまでした、ありがとな。あ、食器くらいウチが運ぶのに」

「飯ご馳走してもらったんだ、こんくらいは俺がしないとな」

城之内は蓮華を皿の上に乘せ、それごと持って流しへと持っていく

丁寧にそれを下ろすと、そのまま玄関へ

「ネギ、俺が住む部屋まで案内してもらっていいか？場所分かるだ
ろ」

「は、はい」

「さつさとその管理人とやらにも会ってみたいしな」

副管理人である城之内が住むのは、管理人と同じく管理人室

当然寮内にあるので、ネギもちろん場所は知っている

ネギもタイミングよく食べ終わり、食器を運んですぐ城之内の後を追う

「あ、城之内さん管理人さんと会っくんや」

「ああ、何でも俺と同じ世界から来た可能性が高いらしい」

「そか……あの人ちょっと怖い思っくんかもしれへんけど、一緒に住むんやから仲良おしてあげてな？」

「……それは外見か？中身か？」

「が、木乃香の言葉に城之内は足を止め、それに伴ってネギも止まった

「うーん……両方、かなー。いつも怒ったような顔してて、それに怒りっぽくてすぐウチらに怒鳴るんよ。けど、根は多分そんな悪い人やない思っくん」

「両方……」

「実はここだけの話、前の副管理人さんが辞めたのはその人のせいやって噂が一時期流れたことがあってん。ウチはそうは思っくんへん

けどな」

「……まあ、とにかく会ってみないと始まらねえか」

一抹の不安を覚えつつも、城之内はドアノブに手を掛け戸を開ける

「じゃあな木乃香」

「城之内さんを送ったら、僕もすぐに戻ります」

「はい、また食べに来てやー」

「ここです」

「じい、な……」

643号室から出て一分と経たずに、二人はその部屋の前に到着

見れば確かに、ドアには『管理人室』の文字が

「んじゃ、早速入らせてもらうかな」

「あ！ちよつと待つてください！」

「あ？」

開けて早速入ろうとする城之内だが、ネギが慌てて手首を掴んでそれを止めた

怪訝そうな顔をするが、すぐネギがわけを話す

「あの人、ノックやインターホンとかせずに入ると凄く怒るんです。前に僕の生徒がそうしたら大声で怒鳴って、そのまま泣いて帰ってくるという事件が……」

（おいおい、そんな奴と俺はこれから同居すんのか？）

もしかしたら知り合いかもと一時考えたが、そんな奴知り合いにいたかと記憶をたどる

（怒りっぽくて俺と同年くらいの男……もし仮にそいつが俺の知り合いだとして、該当すんのは……）

コンコン

「すみませーん、いらっしゃいますかー？」

すると、それが終了する前にネギがノックしてドア越しに尋ねた

城之内も思わず思考を中断し、ドアの方に目を向ける

数秒ほだし、不機嫌そうな声で返事はドア越しに返ってきた

「…………誰だよ？」

「僕です、ネギ・スプリングフィールドです」

「何だガキ先公か…………何の用だ？」

「あの、そっちに荷物がいくつか届きましたよね？」

「…………届いた。まさかお前のが手違いで来たとかか？」

「いえ、そうじゃなくて…………学園長からお電話とかは？」

「来たけど寝てたんで無視した、どうせ大した用じゃねえんだろ？」

（あれ？こいつの声どこかで…………）

ネギとドア越しの男とのやり取り

それを耳にし、城之内は何か思い出そうとしていた

というか、つい最近彼はこの声を耳にしている

「実は、その…………前に副管理人さんが辞めちゃいましたよね？新しく採用になった人が、今日からそちらへ住むことになりました…………」

「はあああつ！？てめえザケてんじゃねえよ！」

「ひいっ！」

(!!)

直後、ドア越しでも迫力充分の怒声が二人の耳に届く

ネギは反射的に身を縮め

(つて、マジかよ!)

城之内は氷解

ドア越しのため上手く聞き取りづかったのだが、今の大声のおかげで充分に聞き取れた

「仕事は俺一人で充分だつて、前からずつと言ってたんだろ!? 何で見ず知らずの奴ここに置いて、一緒に住んで仕事しなきゃいけないだ! 追い返せ!」

「で、ですけどその人はあなたと同……」

「知るか! ここは俺様一人の部屋だ!」

「おい! もしかしてお前……」

ガチャッ!

「つて、何てめえ勝手に開けて……やが……はあ?」

「……やっぱり」

城之内は咄嗟にドアノブに手をかけ、鍵の掛かってなかったそのドアを開く

怒鳴る男はドアのすぐ近くにまで来ており、開けた城之内に激昂

……しようとしたところで、城之内の顔を見て言葉を詰まらせた

城之内は、『本当にお前なのか』という顔で男を見る

男、というか青年の見た目は概ね十六、七程度

城之内と同年代だと思わせる容姿に加え、特徴的なのは真っ白な白髪

それと首からかけた、中央のウジヤド眼が異様な雰囲気放つア
クセサリー

驚きを見せながらも、木乃香が言うところの『怒ったような顔』
のまま城之内を見つめていた

「……城之内、何でお前がここに来てんだよ？」

「それはこっちのセリフだったの……バクラ」

第1話 初麻帆良、初決闘（デュエル）？（後書き）

城之内

「よう読者のみんな！城之内克也だ！」

夕映

「綾瀬夕映です」

ハルナ

「早乙女ハルナよ」

城之内

「さて、これで第1話終了だな」

夕映

「まさかあんな負け方をするとは……納得いきません」

ハルナ

「まあまあ夕映……ところで城之内さん、今回は何やるんですか？」

城之内 メモを見てる

「えっと、何々……『基本的には、作中登場デッキの簡単な紹介
制作裏話 次回予告 今回の最強カード紹介、という流れです』だ
つてよ」

夕映

「まあ、この小説で語るとしたらそんなところですか」

ハルナ

「じゃあ早速、今回登場したデッキの紹介するわね」

夕映

「作中でハルナも簡単に解説してくれましたが、今回紹介するのは私の【便乗エクゾ】です」

城之内

「便乗のドロー効果でどんどんカードを引いて、エクゾディアを高速で揃えるデッキだったな」

夕映

「モンスターはキラートマトの効果に対応出来るよう闇属性が中心です、魔法や罫も大体がエクゾディアや便乗のサポートカードとなってますね。まあ死者蘇生とかの必須カードも一通り入ってますが」

ハルナ

「あと軽くハンデス要素もあるわね、今回は使わなかったけど」

城之内

「ところでハルナ、お前はどんなデッキ使ってたんだ？」

ハルナ

「私ですか？私はト……」

夕映

「ハルナ、話が脱線してるです」

ハルナ

「はいはい、別にちよっとくらい良いじゃないの……そういえば城之内さん、夕映のデッキがエクゾディアって分かった瞬間嫌そうな

顔してましたよね？」

城之内

「ああ、昔負けたことがあるんだ……パーツカードや天使の施し三枚積みのに」

夕映

「何ですかそのデッキは！？」

城之内

「次は制作裏話が……そっぴゃ感想の返信でも書いてたな」

夕映

「それについては私達からお話しますです」

ハルナ

「どうも作者としては初めに、『夕映は攻めのデッキではなく守りのデッキ』って考えたみたいで」

夕映

「最初はパーミッション系の罠デッキを考えてたんです」

城之内

「パーミッション？」

夕映

「カウンター罠大量搭載のデッキのことです。ですが上記の考えから発展して、『さらに言えば特殊勝利の方が合いそうだ』になり」

ハルナ

「【終焉のカウントダウン】か【エクゾディア】で迷った末に……」

夕映

「とあるきっかけで【エクゾディア】と相成ったわけです」

城之内

「……とあるきっかけて何だ？」

夕映

「察してください」

ハルナ

「でも、某掲示板のとはちゃんと変更したから一応セーフよね？カエルから便乗に」

夕映

「ハルナは少し黙るです」

注・意味が分かった方々、つまりはそういうことです。スイマセン。

夕映

「……で、便乗にしたのは最終的に作者の趣味です」

注・大量ドロー出来るデッキは好きです、書くときも話作りやすいですし

城之内

「なんかぶっちゃけたぞ作者」

ハルナ

「じゃあ次は次回予告ね」

城之内

「次回はこの第1話の続きで、そのまま管理人室で俺とバクラが情報交換する話だ」

夕映

「もちろんそれだけでは終わりません、決闘^{デュエル}パートも入りますです」

ハルナ

「ちなみに決闘^{デュエル}するのはバクラさんじゃないんで、あしからず」

城之内

「次回の投稿予定は……っと、これはしないことにしてたんだっとな」

夕映

「作者の負担軽減のためですね。一応作者個人としては『書き溜めがもう一話進んだら』とのことです、次回予告がしやすいですからね。現在は第3話の決闘^{デュエル}パート書いてます」

城之内

「ん？でも前にメインの連載小説の報告では『6話まで書いた』って……」

夕映

「あれは正確には『6本』です、報告当時第2話の？まで書き終えてたみたいです」

ハルナ

「じゃあ最後に、今回の最強カード紹介」

城之内

「今回は、俺が使った《時の魔術師》だ！」

時の魔術師

星2 / 光属性 / 魔法使い族 / 攻500 / 守400

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に発動する事ができる。
コイントスを1回行い、裏表を当てる。

当たった場合、相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

ハズレの場合、自分フィールド上に存在するモンスターを全て破壊し、

自分は破壊したモンスターの攻撃力を合計した数値の半分のダメージを受ける。

城之内

「当たれば相手モンスターを即全滅させる強力カードだ！デッキに一枚は入れておくといいぜ！」

夕映

「何滅茶苦茶なこと言ってるですか……当たれば確かに良いかもですが、外れれば自軍が全滅です。私から言わせれば、そういう不確定要素のある危険なカードは使いたくないです」

ハルナ

「私もちょっとデッキに入れるのは抵抗あるかなー、やっぱ夕映の言うとおり危ないし……まあ、面白いカードには違いないかもです」

けど」

城之内

「何だよお前ら！時の魔術師をバカにすんじゃないやねえ！」

????

「そうそう、私だってデッキに入れてるもん！それも二枚！」

城之内

「お、気が合うじゃねえか……って、お前誰だ？」

????

「それはまた次回で！ほにゃらば、次回もお楽しみにねー！」

第2話 笑顔の幸運少女？（前書き）

お久しぶりです、遊戯王JEM第2話です。今回は全部で3本です
ので、今日と明日と明後日の三日間投稿します、デュエルパート
は？で。

ではどうぞ！

第2話 笑顔の幸運少女？

「……マリクと闇のゲームをして負けた？」

「そうだよ、んで気が付いたらバカでかい樹の前で目え覚ました」

現在城之内は、バクラが住む管理人室に上がり腰を下ろしていた

また、ネギは自分の部屋に帰っている

正確にはバクラが『城之内をここに上げさせ』、『ネギを帰らせた』と言っべきか

「お前はどうかんだよ城之内」

「俺もだ。俺もマリクと準決勝を闇のゲームで戦って、そのまま負けちゃった」

「ちっ、そうなるやっぱ原因はあいつか……まあ詳しいことはサッパリだから断定はしきれねえが」

バクラはマリクのことを思い出し、憎々しげに悪態をつく

すると、城之内が何かに気づいたかバクラに尋ねた

「でも変じゃねえか？お前がマリクと戦ったのは真夜中、つまり俺の準決勝戦との間は二週間どころか丸一日も空いてねえ……これはどういうことなんだ？」

「……とりあえず仮説としては二つ。ここと元いた世界の時間の流れが違うか、時間軸関係なしで無差別に飛ばされちゃったかだな。帰る方法が分からない今の状況じゃ、どっちだって変わりねえよ」

「そうか……にしても、お前が女子寮の管理人ねえ」

「っ、テメエ何笑ってんだ！」

一応の整理が付いたところで、城之内は思わず口元を釣り上げていた

それに見て、当然ながらバクラは激昂し声を荒げる

「いや、悪い悪い、俺も今日から副管理人だもんな……で、何でお前管理人になったんだよ？」

「『学園やワシの孫に危害を加えるつもりは無さそうじゃし、魔法関係者でないにしてはそこそ腕は立つようじゃから』だよ。はつきり言って強制命令だ、魔法使い云々のことはあのガキ先公から聞いただろ？」

「あ、ああ一応……」

「あんなのがこの学園内に百人近く、そうなったら流石の俺様も少し厳しい。一人づつならこいつで各個撃破も出来なくはないが……全部片付ける前にバレて、即刻始末されるのがオチだ」

バクラは千年リングの紐を掴み、軽く持ち上げてチャリリと音を鳴らす

「……それ、この世界でも使えんのか？」

「ああ、前一緒に住んでたうぜえ副管理人に使ってみたら成功した。といつても二、三日、俺様に殺される悪夢を見せ続けたただけだ、だがそのお陰で出てってくれて清々したぜ」

「（やつばお前がやったのか……）……よく取られなかったな」

「爺とかの前じゃ一切使ってねえからな。俺様が力を行使しなけりや、ただの不気味なアクセサリーってわけだ。まあ、禍々しい雰囲気そのものには感じている節はあったが」

無論、『ちよつと調べさせてくれんか』と言われたこともある

だが千年アイテムは『千年アイテム』であつて『魔法道具』ではない

魔法使いの学園長らが調べたからとて、その全貌を明かされることはなかった

「それで、俺がここに住む件なんだけだよ……」

「断固拒否する、と言いてえとこだが……お前、料理は人並みに作れるか？」

「まあ一応。親父がお袋と離婚して父子家庭で、しかもその親父が飲んだくれで家事なんて全くしなかったからな。それがどうした？」

少し考えるような表情をし、数秒経つてバクラは言葉を返す

「……お前が三食飯を作れ、そつするんならここに置いてやる」

「何だよその上から目線……ていうか、それなら今まで食事はどうしてたんだよ」

「副管が辞めた後はコンビニ飯、けどいい加減飽きてきた。爺は爺で最低限の金しか寄越さねえから、外食ばっかにすると他に金が回らねえ……一応金が入るアテは出来たんだが、そっちも少しばかり時間が掛かる」

「お前が前の副管理人追い出さなかったら問題無かったんじゃねえのか？」

「……知るか」

人はそれを、自業自得と呼ぶ

「するってーとつまり……俺はここに住んでいいわけだな？」

「飯作るならな。前の奴よかよっぽどマシだ」

色々言ってやりたいのだが、城之内は敢えてスルー

変に怒らせても面倒臭い

(……まあ、いざとなったら学園長の爺さんに相談すればいいか)

そんなことを思った後、城之内は立ち上がる

そのまま、部屋の端に置かれたダンボール数個の開封を開始

「これだな、生活用の俺の荷物が入ったダンボールってのは……バクラ、お前も開けるの手伝っ」

「一人でやれ、俺のじゃねえんだからする義務なんてねえだろ」

「……へいへい」

カーペットの上に寝そべるバクラを呆れ顔で見ると、城之内は改めて作業を進めた

「……つまり、やることはお前と大差ないわけだな」

「そうだよ」

そして、一時間も経つとそれは終了

夕食を作るには時間が余りすぎてたため、続いてバクラからこの仕事について訊くことにした

バクラは（面倒臭そうにしながらも）簡単に業務内容を説明

寮内の清掃、生徒の門限の確認、定時ごとに行う見回り

とりあえずやることは大体こんなものだと言われ、城之内はフムと頷く

「ついでに言えばテメエは俺様の補佐、つまり下僕だ、仕事中は黙って俺様の言うことに従えよ」

「その言い方やめろよ……ん？」

ガヤガヤ

ガヤガヤ

ガヤガヤ

「……何だ？」

すると、急に部屋の外が騒がしくなってきた

複数の足音と、話し声

ここは一応、女子寮内で端に位置する部屋

つまり自分の部屋に向かう途中などで、生徒がこの部屋の前を通

りかかることは殆どない

「まさか……おい城之内」

「あん？」

「お前、ここに住むガキ何人に面が割れてやがんだ？」

「え？」

思い当たる節があったか、バクラは城之内に詰め寄って睨みつける

「えつと（のどかと、ハルナと、デコチビと木乃香と……）ネギを除けば、ちゃんと会って話をしたのは四人だな。あとネギの部屋に行く途中で何人かに見られたような……」

「ちつ……いいか城之内、呼ばれても絶対に返事すんじゃ……」

コンコン

「すみませーん、新しく副管理人になった城之内さんってこちらですかー？」

「ん？俺ならいるぞー」

「つておいこらー！」

バクラが言い終わるより先に、ドアがノックされて尋ねられ、城之内はそのまま返答

途端に、騒ぎ声が一層大きさを増す

「あのー、入ってもいいですかー？」

「ちょっと挨拶に伺ったんですけどー」

今度は別の二人の少女の声

「お、いいぞいいぞ！鍵は開いフゴツ！？」

「馬鹿かテメエ！余計なことやってんじゃ……」

バンツ！

「…………お邪魔しまゝす！！……………」

「…………糞が」

城之内の口を慌てて塞ぐバクラだが、時既に遅し

麻帆良女子中等部3-Aの面々は、やったとばかりに管理人室へと乗り込んできたのだった

「ふーん、お前らも全員ネギの生徒なわけか」

「そういうこと」

押しかけてきた一同は、入るや否やすぐに城之内に接近

お菓子やらジュースやらを持ち込み、『歓迎会』と称したどんちやん騒ぎが始まった

といってもまだ部活動中の者が多数おり、十人前後程の小規模なものとなってしまうたが

「パルからメールで教えてもらってさ……私朝倉和美、以後よろしく」

「ああ、よろしくな」

「というわけで早速なんだけど、いくつか質問いいですか？私部活が報道部なんで、クラスのみんなを代表して」

「別にいいぜ」

コホンと一つ咳払いすると、朝倉はポケットからメモ帳とシャーペンを取り出して質問を開始する

「名前は、城之内克也さんよね……歳と誕生日は？」

「十六、だな。誕生日は一月二十五日の水瓶座」

「ふむふむ、バクラさんと同年ね……好きな物と嫌いな物は？」

「好きな物か……食いモンだったらカレーライス、それ以外だったらもちろん決闘だ」
デュエル

「へー、やっぱりパルの言った通りか……夕映っちに勝ったのは伊達じゃないってことね」

この後半の言葉が、トリガーになった

「え、それホント!？」

「あの夕映に勝ったん!？」

「うっそー! 凄ーい!」

「何回やって何回!？」

「デッキの相性が良かったとか!？」

周りにいた皆のテンションはさらに上がり、グイグイと朝倉を押して城之内に詰め寄る

「何回って、一回勝負に決まってるだろ? デッキも特にそんな風には思わなかったし。えっと、お前達は……」

「佐々木まき絵だよ」

「和泉亜子や」

「柿崎美砂、よろしく」

「明石裕奈、ゆーなでいいよ」

「釘宮円」

「えっと、えっと……よし覚えた、多分」

「……多分って何さー！」「……」

そんなことを言われても、初見で一氣に五人の顔と名を一致させるとは酷な話

しかし城之内は既にハルナ達のことば覚えてくくらいなので、そう時間は掛からぬだろうが

「まあまあ……で、城之内さんのデッキってどんなの？パルはそのこと教えてくれなくてさー」

「あ、それ気になる！」

「見せて見せてー！」

朝倉が宥め次の質問に移ると、それに呼応してまき絵と裕奈が城之内に飛びかかる

狙うは、城之内のポケットにあるデッキ

「ちよっ、こらー！人のデッキ勝手に見ようとするんじゃないねー！」

が、当然城之内はそれを阻止

すぐさまデッキをポケットから取り出し、後ろ手に回す

「えー、そのくらい良いじゃん」

「決闘者^{デュエリスト}の魂であるデッキの中身を、そう安々とは見せられねえつての」

文句を垂れる裕奈だが、城之内は警戒を緩めない

回り込もうとする彼女やまき絵を、ホイホイと身体を反転させて拒む

それを見て朝倉が、何かいいことを思いついた模様

「……じゃあ提案、私達の誰かと実際に決闘^{デュエル}するってのは？それなら構わないでしょ」

「お前らも全員やってるのか？」

「当然、じゃなきゃこんな提案しませんよ」

「……面白え、誰からの挑戦でも受けてやる！」

城之内が、朝倉の提案に了承すると高らかに宣言すると直後、一人の少女の手がピシリと拳がった

「じゃあはい！私が決闘するー！」
デュエル

「……あんたが？桜子」

「うん！」

両サイドの髪をグリルと巻き入れた特徴的な髪形

口を大きく開けた笑顔のまま彼女、椎名桜子は朝倉の言葉を返す

「城之内さんどう？私と決闘しない？」
デュエル

「よし、いいぜ。さっきも言ったが、誰が相手だろうと俺は正面から受けて立つ！」

「あー！桜子抜け駆けするーい！」

「ふっふーん裕奈、こついうのは早い者勝ちだよーん」

「じゃあやるか」

「はいー！」

城之内、桜子の両名は互いにデッキを準備

続いてじゃんけんで先攻後攻を決める

「じゃんけん……」

「ぼん！私の勝ちー、じゃあ先攻でー！」

「……分かった、ところで初期ライフはどうすんだ？」

「うーん……4000、かな。私そっちの方が得意なんだー！」

「よし分かった！それじゃあ……」

「デュエル決闘！ー！ー」

夕映戦より多数のギャラリーが見る中、二人の決闘デュエルは始まった

第2話 笑顔の幸運少女？

「私のターン、ドロー！」

「頑張れー、桜子ー」

「うん！美砂、円、ありがとー！」

横から飛んできた親友の激励

桜子はそれに、いつもの笑顔で応じる

「ちっ、馬鹿馬鹿しい……」

「あれ、バクラさんどこ行くの？」

「そこらを小一時間くらいブラついてくる、喧しくてとても居られ
たもんじゃねえ……オレが帰る頃には、いい加減でめえらも自分の
部屋帰ってるよ」

それと時を同じくし、バクラが腰を上げて退室

朝倉の問いに目も合わせず答え、そのまま出て行った

「（お、初手からこれかー）モンスターを守備でセット、伏せカ
ー
ド二枚でターンエンド」

桜子 LP4000 手札3

（私の直感がそう告げている……あの人には、私と同じ血が流れてるって！）

「俺のターンだ、ドロー！」

「その瞬間罠カード発動、運命の分かれ道！」

「このタイミングで罠カードだと！？」

「フリーチェインのカードだもん。コイントスを互いに行い、ライフポイントを表なら2000回復、裏なら逆に2000ダメージを与えるよ、そして……」

桜子の笑みは一層大きくなり、二枚目の伏せカードを手にとった

「それにチェインして、二枚目の運命の分かれ道を発動！」

「げ、出た」

「4000制限定な上不確定だけど、桜子必殺の1KILLコンボ！」

「2000ダメージが二回……つまり下手すりゃ、これで決着ってことか」

「そういうこと、確率は四分の一だね」

誰に言われるでもなく、二人はポケットからコインを取り出した

「いくぜ！」

「えい！」

そして指で弾き、コイントス

コイントスの結果

城之内 表

桜子 表

「互いに表、か……」

「あちゃー、これで1KILLは無くなっちゃったかー」

城之内 LP 4000 6000

桜子 LP 4000 6000

「でも、まだ二枚目があるよー！」

「よし、勝負だ！」

コイントスの結果

城之内 表

桜子 表

「ま、また二人とも表！？」

「城之内さんすこ……桜子の強運とマトモに張り合ってるし」

（ここまでは互角……いや、カード二枚を無駄に消費しちゃった桜子の方が不利？）

驚く美砂、円とは別に、朝倉は冷静に戦況を確認する

城之内 LP 6000 8000

桜子 LP 6000 8000

「続いてメインフェイズ、手札から切り込み隊長を攻撃表示で召喚
！」

切り込み隊長

攻撃力1200 / 守備力400

「さらにこいつの効果、召喚成功時に手札からレベル4以下のモンスター……ギア・フリードを特殊召喚する！」

鉄の騎士ギア・フリード

攻撃力1800 / 守備力1600

「バトル！ギア・フリードで伏せモンスターを攻撃だ！」

鉄の騎士ギア・フリード 攻撃力1800

VS

裏守備モンスター 守備力？

「残念、ルーレットボマーだよ」

ルーレットボマー

攻撃力1000 / 守備力2000

「反射ダメー……」

「なら手札から速攻魔法、天使のサイコロだ！」

「お!？」

「サイコロを振り、自軍のモンスターの攻守を出た目×100ポイント上げる!（あ、ハルナにサイコロ返すの忘れてた）ダイスロール!」

後で返しに行こうと考えながらも、城之内はサイコロを投げた

サイコロの出目 4

「これで、攻守400アップ!」

（城之内さんやっぱり使った、ギャンブルカード……）

鉄の騎士ギア・フリード

攻撃力1800 2200

守備力1600 2000

切り込み隊長

攻撃力1200 1600

守備力400 800

「そのまま戦闘続行だ！」

鉄の騎士ギア・フリード 攻撃力2200

VS

ルーレットボマー 守備力2000

ルーレットボマー 破壊！

「さらに切り込み隊長でダイレクトアタック！」

切り込み隊長 攻撃力1600

桜子 LP8000 6400

「カードを一枚セットしてターンエンドだ！」

城之内 LP8000 手札3

「私のターン、ドロー！時の魔術師を攻撃表示で召喚！」

時の魔術師

攻撃力500 / 守備力400

「効果によりコイントス、私は裏を選択するよ！」

コイントスの結果 裏

「大当たりー！城之内さんのモンスターを全破壊！」

鉄の騎士ギア・フリード 破壊！

切り込み隊長 破壊！

「くそっ、まさか時の魔術師を使われるなんて……」

「ダイレクトアタック！」

時の魔術師 攻撃力500

城之内 LP8000 7500

「カードを一枚セットして、私はターン終了」

桜子 LP6600 手札2

「へっ、このくらいのダメージ……俺のターン、ドロー！リトル・ウイングガードを召喚だ！」

リトル・ウイングガード

攻撃力1400 / 守備力1800

「時の魔術師の攻撃力は僅か500……バトル！攻撃だ！」

「残念、畏カード発動。モンスターBOX」

「ま、また俺と同じカード!?」

「相手モンスターの攻撃宣言時にコイントス、裏表を当てたら攻撃

してきたモンスターの攻撃力を……」

効果説明と並行し、再びコイントス

「0にする！表だー！」

コイントスの結果 表

「いえーい！またまた当たりー！」

リトル・ウイングガード 攻撃力1400 0

「勿論、戦闘はそのまま続行されるよ」

リトル・ウイングガード 攻撃力0

VS

時の魔術師 攻撃力500

リトル・ウイングガード 破壊！

「リ、リトル・ウイングガードが……」

城之内 LP7500 7000

「……カードを一枚セット、ターンエンドだ」

城之内 LP7000 手札3

「私のターン、ドロー。まずはスタンバイフェイズに、モンスターBOXの維持コスト500を払って……」

桜子 LP6400 5900

「次にメインフェイズでクルーエルを攻撃表示で召喚」

クルーエル

攻撃力1000 / 守備力1700

「二体で城之内さんにダイレクトアタック！」

「させねえ！さっきのターン伏せたスケープゴートを発動する！」

羊トークン×4

攻撃力0 / 守備力0

「ならそれぞれで羊トークンを攻撃……！」

時の魔術師 攻撃力500

VS

羊トークン 守備力0

羊トークン 破壊！

クルーエル 攻撃力1000

VS

羊トークン 守備力0

羊トークン 破壊！

「流石に時の魔術師の効果は使ってこないか……」

「攻守0なら戦闘で簡単に倒せるしね、ターン終了！」

桜子 LP5900 手札2

「俺のターン、ドロー！手札からサイクロン発動、モンスターBO
Xを破壊するぜ！」

「う、しまった……」

「さらに、アックス・レイダーを召喚！」

アックスレイダー

攻撃力1700 / 守備力1150

「バトル！時の魔術師を攻撃だ！」

アックス・レイダー 攻撃力1700

VS

時の魔術師 攻撃力500

時の魔術師 破壊！

「あー、私のお気に入り一枚がぁ……」

桜子 LP 5900 4700

「俺はこれでターンエンド!」

城之内 LP 7000 手札 2

「私のターン、ドロー。クルーエルを守備表示に変更してモンスターを一体セット。カードを一枚伏せてターン終了!」

桜子 LP 4700 手札 1

「俺のターン、ドロー!ワイバーンの戦士を召喚だ!」

ワイバーンの戦士

攻撃力 1500 / 守備力 1200

「（今俺の手札に、守備力 1700 のクルーエルを倒せるカードはねえ……なら裏守備の一体だけでも!）バトル!アックス・レイダーで伏せモンスターを攻撃!」

アックス・レイダー 攻撃力 1700

VS

裏守備モンスター 守備力?

「残念でしたー、守備モンスターは二体目のルーレットボマー!」

「げっ！」

城之内 LP 7000 6700

「……俺のターンは終了だ」

城之内 LP 6700 手札 2

「ならエンドフェイズに速効魔法、終焉の焔を発動。黒焔トークン二体を守備表示で特殊召喚するよー！」

黒焔トークン

攻撃力0 / 守備力0

「じゃあ私のターン、ドロー！」

「攻守0ってことは、俺の場にある羊トークンと同じ……」

「ちつつち、ちょーっと違うんだなーこれが」

「何？」

「私は黒焔トークン二体を生贄にして……」

「い、生贄に使うだって!？」

「そう、羊トークンと違って生贄に出来るの、闇属性限定だけどね。リボルバー・ドラゴンを召喚！」

リボルバー・ドラゴン

攻撃力2600 / 守備力2200

「リボルバー・ドラゴンの効果……の前に、ルーレットボマーの効果を発動！」

ポケットから今度はサイコロを取り出し、桜子は放る

「サイコロを二回振ってどちらかの目を選択、そのレベルのモンスター一体を破壊するよ」

サイコロの出目 1、3

「1を選択して、レベル1の羊トークンを破壊！」

羊トークン 破壊！

「それじゃあ今度こそ、リボルバー・ドラゴンの効果を発動。コイントスを三回やって、表が二回以上ならモンスターを一体破壊する」

コイントスの結果 表、裏、表

「というわけで、アックス・レイダーを破壊！」

アックス・レイダー 破壊！

「クルーエルを攻撃表示に変更してバトルフェイズ、まずはクルーエルで羊トークンを攻撃！」

「させねえ！罨カード発動、マジックアーム・シールドだ」

「うわ」

「桜子のリボルバー・ドラゴンのコントロールをバトルフェイズ終了時まで奪い、今攻撃宣言したクルーエルと強制的に戦闘を行わせる！」

クルーエル 攻撃力1000

VS

リボルバー・ドラゴン 攻撃力2600

クルーエル 破壊！

桜子 LP 4700 3100

「あいたー、でもクルーエルのモンスター効果を発動！」

再び桜子はコインを手に取り、コイントス

「このカードが戦闘破壊された時にコイントス、裏表を当てたら相手モンスター一体を破壊。予想は表！」

コイントスの結果 裏

「うーん残念、外しちゃったか……」

「あ、危ねえ危ねえ……危うくさらにモンスターがやられるところだったぜ」

「バトルフェイズが終わってリボルバー・ドラゴンが返ってきて…
…私はこのままターン終了」

桜子 LP3100 手札1

「俺のターン、ドロー！（くそ、こいつじゃリボルバー・ドラゴン
は……だが他に手はねえ！）ワイバーンの戦士を生贄にして、人造
人間サイコショッカーを召喚！」

人造人間サイコショッカー

攻撃力2400 / 守備力1500

「ルーレットボマーを攻撃だ！」

人造人間サイコショッカー 攻撃力2400

VS

ルーレットボマー 守備力2000

ルーレットボマー 破壊！

「カードを一枚セットして、ターンエンドだ」

城之内 LP6700 手札2

「私のターン、ドロー。手札から一撃必殺侍を召喚！」

一撃必殺侍

攻撃力1200 / 守備力1200

「さらに手札から魔法カード、モンスターゲートを発動。さっき召喚した一撃必殺侍をコストに使うよ」

「……モンスターゲート？」

「モンスターを一体コストにした後デッキの上からカードを順番にめくって、通常召喚可能なモンスターが出てきたらそのモンスターを場に特殊召喚するカードだよ。ちなみに他のカードは墓地ね」

「つまりモンスター入れ替えカードか……」

「平たく言えばそうなるかな、それじゃいつくよー！」

一枚目 カップ・オブ・エース

二枚目 サイクロン

三枚目 マキシマム・シックス

「というわけでマキシマム・シックス、特殊召喚！」

マキシマムシックス

攻撃力1900 / 守備力1600

「そしてリボルバー・ドラゴンの効果発動、コイントス！」

コイントスの結果 表、表、表

「また当たりだね、羊トークンを破壊するよー」

羊トークン 破壊！

「バトルフェイズ、リボルバー・ドラゴンでサイコショッカーを攻撃！」

リボルバー・ドラゴン 攻撃力2600

VS

人造人間サイコショッカー 攻撃力2400

人造人間サイコショッカー 破壊！

城之内 LP6700 6500

「お、俺の場がガラ空きになっちまった……」

「マキシマム・シックスでダイレクトアタック！」

マキシマム・シックス 攻撃力1900

「ぐあああっ！」

城之内 LP6500 4600

「私はこれでターン終了」

桜子 LP3100 手札0

「俺のターン、ドロー！……モンスターを一体守備表示、ターンエ

ンドだ」

城之内 LP 4600 手札 2

「私のターン、ドロー！（うーん、モンスターは引けなかったか…
…）リボルバー・ドラゴンの効果を発動」

コイントスの結果 表、表、裏

「はい当たり、伏せモンスターを破壊」

「ま、また当たりかよ……」

裏守備のロケット戦士 破壊！

ロケット戦士

攻撃力1500 / 守備力1300

「バトルフェイズ、モンスター二体でダイレクトアタック！」

「ぐうううっ！」

リボルバー・ドラゴン 攻撃力2600

マキシマム・シックス 攻撃力1900

城之内 LP 4600 2000 1000

「うーん、ギリギリ残っちゃった」

「な、何とか生き延びたぜ……」

「ならカードを一枚セットして、ターン終了だよ」

桜子 LP3100 手札0

「俺のターン、ドロー！」

このターン、何か打開策が無ければ確実に負ける

そんな時城之内が引き入れたカードは

「……よし！」

彼に勝機を感じさせ、尚且つ笑みを与えた

「？」

「まず手札から魔法カード、おろかな埋葬を発動。この効果でデッキから、ギルフォード・ザ・ライティングを墓地へ送る」

ギルフォード・ザ・ライティング

攻撃力2800 / 守備力1400

「次にさっき引いたカード、死者蘇生を発動だ！」

「うわっ、やられた！」

「ギルフォード・ザ・ライティング、特殊召喚！」

「リボルバー・ドラゴンが……」

「そういうことだ！ギルフォードでリボルバー・ドラゴンを攻撃！」

ギルフォード・ザ・ライティング 攻撃力2800

VS

リボルバー・ドラゴン 攻撃力2600

リボルバー・ドラゴン 破壊！

「むむむ……」

「よっし、桜子のエースモンスター撃破だぜ！」

桜子 LP3100 2900

「カードを一枚セット、俺はこれでターンエンドだ！」

城之内 LP100 手札0

「私のターン、ドロー！ならこのカードで倒すまで！マキシマム・シックスを生贄に……」

（生贄一体のモンスターでギルフォードを倒すだって？）

「もう一体のマキシマム・シックスを召喚！」

「同じモンスターを召喚だって！？攻撃力は同じ1900なのに、

なんでそんな無駄なこと……」

「ふっふっふ、生贄召喚された時モンスター効果発動」

桜子が手にしたのは、またもサイコロ

一体目のはモンスターゲートによる特殊召喚だが、今回は違う

「サイコロを一回振って、攻撃力を出た目×200ポイント永続的に上げる！」

サイコロの出目 6

「くっ、つまり攻撃力が一気に……」

「1200上がって3100！ここを外すわけにはいかないって！」

マキシマムシックス

攻撃力1900 3100

「バトル！マキシマム・シックスでギルフォードを攻撃！」

マキシマム・シックス 攻撃力3100

VS

ギルフォード・ザ・ライトニング 攻撃力2800

「この攻撃が通れば……」

「桜子の勝ち！」

「させるか！なら俺も、この勝負の命運をサイコロに託す！」

城之内は左手でサイコロを力強く握りしめ、同時に右手で伏せカードを開いた

「悪魔のサイコロ！相手モンスターの攻守を、出た目×100ポイント弱体化させる！」

「相打ちを含めれば、成功確率は三分の二……」

「へっ、甘いな朝倉……俺は初めから、4以上を出しての返り討ち狙いだ！」

コロコロコロコロ

運命のダイスロールが、場を静寂に包む

（頼む、4以上……）

サイコロの出目

6！

「……よっしゃあああつ！」

「そ、そんな……」

「これでマキシマム・シックスの攻守は、それぞれ600ポイントダウン！」

マキシマムシックス

攻撃力3100 2500

守備力1600 1000

マキシマム・シックス 破壊！

桜子 LP2900 2600

「……ターン終了」

桜子 LP2600 手札0

「俺のターン、ドロー！手札からハリケーン発動、その伏せカードを手札に戻してもらうぜ」

（伏せてたのは、リボルバー・ドラゴン用に準備してた『ラッキーチャンス！』……返しのターンで破壊されちゃったから使う機会無かったんだよね）

これで桜子の場合は、完全に丸裸

手札に残る一枚も、先程の伏せカードと分かっているためクリボ
ー等の心配も0

（クルーエルの効果を外してなかったらな……今回はちょっと運
が悪かったかな？）

「バトルフェイズ、ギルフォードでダイレクトアタックだ！」

ギルフォード・ザ・ライティング 攻撃力2800

（……いや、良かった！だってこんなに、こんなにハラハラドキド
キ戦える人と決闘出来たんだもん！）

桜子 LP 2600 0

躊躇無く城之内は攻め、桜子のLPを削りきった

「……うにゃー、負けちゃったー」

「いい決闘デュエルだったぜ、桜子！」

「うん！」

そして桜子は悔しそうな表情は殆ど見せず、城之内に対し満面の
笑みを返した

第2話 笑顔の幸運少女？

「いやー、凄いね城之内さん。桜子怒涛のギャンブル攻撃をああも凌ぎ切るなんてさ」

「へへっ、どんなもんだ！」

桜子との決闘は、^{デュエル}僅かに残ったライフ100を守りきった城之内に軍配が上がった

床に広げていたカードを片付けて一束のデッキにそれぞれ戻すと、すかさず朝倉が城之内へ話し掛け始める

「けど随分変わったデッキ……ギャンブルカードを織り交ぜた攻撃型デッキみたいですけど、最近のカードとかあんまり入ってないみたいだし」

「最近のカード？」

「いやほら、チューナーとかシンクロモンスターとか。エクストラデッキも十五枚ギリギリまで入れずに二、三枚で……」

（チューナー？シンクロ？エクストラ？）

「戦士族が多かったですし、やっぱりギガンテックとかガイアナイトくらいは……」

（ギガンテック？ガイアナイト？）

この時城之内は、朝倉の話す内容の半分以上が理解出来ないでいた

「……あの、聞いてます？」

「え？あ、ああ勿論だぜ！」

この世界のカードプールは、城之内がいた世界のそれとは比べ物にならぬほど豊富である

幸い今まで戦った二人は城之内が知る既存のカードを使うことも多く、何とかギリギリ知識も追い付いて戦うことが出来た

しかし無論彼女ら、さらに言えば学園内の者殆どはそれ以外のカードも大量に所持

実際夕映の手札断殺、桜子の終焉の焰等には『？』であった

そして夕映にしる桜子にしる、エクストラデッキにはシンクロモンスターを少なからず忍ばせている

（……後でネギが誰かにこっそり教えてもらわねえとな、うん）

この世界には、自分のいた世界には無いカードが数多く存在する

それを大よそながら察した城之内

自身の事情を把握している誰かに訊いておこうと、心の中で願った

「でも私、ワイバーンの戦士をデッキに入れてる人初めて見たですー」

「あ、僕もー」

すると、脇で決闘^{デュエル}を見ていた皆もさらに騒ぎ出す

鳴滝姉妹を筆頭に

「あ、パルからメール返ってきた……えっと、何々……え！？昆虫^{インセク}トクイン女王や格闘戦士アルティメーター！？」

「何それ！？入れる必要あるの！？」

「それってどんなモンスターだっけ？」

「確かレベル7の昆虫族と、レベル3の戦士族だったと思うけど……」

「しかもアルティメーターって通常モンスターやん、攻守めっちゃ低いし」

ハルナに『城之内はどんなカードを使ってたか』という旨のメールを送り、たった今返信が来た美砂

その内容に目を丸くした円、カード名だけでは『？』になっていたまき絵

うる覚えの記録を引っ張り出すアキラに、もう少し明瞭に記憶していた亜子が続いた

「つまり、城之内さんのデッキってファンデッキ？」

「いや、もはやネタデッキでしょ」

「それに負けた夕映や桜子って……」

さらには夏美、裕奈までも続き、締めで朝倉がポツリと呟いた

「な、何だよ！？俺のデッキがそんなに変わったのかよ！」

「「「「「「「「「「変」」」」」」」」」」」

「なっ！？」

「うーん、私は戦ってて楽しかったけどねー」

夕映の時と同様に、自分のデッキ構成にケチをつけられているのは明白

少々声を荒げてしまったが、直後にほぼ全員から『変』とバツサリ言われる始末である

ただ実際に決闘をした桜子は、そこまで悪いとは思っていない様子

「まあ個人で楽しめて、なおかつ勝つことも出来るデッキなら別にいいんだろうけどね。古ちゃんのデッキとかもその典型だし」

「古？」

「ウチのクラスメイトの古菲のこと、今日は部活で忙しくて来れなかったんだよね……あ、そだそだ、インタビューの続き良いですか？」

デュエル
決闘終了あたりから色々と話がズレているのに気付き、修正

「ん？ああ、いいぜ」

「えっと、じゃあですね……」

城之内も、朝倉達が持ってきたスナックに手を伸ばしつつ言葉を返す

朝倉はメモ帳とペンを持ち直し、改めて城之内に幾つか質問を飛ばした

「ふむふむ……ま、こんなとこかな」

（な、長かった……あと結構危なかったぜ……）

そして十数分し、朝倉による城之内独占インタビューはこれにて

終了

城之内はやや疲れた様子で息をフーと漏らし、脱力する

最初の誕生日や年齢に始まり、血液型、家族構成、好きな女性のタイプ

果てには、この学園に来た理由まで訊かれてしまった

特に最後の一つは大苦労

『異世界から突然来ちまって、帰る場所が無いからここで働かせてもらうことになったんだぜ！』

と、言うわけにもいかず

非常に大焦りしながらも、最終的に

『中卒で働いてたんだがその仕事先が倒産、たまたま親戚が麻帆良の関係者と面識があつたんで、特別な計らいで働かせてもらうことになった』

という理由で落ち着いた

しかし途中で『病気の妹のために』やら『親父が借金をめっちゃや作った』という、一応彼の中では事実であつたもの等を余計に織り交ぜてしまったため、かなり驚かれもしたが

「アトランティスを墓地に送ってダイダロス以外のカードを全破壊、そのままダイレクトアタックで私の勝ちだね」

「うわっ、またそのコンボにやられてもうた！」

「いっけー！マシンナーズ・フォースでサイバー・チュチュを攻撃
！」

「4600とか反則だつてばー！」

そして残りの皆は、インタビューの最中暇になったのか

城之内と朝倉の言葉に一応耳を傾けながらも、カードを広げてそ
れぞれ決闘に興じたりもしていた

「やったー6だー！美砂に6000ポイントダメージ！」

「それ入れるのやめろー！」

桜子も親友の美砂を相手に、容赦なく自慢の強運を発揮して圧勝
した模様

「さて、じゃあそろそろ帰ろうかな」

「もう帰るのか？」

「改めてクラス全員集めた歓迎会する予定だしね。引っ越し直後だ
しこれ以上は迷惑かなと思って」

そこら辺の良識はわきまえているのか、朝倉はペンやら手帳やら
をポケットにしまって帰り支度

そろそろ部屋に戻ろつかと一同にも諭し、他の皆も同様に渋々ながら片づけ始める

「じゃあね城之内さん」

「また遊びに来るね」

「今度は私が絶対勝つよー!」

「おう!またな!」

一人、また一人とドアから退出

桜子が出ていくと、残りは朝倉一人に

「さて、と……みんないなくなったね」

「ん?お前は帰らないのか?」

「いや、ちょっと二人っきりで訊いておきたいことがあってさ……」

「ん?」

どうもそのために自ら帰り支度までしてみせ、皆を返したらしい

何か大事ななことかと思い、城之内もかしこまって朝倉と目を合わせる

「バクラさんのことなんだけどさ」

「バクラの？」

「何か入った時親しそだったけど、もしかして同じ世界出身？」

「ああ、童美野町のある世か……！？」

朝倉の問いを普通に返した城之内だが、すぐ質問の異質さに気づいて口元を覆う

だが、もう遅かった

「やっぱり」

同じ『町』や『地方』や『学校』でなく、『世界』

朝倉が今の今まで普通に接してきていただけに、ついそのまま答えってしまった

「いや違う、あのだな……その世界じゃなくて、世界じゃ……えと……」

「ハハ、安心して。私も一応関係者みたいなもんだからさ、魔法の」

魔法とは秘匿の存在

これをネギや学園長から散々聞かされていた城之内は、魔法のことについて秘密でいるよう釘を刺されている

異世界どうこうというのも、突き詰めれば『世界樹』という魔法的存在に辿り着く

故にそういった意味でも内緒にしておかねばと決めていた城之内は、誤魔化そうと慌てながらしどろもどろ狼狽に狼狽

「……え？そうなのか？」

「じゃなきゃこんな質問なんてしませんよ」

が、次には朝倉の言葉で落ち着きを取り戻す

「良かったあ……」

「てことは、前の世界にいた頃から知り合いだったと」

「まあな、あいつ（正確には少し違うが）とは同じ高校にも通ってた」

これはメモ帳には記入をせず、ただフムフムと頷きながら記憶する朝倉

「……これで訊きたいことは全部か？」

「えっと、もう一つだけ」

これが最後なんで、と前置きし、朝倉はズイッと城之内に顔を近づける

「そのですね……」

「……ああ」

「バクラさんって……」

「……ああ」

最後の一つも、やはりバクラについてのこと

（バクラのこと、か……弱点を教えろとか言われても俺は全然知ら
ん）

「ホモなんですか？」

時が、一瞬だが止まった気がした

「……は？」

「いや、バクラさんがここに管理人になった時も色々質問したんですよ、結構嫌がってたんですけど無理矢理何とか」

「はあ……」

「それでその時した『好きな女性のタイプ』の質問で、何にも答え

てくれなくって」

（まあ、あいつが女を恋愛的に好きになるとか想像出来ねえしな……表の方の人格の獏良ならまだしも）

「その後ちよつとふざけて私やゆーながひつついたりしても、全然反応無し」

それで、『ならばもう少し上を』と考えて那波千鶴を試してみたが同様

まさかと思つて鳴滝姉妹もけしかけたが、やはりこれも同じく

「それであいつのことを、『女に興味無い だとすれば男に興味がある？ もしかしてホモ？』だと？」

「そうそう、で、実際のところど……」

ガシッ！

「……う？」

興味深々に訊いてきた朝倉だが、突如言葉が止まる

背後からバツと手が伸び、朝倉の頭部を鷲掴み

しかも、かなり強めに

振り返らない朝倉だが、この時点でもう正体は誰か十中八九理解

「部屋からゾロゾロ出てくあいつら見て、やっと帰ったかと思って部屋に戻ってみれば……」

声も耳にし、十割理解

タラタラ冷汗を垂らすと、次にグリーンと頭を横に回される

「……で、何処の誰がホモだって？」

「ハハ、随分とお早いお帰りで……」

「んなこたあ訊いてねえんだよ」

朝倉の目の前には、顔に青筋を浮かべたバクラその人

「おい城之内」

「っ！」

「有ること無いことこいつに吹き込んだりしてねえだろうな？」

「あ、ああ……」

「……よし」

朝倉を一睨みし、続いては城之内を睨みつつバクラは問う

城之内が正直にその問いを返すと、嘘を言っていないと分かったか再び朝倉の方へ

「おい、ちよつと表出る」

「ちよつ、ほんのジョークだってばバクラさ……」

「出る」

「……はい、って痛い痛い痛い！頭掴んだまま引つ張らないでってば！」

半ば脅迫で朝倉を立たせると、頭を鷲掴みにしたまま部屋の外へ

「じよ、城之内さん！」

朝倉は助け船を城之内に求めたが

「な、なあバクラ、別に許してやつても……」

「あ？」

「……すまん朝倉」

「そんなあつ！」

あつさり見捨てられた

ボタン

きゅー————

「……本当にすまん」

その後バクラが不機嫌そうに部屋に入ってきたが、『何をしたのか』はとても訊けなかった城之内であった

第2話 笑顔の幸運少女？（後書き）

城之内

「よう読者のみんな！城之内克也だ！」

桜子

「椎名桜子だよー！」

バクラ

「……バクラだ」

城之内

「つーわけで第2話も無事に終了、いやー今回はかなり危なかったぜ」

桜子

「けど楽しかったー！またやろうね！」

城之内

「おう！」

バクラ

「んじゃあさつさとコーナー進めるぞ、まずはデッキ紹介か」

桜子

「今回紹介するのは、私が使った【ギャンブル】だね！」

城之内

「時の魔術師、リボルバー・ドラゴン、マキシマム・シックス、ルーレットボマーなど、とにかくギャンブル効果を持ったカードを思いっきり詰め込んだデッキだな」

桜子

「魔法・罠も殆どがそれ！今回使ったの以外にも、デンジヤラスマシんとか入れてるよ！」

バクラ

「セカンドチャンスは入れてるのか？モンスターBOX＋一撃必殺侍とコンボすればかなりの威力だぜ」

城之内

「それって確か、コイントスを１ターンに一回やり直せるっていう効果だったか？」

バクラ

「ああ」

桜子

「使わないよー、そんなの使ったって面白くないもん。第一、一度決まった目を無かったことにするなんてギャンブルじゃないし」

城之内

「そうだな、それでこそギャンブルだ！やっぱりお前とは気が合うぜ桜子！」

桜子

「えへへー」

バクラ

（メタ発言になっちまうが、こいつが『R』でやり直しカード使ってるのは言わねえ方がいいのか？まあ時系列的にはこれの後になるけどよ）

城之内

「次は、制作裏話だな」

桜子

「んつと、何を話せばいいかな……あ、そうそう！作者さんって、私をエクゾディアデッキにする構想を一時期練ってたんだって！」

バクラ

「らしいな、だがあのデコチビをエクゾにしたんで素直にギャンプルデッキへ再決定したそうだ」

城之内

「それだと明らかにネタ要素でしか登場できなかったな……」

バクラ

「あとはそうだな……俺様が出演することになった理由とかか」

城之内

「あ、そうそう、それ俺も気になってた」

バクラ

「何でも『城之内の次に気に入ってるキャラだから』とか『3-Aのあるキャラと絡ませたい』とかが理由らしい、『マリクに闇のゲームで負けた』という点でも色々都合がいいからな」

城之内

「とあるキャラ、つてのは誰だ？」

バクラ

「それは俺も知らねえ、だがある程度話が進んだらやるらしいぜ」

城之内

「ふーん」

桜子

「じゃあ次は次回予告だね！」

城之内

「次回は一日明けて日曜日、何と俺の新デッキ登場だぜ！」

バクラ

「つつても何枚かカードを交換したただけだ、基本的な構成は変わってねえ」

桜子

「けど、何のカードを入れたのか気になるね！楽しみー！」

城之内

「あと、誰と戦うかも重要だな」

バクラ

「んじゃあ最後に、今回の最強カード紹介」

城之内

「今回の最強カードは、俺の《ギルフォ》……」

桜子

「私の《リボルバー・ドラゴン》だよ！」

リボルバー・ドラゴン

星7 / 闇属性 / 機械族 / 攻2600 / 守2200

相手フィールド上に存在するモンスター1体を選択して発動する。
コイントスを3回行い、その内2回以上が表だった場合、そのモンスターを破壊する。

この効果は1ターンの1度しか使用できない。

城之内

「ちよつと待てよ！今回勝ったのは俺だぞ！？」

桜子

デュエル

「でも決闘中で一番活躍したもーん。1ターンの一回、1/2の確率で相手モンスターを表裏関係なく破壊出来るよ！」

バクラ

「今回は全部成功させてたな、どうなってんだよテメエのその強運は」

桜子

「えへへー」

???

「いやいや、でも今回はまだマシだった方ですよ？この融合体とかさらに鬼畜効果ですから」

バクラ

「ん？なんだ、もう復活しやがったのか」

？？？

「まあそういうわけで、次回の遊戯王JIMもお楽しみに！」

第3話 筒抜けの情報戦？（前書き）

久々に投稿します、遊戯王JIMです。今回も本数は3本、今日と明日と明後日で投稿していきます。

例のごとく前書きと後書きは最初と最後のを除いてカットで。
ではどうぞ！

第3話 筒抜けの情報戦？

「……ふああああ、よく寝たぜ」

城之内麻帆良生活、二日目

混乱あり決闘ありの一日目を終えた城之内は、管理人室備え付けのベッドの中で二目を迎えた

ちなみにベッドは二段で城之内は上、バクラは下である

「さてと、朝飯作らねえとな……」

三食自分が作るのは、バクラと交わした約束事

目を擦りながらベッドの梯子に手を掛け、下りていく

「そついや作るにも、材料とかちゃんとあんのか？」

台所に向かった時点でそのことに気付く城之内

だがパンやら卵やらはとりあえずあり、それは杞憂に終わった

「おいバクラー、朝飯出来たぞー」

「……ん」

ある物でとりあえず、トーストと目玉焼き

卓上にそれを並べるとお次は、まだベッドの中のバクラを起こしにかかる

「んだよ、もう朝か……」

少々寝起きが悪かったが、すぐにベッドから降りてバクラも食卓へ

「ったく、こんだけかよ、しけてやがんな」

「材料無かったんだから贅沢言うなよ……」

「ちつ、じゃあ今日の内にさっさと食材買ってこいよ」

「へいへい……」

いただきますの一言も言わず、バクラはトーストに手を伸ばして
頬張る

城之内は一応ながら手を合わせてから食べ始め、互いに数分で完

食した

「……さて、こつちの世界だと今日は日曜か」

元いた世界と日付や曜日がズレているため、やはりやや違和感

「特に今はする仕事もねえし、退屈なもんだな……」

「……ん？もう時間か」

城之内がそんなことを呟いてると、バクラが時計を見てスツと立ち上がり部屋を出ようとす

どうした？と城之内が訊くと、ちよつと用事があると返答

それと、昼前後に戻るのでちゃんと昼飯は作っておけ、とのこと

以上のことを言うと、バクラはさつさと部屋から出て行ってしまった

ボタンとドアの閉まる音がし、これで管理人室には城之内ただ一人

「…………暇だな」

寝転がって数分もすると、城之内の口からはそんな不満が口から漏れ始めた

「いつもだったら本田とゲーセン行ったり、遊戯と決闘デュエルしたり……
どっちも出来ねえんだもんな……」

副管理人としても、今のところする仕事は特に無い

「……………部屋の掃除でもすつか」

いつもの自分ならあまり考えもしないことを思いつき、実行に移した

「……………暇だな……」

しかし、それも一時間もすれば終了

バクラの私物があるらしき場所には手を付けず、ダイニングやら

キッチンやらトイレやら

目ばしいところは粗方掃除をし、またもすることが無くなった

「デッキ調整でもするか……」

ならば決闘者^{デュエリスト}としての本分を

そう考え、城之内は再び身体を起こす

自分のベッドの脇に置いていた自身のデッキ

それを取り出して早速取り掛かろうとしたが

「……あ、他のカードがねえ」

やはり早々と躓き

ピンポーン

ガチャ

「はい、あ、城之内さんやん」

「誰？ああ、この人がネギと木乃香の言ってた……」

「よお、ちょっと頼みたいことがあつてよ……」

数少ない知人に頼ることと相成ったのである

↓ 学園内 某カードショップ ↓

「おおおおおっ！いい店じゃねえか！」

「せやろ？ウチらもカード買う時はいつもここなんや」

「全く、午前中から何の用かと思ったら、『近くにあるカードショップ教えてくれ』だなんて……」

城之内は目を輝かせ、店内のあちこちに目を向ける

麻帆良^{マホウ}に来てからまだ一日

そんな中出来た数少ない知人である近衛木乃香の案内のもと、城之内達三人は寮から比較的近くにあるカードショップへと足を運んでいた

悪態を突いているのは、木乃香と同じ部屋に住む同級生

「けどアスナかてついてきてるやん」

「一人で部屋にいるのが退屈なだけよ、ネギとカモも出掛けてていないし」

神楽坂明日菜である

「けどあの人が、バクラさんと同じで異世界人ねえ……」

「お、何だこの白い枠のカード!？」

アスナも魔法関係者であるため、例外なくネギから話を聞かされている

そんな彼女が城之内に視線を向けると、彼はショーケースにあるカードを見て大声をあげていた

「木乃香木乃香!この白いカードって何だ!？」

「はいはい今行くえー」

「恥ずかしい……」

城之内の世界にはまだ無かった『白い枠のカード』

その説明をしてあげるべく、木乃香はスタスタと城之内の方へと歩を進める

アスナは知り合いだと悟られたくないのか手で顔を覆って目を逸らし、別の棚の方へと向かった

「なるほどなー、これが朝倉の言ってた『シンクロモンスター』ってやつか……」

「汎用性高くて強いのが多いさかい、だいたいみんな何枚かは入れるなー」

城之内は手に持った一枚のカードをまじまじと見ながら、木乃香の説明にうんうんと頷く

シンクロモンスターの定義等々は、木乃香の分かりやすい説明により数分でほぼ把握

そのまま、『戦士族だしカッコいいから』という理由でショーケースにあったシンクロモンスターを一枚購入していた

選んだカードは傷が少々目立っていたが、『傷とか云々でカードを選ぶのは俺の性分じゃねえ』と言って迷いなくそれをレジへ

まあ、『安く買えるから』という理由も結構大きいようである

「けどそれ一枚あったかてダメやで？シンクロ召喚するには……」

「『チューナー』がいる、だろ？」

「そうやな」

自分がさっき教えたことをそのまま言ってみせた城之内に、木乃香はフフツと笑う

「死者蘇生使って相手のを奪う方法もあるんやけど、やっぱり自分で入れてた方がやり易いんよな」

「それで木乃香、そのチューナーってのもデッキに欲しいんだけどよ、どのパックに入ってるんだ？」

「うーん、チューナーは大体どのパックにも入っとるからな……」

木乃香は少々悩んだ様子で、パック売り場の棚を見渡し始めた

「……一番簡単なのは、ストラクチャーデッキ買うとかやるか」

「ストラクチャーデッキ？」

「初心者向けの構築済みデッキや。そこに収録されとるカードを何

枚が抜いて、自分のデッキに入れるだけでも結構良くなるで？……
あ、あつたあつたこれや」

単品のパックが置いてある棚の、一つ隣にあった棚

そこから商品の一つ取り出すと、木乃香は城之内に手渡す

「はい」

「1050円、か……うーん……」

が、値札を見て城之内は苦しい表情

「……もしかして、お金持ってないん？」

「……実を言うと、さっきのカード買って残り300円くらいしかない」

「あちゃあ……」

まさかと思い訊いてみたら、見事当たってしまった

というよりそもそも、さっき城之内が買ったカードも一枚200円ちよつとの安物

仮に買ってなかったとしても、城之内には到底買えない品物なのである

「普通のパック買うにも、300円やと二つしか買えへんな……お爺ちゃんからお金貰うてへんの？」

「まだ貰ってない……こんなことなら初日の内から貰っとけば良かった」

「せやったら場所はもう覚えたんやし、今度お金貰った時に改めて来……」

「あ、城之内さんじゃーん！」

「「ん？」」

今日の購入は諦めようとしたその矢先

両者共に聞き覚えのある声を耳にし、振り返る

「奇遇ねー、二人ともカード買いに来たの？」

「お、ハルナじゃねえか！」

「他の二人も来てるん？」

昨日会った時と違い、ラフな私服姿でいたハルナだった

「来てるわよ、あとクラスのみんなも何人か。今あっちのデュエルスペースで決闘中」

ハルナが店内の端の方を指差すと、確かに見覚えのある顔が数名

特に城之内にとっては印象深い夕映、桜子の両名もいるのが分かる

「ところで何かあったの？随分悩んでるみたいに見えたけど」

「あー、実はやな……」

木乃香は城之内本人に代わり、現状をハルナに話し出す

当然『異世界から来たのでシンクロを知らない』どうこのことは伏せ、単純に『新しいカードが欲しくて店に来たが、金が無いことに気付いて困ってる』とだけ話した

ハルナも城之内の金欠ぶりに驚いてる様子だったが、すぐさま城之内に一つ提案してみせる

こつちこつちと手招きし、店内のとある一角へ連れて来た

「300あるんならこれ三つ買ったらどう？別にレアカード欲しさで来たわけじゃないみたいだし」

「へー、レアカードやパックじゃなくてこんなもんも売ってるのか……」

連れてきた場所にあったのは、『ノーマルカード詰め合わせ 100円』と書かれたボックス

透明のビニールパックにカードが十数枚封入されており、それが幾つの中には入っている

「まあ主に入ってるのは、『いらなくなつて（いらなくて）客が売りに来た中古のカード』だけど、城之内さんのデッキってかなり特殊だから合うカードが案外あるかも……なんてね」

「よし決めた！これにするぜ！」

「決断早いな！」

早速城之内はボックスからカードを取り出し、レジへ

会計を済まして二人のところへ戻ると、お次はお待ちかねの開封タイム

「これがチューナーか！……ん？俺のデッキに入ってるあいつと殆ど一緒だな、モンスター効果とチューナーの有無以外」

「え！？これのリメイク元入ってるんですか？」

「これも戦士族……炎属性でしかもパワーアップ効果……よし！こいつもデッキに入れてみるぜ！」

「なんや炎属性って城之内さんとイメージぴったりやなー」

「二回攻撃モンスター……攻撃力がそれなりに高いし、隼の騎士と入れ替えて投入してみるか」

「随分とまた古いカード使ってますね」

「まあ確かに、これと隼の騎士とやったらこっちやなー」

「機械族の低レベルモンスターか……お、手札から特殊召喚出来るのか」

「城之内さんってロケット戦士入れてましたよね？あれとコンボ出来ますよ」

「あ、ホントだ！よし、こいつも投入だ！」

「これは罨カードか……面白え効果だな、こいつも入れるか」

「これって専用デッキじゃないと難しいですけど？」

「けどつまりはギャンブルカードみたいなもんだろ？俺はこういうカード大好きだぜ」

「へー、城之内さん桜子みたいやなー」

等々、なかなか良いカードが手に入った模様

その後自らのデッキを改造、さっき買ったそれらの何枚かを投入

「出来たぜ！俺の新デッキ！」

「やったなー城之内さん」

「それじゃ早速テストプレイよね」

こうして城之内の新デッキが完成し、対戦相手を求めるべく3 - A生徒の集うデュエルスペースへと足を運ぶのだった

「ふっふっふ……なら今度こそ、私のエクゾディアの餌食にしてやるです！」

「私私！私が相手するよー！」

で、行ってみるや否や夕映&桜子の両名が決闘^{デュエル}しろと突撃

たまらず城之内は両手を前に出し、二人を止める

「おい待った待った！そんなに焦んなくてもいいだろ！？」

「あんなまぐれ勝ちはもう二度と起こらないことを、この場で証明してみせるです！」

「まだあの時の決闘^{デュエル}だけじゃ、手の内を出し尽くしてないもんね！私と私と！」

方や城之内へのリベンジの誓い

方や己が好敵手との戦いの切望

共に譲るつもりはさらさらない

そこで、このままじゃ埒が明かないなと一人の少女が間に割って入った

「まあまあ落ち着きなつてば……とりあえず、二人は城之内さんの相手は遠慮したら？」

「何故です朝倉さん！」

「そうだよー！」

そう、昨日バクラから制裁（？）を受けた朝倉和美

昨日と全く変わらない様子で、そのまま二人へ言葉を続ける

「いや、だって今回は手合わせ以前に城之内さんの新デッキのテストデュエルなわけだしさ。夕映っちはエクゾディアで桜子はギャン

ブル、どっちもあんまテストデュエルには向いてくない？」

「う、確かにそうかもですが……」

「もう少し待って、完全にデッキが出来上がってからでも遅くないと思うよ」

とりあえずだが、二人は朝倉の言葉に納得
するとここで、新たな問題が立ちふさがる

「じゃあじゃあ、誰が城之内さんと決闘するのー？」
デュエル

テストデュエルの相手は結局誰が？ということ

朝倉の言う通り、あまりにも特殊すぎるデッキはやはり向いてい
ない

しかし朝倉は予め考えていたようで

「ま、ここは流れるに……」

腰に付けてたデッキケースから自身のデッキを取り出し

「私でしょ、勝負よ城之内さん！」

右手でそれを持ったまま城之内に突き出した

「「え？」」

が、直後夕映＆桜子の両名は声をもらす

「いやいや待つです朝倉さん、朝倉さんのだって充分特殊ですよね？」

「そうそう」

何度か決闘^{デュエル}してるのかデッキの特性は分かっているようで、夕映の言葉に桜子は頷く

「けど基本はビートダウン、つまりは戦闘型だよ？」

「しかしアレは……」

「いや、だって今日来てるので普通のデッキなのって一人もいないし」

朝倉は周りにいるクラスメイトの顔を見て確認し、一言

今日来ているのは彼女ら三人に加え、のどか、ハルナ、亜子、鳴滝姉妹

それと城之内と一緒に来た、木乃香とアスナで全員（ただしアスナが来てることを朝倉達は知らず、さらに言えば二人はデッキを持ってきていない）

「まあ確かにそうですが……」

「そついうわけで、私がするね」

半ば無理矢理決めたような形で、朝倉は席につく

さあ座って座って、と城之内に促すと彼も席へ

「今回はテストデュエルだし、ちゃんと公式ルール通り8000で」

「よし、分かった」

デッキを交換し、シャッフルし終わると相手に返却

デュエルシートの右下へ、互いにそれに乗せた

「行くぜ朝倉！」

「はいはい、お手柔らかにお願いしまーす」

「「^{デュエル}決闘！」」

（あのデッキは本当に厄介ですからね……まあ、私のがアレとかなり相性的に悪いからというのもあるかもですが）

第3話 筒抜けの情報戦？

麻帆良に来て初めて購入したカード

チューナー、シンクロモンスター

全て城之内のいた世界には無かった、彼にとっては未知なるカード
それらを使い構築した、城之内の新デッキのテストデュエルが始
まった

相手は3 - A出席番号3番 朝倉和美

じゃんけんにより、先攻は城之内

「俺のターン、ドロー！モンスターを守備表示でセット、伏せカードを二枚出してターン終了だ」

城之内 LP8000 手札3

「じゃあ私のターン、ドロー（うーん、まだキーカードは来ないか……）こっちもモンスターを裏守備で伏せカード二枚、ターン終了」

朝倉 LP8000 手札3

「よし、俺のターンだ！ドロー！」

「はい、その瞬間畏発動ね」

「何だと!？」

(うわ、いきなり制限カードのアレを引いてたですか……)

「ダストシユート、相手の手札を見てモンスターカード一枚をデッキに戻す。ただし手札四枚以上が発動条件」

「くそつ、ちょうど俺の手札はさっきのドローで四枚だ……」

城之内の手札

人造人間サイコシヨッカー

不意打ち又佐

共闘するランドスターの剣士

ロケット戦士

「お、ラッキー、今使ってたなかったらちょっと危なかったですね?じゃあサイコシヨッカーで」

「このターンで召喚しようと思ってたのに……」

「ふふ、残念残念」

「だが他のモンスターで戦うことは出来る!俺はロケット戦士を攻撃表示で召喚!」

ロケット戦士

攻撃力1500/守備力1300

「次に、前のターンにセットしたリトル・ウイングガードを反転召喚！」

リトル・ウイングガード

攻撃力1400 / 守備力1800

「ロケット戦士で伏せモンスターを攻撃だ！」

ロケット戦士 攻撃力1500

VS

裏守備モンスター 守備力？

「了解、伏せモンスターは大王目玉」

大王目玉

攻撃力1200 / 守備力1000

大王目玉 破壊！

「へっ！そんな雑魚モンスター粉碎だぜ！」

「けど、モンスター効果を発動。私はデッキの上から五枚のカードを見て、それらを好きな順番に変えてデッキの上に戻す、チェーンは無いですね？」

「あ、ああ（マズいな……これで少なくとも1、2ターン、朝倉のドローはそれなりに良いドローになっちまうぜ）」

チェーインの有無を訊き、朝倉はデッキトップから五枚のカードをめくって確認

朝倉の口元が僅かに上がったのを、城之内は見逃さなかった

（な、何だ！？五枚の中にあいつの切り札でもあったのか！？）

「じゃあ下から順にこれ、これ、これ……あとはこれにこれね。はい、効果処理終了」

「続いて、リトル・ウイングカードでダイレクトアタック！」

リトル・ウイングカード 攻撃力1400

朝倉LP8000 6600

「俺のターンは終了だ。そしてエンドフェイズ時、リトル・ウイングカードの効果で自身を守備表示に変更する」

城之内 LP8000 手札2

「私のターン、ドロー」

（一体、何をデッキの一番上にした！？）

「手札からさっき引いた永続魔法、デーモンの宣告を発動」

「デーモンの宣告？」

（出たですね、朝倉さんのデッキのキーカードの一枚……）

『醤油レモン』なる怪しげな飲み物をいつの間にか口にしながら、夕映は眉をひそめる

「というわけで早速効果発動、宣言するのは死者蘇生」

朝倉 LP6600 6100

「ん？どんな効果だそれ？」

「……ライフを500払ってカード名を宣言、デッキの一番上のカードがそれだった場合無条件でそのまま手札に加えるカードです」

ストローから口を離し、発動した当人である朝倉に代わって夕映が説明

「ふーん……って、そんなのさっきの大王目玉の効果で丸分かりじゃねえか！」

「そういう戦術なのですよ、というかさっきの大王目玉の時点で気付かなかったですか？」

「いや……てつきり、単に欲しいカードを手札に加えやすくしないだけなのかなーって」

「……まったく、ホント無知ですねあなた」

「何だとおっ!？」

「だからデッキ構築もあんなに下手くそなんですよ、ハルナや木乃

香さんも一緒にいたとはいえ、今回作ったデッキも滅茶苦茶なんじゃないですか？」

「デコチビてんめえっ！」

「まあまあ城之内さん、今は決闘中なんだから……^{デュエル}夕映もちよつかい掛けないの」

「むう……」

一瞬即発になりかけたが、何とかハルナが仲裁

続けていいかな？と朝倉が確認をとり、改めて決闘再開^{デュエル}

「というわけでデッキの一番上を確認、宣言通り死者蘇生だからそのまま手札へ」

朝倉 手札3 4

（かなり強力なカードが手札に加わっちまったぜ……）

「モンスターを裏守備でセット、これでターン終了」

朝倉 LP6100 手札3

「（まだ発動はせず、か……まあ、まだ墓地にはモンスターが殆どいないしな）俺のターン、ドロー！よし！」

「？」

「俺は手札から、切り込み隊長を攻撃表示で召喚！」

切り込み隊長

攻撃力1200 / 守備力400

「さらにこいつの効果で、手札にある共闘するランドスターの剣士を攻撃表示で特殊召喚！」

共闘するランドスターの剣士

攻撃力500 / 守備力1200

「お、さつき新しく入れたカードの内の一枚やな」

「こいつのモンスター効果で、俺の場の戦士族モンスター達は攻撃力が400ポイントずつアップする！」

ロケット戦士

攻撃力1500 1900

リトル・ウイングガード

攻撃力1400 1800

切り込み隊長

攻撃力1200 1600

共闘するランドスターの剣士

攻撃力500 900

「やった！総攻撃力6200や！」

「リトル・ウイングガードを攻撃表示に変更し、バトルフェイズ！ロケット戦士で伏せモンスターを攻撃！」

ロケット戦士 攻撃力1900

VS

裏守備モンスター 守備力？

「伏せモンスターはグリズリーマザー、そのまま破壊ね」

グリズリーマザー

攻撃力1400 / 守備力1000

「よし！そのまま他の奴らでダイレクトアタック……」

「そして戦闘破壊されたことでモンスター効果発動、デッキから二枚目のグリズリーマザーを攻撃表示で特殊召喚」

「ぐ……場にモンスターは途切れねえか」

「で、どうします？」

「決まってる、バトルフェイズ続行！次は切り込み隊長で攻撃！」

切り込み隊長 攻撃力1600

VS

グリズリーマザー 攻撃力1400

グリーズリーマザー 破壊！

「じゃあ効果で、三体目のグリーズリーマザーね」

朝倉 LP 6100 5900

「だがこれでグリーズリーマザーは種切れた！リトル・ウイングガードで攻撃！」

リトル・ウイングガード 攻撃力1800

VS

グリーズリーマザー 攻撃力1400

グリーズリーマザー 破壊！

朝倉 LP 5900 5500

「はは、まだまだ……効果でリチュア・デイバイナーを特殊召喚、攻撃力は1200」

リチュア・デイバイナー

攻撃力1200 / 守備力800

「ぐ、共闘するランドスターの剣士の攻撃力じゃ倒せない……」

「これでもう攻撃は終了しますよね？」

「ああ……だがこれだけじゃ終わらねえ！」

城之内はデッキゾーンとは反対側

すなわちエクストラデッキゾーンに手を伸ばし、そこにある数枚のカードの中から一枚を手取る

「レベル3切り込み隊長に、同じくレベル3の共闘するランドスターの剣士をチューニング！」

場にある二体のモンスターを手にし墓地へ

「シンクロ召喚！大地の騎士ガイアナイト！」

「おおつ、店に来て最初に買ったあのカードやな！」

「攻撃力は2600！」

大地の騎士ガイアナイト

攻撃力2600 / 守備力800

「ランドスターの剣士がいなくなったことで、他の二体の攻撃力はダウンする」

ロケット戦士

攻撃力1900 1500

リトル・ウイングガード

攻撃力1800 1400

（成程、バトルフェイズ前にシンクロさせた場合総攻撃力は5500……一応考えてるようですね）

「リトル・ウイングガードを自身の効果でエンドフェイズに守備表示へ変更、ターンエンドだ」

城之内 LP8000 手札1

（ダメージは少しだけだったが、グリズリーマザーの効果でデッキはシャッフルされて順番が変わった……これでもうデーモンの宣告の効果は使えねえぜ！）

（あ、この顔はおそらく知らないですね……リチュア・デイバイナーの効果を）

夕映の予感は的中していた

早速朝倉は、自身が得意とするコンボをそのまま実行に移す

「私のターンね、ドロー。リチュア・デイバイナーの効果を発動、宣言するのはサイクロン」

「え？そいつも何か効果があるのか？」

「そう、デッキの一番上のカードを当てたら手札、外れたら元通り一番上に戻す効果」

「何！？デーモンの宣告と同じ効果だと！」

「つまりはそういうことですかね、ライフコストの有無とか差異は

色々ありますけど。さて一番上は……あー残念、ゾンビキャリアか」

こう言っではいるが、朝倉の顔は全然残念そうじゃない

「続いてライフを500払い、デーモンの宣告の効果を発動」

朝倉 LP5000 4500

「宣言するのはゾンビキャリア、当たったからそのまま手札に」

朝倉 手札4 5

「また手札が……」

「次に手札から、深海のティーヴァを攻撃表示で召喚」

深海のティーヴァ

攻撃力200 / 守備力400

「そしてモンスター効果発動、召喚成功時にデッキからレベル3以下の海竜族モンスターを特殊召喚出来る、出すのは二体目のリチュア・ディバイナー」

「げげっ！」

「一応だけどもンスター効果発動、宣言するのはサイクロン……外れか、まあ当たらないとは思ってたけどね（お、けどラッキー）」

デッキの一番上にあったのは永続魔法

しかし城之内の知らないカードであり、確認しようとする前に朝倉が裏にしてデッキの一番上に戻した

「うわ、しかも深海のティーヴァってチューナーじゃねえか！」

「そゆこと、ってわけでシンクロ召喚。リチュア・デイバイナーに深海のティーヴァをチューニングして……カタストル召喚、攻撃力は2200」

A・O・Jカタストル

攻撃力2200 / 守備力1200

「何だ、脅かしやがって……ガイアナイトより攻撃力は下じゃねえか」

「バトルフェイズ、カタストルでガイアナイトを攻撃」

A・O・Jカタストル 攻撃力2200

VS

大地の騎士ガイアナイト 攻撃力2600

大地の騎士ガイアナイト 破壊！

「何だと！？」

「カタストルのモンスター効果、闇属性以外のモンスターと戦闘したらそのモンスターを一方向的に破壊。戦闘ダメージの発生はお互いに無し」

朝倉 LP4500

城之内 LP8000

「しまった、俺の新しい切り札が……」

（え！？）

城之内のこの呟きに、ガイアナイトごときが切り札ですか！？と夕映は思わず表情を強張らせる

だが、実際ガイアナイトは城之内のデッキの中で二番目に攻撃力が高い

一番は言うまでもなくギルフォードなのだが、こいつが（攻撃力的に）第二の切り札だと構築当時意気込んでいた城之内なのだった

（マズい……俺のデッキで攻撃力2200以上の闇属性なんて、さつきデッキに戻されたサイコソッカーしかいねえ）

「リチュア・ディバイナーを守備表示に変更して、カードを一枚セツト。ターン終了」

朝倉 LP4500 手札3

「俺のターン、ドロー！（！これなら……）手札から不意打ち又佐を召喚、攻撃表示だ！」

不意打ち又佐

攻撃力1300 / 守備力800

（これでダスト・シュートで確認したカードは全部、すると未確認はさっきドローしたあのカードなわけだけど……強化系のカードでも引いたかな？）

「リトル・ウイングガードを攻撃表示に変更してバトルフェイズ。不意打ち又佐は闇属性、カタストルを攻撃だ！」

不意打ち又佐 攻撃力1300

VS

A・O・Jカタストル 攻撃力2200

不意打ち又佐 破壊！

（あれ？何もしてこなかった？）

城之内 LP8000 7100

（しかも戦闘破壊だからダメージまで）

「次に、リトル・ウイングガードでリチュア・ディバイナーを攻撃！」

リトル・ウイングガード 攻撃力1400

VS

リチュア・ディバイナー 守備力800

リチュア・デバイナー 破壊！

「ロケット戦士では攻撃せずメインフェイズ2、俺は手札からモンスターを守備表示で特殊召喚する！」

「え？」

「出でよ！ワンショット・ブースター！」

ワンショット・ブースター

攻撃力0 / 守備力0

「モンスターの召喚に成功したターン、手札からの特殊召喚が可能なモンスター。さらに！」

「自身を生贄にすることで、このターン自分のモンスターと戦闘したモンスター一体を破壊する……」

「知ってるなら話は早い！ワンショット・ブースターを生贄にしてこのターン不意打ち又佐と戦闘を行ったカタストルを破壊する！」

A・O・Jカタストル 破壊！

「あらら、返しのターンでやられちゃったか……そのカードって、本来はロケット戦士用ですよな？」

「まあな」

ロケット戦士には、自分からの攻撃では戦闘によって破壊されない

い効果がある

故にコンボ用として組み込んでいたのだが、今回の相手はカタストル

光属性のロケット戦士ではカタストルの効果で、戦闘を介さず『効果破壊』とされてしまう

そのため今回は自爆覚悟で、闇属性である又佐に特攻させたのだ

「エンドフェイズ時、リトル・ウイングガードを守備表示に変更……俺のターンは終了だ！」

城之内 LP 7100 手札 0

「私のターン、ドロー」

（向こうのモンスターは全滅、完全に俺が優勢だぜ！）

「ふっふっふ……残念だけど城之内さん、この決闘は私がもらったよ。手札から永続魔法発動」

（さっきドローしたカード……そんなに強力なカードなのか？）

（ついに来たです、朝倉さんのデッキの核パーツ）

「天変地異！このカードの効果で、互いのプレイヤーはデッキを裏返しにして決闘^{デュエル}を進行する！」

「はああっ!？」

驚愕する城之内をよそに、朝倉はデッキを裏返し

しかしれっきとした効果なので、城之内も戸惑いを残しながらも同じく裏返す

これにより、両者共に次のドローカードが明白となる

デッキの一番上

朝倉 死者への手向け

城之内 鉄の騎士ギア・フリード

「じゃあ次にデーモンの宣告の効果を発動、宣言するのは死者への手向け」

「これじゃあ大王目玉みたいな方法を取らなくても、毎ターン確実に当てられちまう……」

またも朝倉は、手札補充

朝倉 LP 4500 4000 手札 3 4

デッキの一番上

朝倉 破天荒な風

「さらに手札から死者蘇生を発動、蘇生するのは……」

自分の墓地に手を取り、墓地の一番上にあつたカタストルの一枚下

「リチュア・ディバイナー！」

モンスター版デーモンの宣告を蘇生させる

「リチュア・ディバイナーの効果発動、宣言するのは破天荒な風」

朝倉 手札3 4

デッキの一番上

朝倉 天変地異

「そして死者への手向け発動、手札のゾンビキャリアを捨ててリトル・ウイングガードを破壊」

リトル・ウイングガード 破壊！

「くそ……」

「さらに墓地のゾンビキャリアの効果を発動、手札を一枚デッキの一番上にして、墓地から特殊召喚」

「何だと!？」

「破天荒な風をデッキに戻して、ゾンビキャリア蘇生」

朝倉 手札1

デッキの一番上

朝倉 天変地異 破天荒な風

「さらに手札からパトロール・ロボを召喚、これで合計レベルは8」

「……シンクロ召喚か!？」

「そゆこと、レベル3のリチュア・ディバイナーとパトロール・ロボに、レベル2のゾンビキャリアをチューニング……」

（だが、俺の伏せカードを使えばそんなやつ……）

「レベル8、スターダストドラゴンをシンクロ召喚! 攻撃力は2500!」

（来た! これなら発動出来る!）

（ちよつ、まさかそれを使う気ですか!？）

朝倉がエクストラデッキからカードをフィールドに置く

それとタイミングを同じくして、待ってましたとばかりに伏せカードの内一枚を手についた

「待った朝倉! それに対し俺は罠カードを発動する!」

「え!？」

「奈落の落とし穴発動! このカードの効果で、攻撃力1500以上であるお前のスターダストドラゴンは除外させてもらっぜ!」

そして発動と同時に

「……え?」

城之内を除く皆の衆の表情が引きつる

「ん？どうした？」

原因が分からない城之内はただ首を捻るばかりだが、それは朝倉の口から苦笑いされながら告げられた

「えっと……じゃあスターダストの効果発動、自身を生贄にするこ
とで破壊効果を持つカードを無効にして破壊。奈落の落とし穴の効
果は『破壊して除外』なので。そういうわけでスターダストは除外
されずに墓地行き、さらにエンドフェイズ時にスターダストは墓地
から特殊召喚されます」

「……………何だとおおっ!？」

つまり、先攻1ターン目から張っていた城之内の罠は不発

そこへ夕映が、呆れ顔でまたも口を挟む

夕映は城之内の後ろから見ていたため奈落の落とし穴のことも、
そして残るもう一つの伏せカードの正体も知っていた

「スターダストの効果すら知らないとか……というか、1ターン目
からあったのに何故カタストルの時に使わなかったのですか？」

「んなこと言っただって、その時はカタストルの効果も知らなかった
わけだしよお……それに攻撃力2200なら、使わなくてもガイア
ナイトで倒せるかなって……」

「……フウ」

城之内の返答を聞き、夕映はやれやれといったような表情で細く息を吐く

二度にも渡る彼女の挑発に

（ぐぐぐぐぐ、怒っちゃ駄目だ、怒っちゃ駄目だ、怒っちゃ……）

額に血管を浮かばせ、手札が無いのをいいことに両拳を力強く握りしめていた

これをまたもハルナが宥め、朝倉が続けていいかと確認を取って
デュエル
決闘再開

「……じゃあこれで私はターン終了。エンドフェイズにスターダストが場に帰還」

朝倉 LP4000 手札0

「俺のターン、ドロー！」

デッキの一番上
城之内 クイズ

「げっ!？」

朝倉はニヤリと笑い、これ幸いとばかりに城之内の墓地に手を伸ばす

「ちょっとごめんね城之内さん、墓地見せて。これは公開情報だから拒否は無理ですよ？」

「ぐぐぐ……」

クイズ、『自分の墓地の一番下にあるモンスターカードを相手に当てさせ、当てられたら墓地から除外、外れたら場に特殊召喚』という効果を持つ

モンスターの特殊召喚目的でクイズを使おうと思ったら、決闘^{デュエル}が中盤以降に入って記憶が曖昧になったところを奇襲するしかない

が、こうしてクイズが城之内の手札に入ること知らされては奇襲もくそもない

朝倉もすぐに墓地の一番下を確認した

「あーはいはい、切り込み隊長。シンクロ召喚って素材を墓地に送る順番の指定とか無いから危なかったかも」

どうも、と一言告げて墓地のカードを元の位置に戻す

（くっ、天変地異のせいで俺の手札は朝倉に筒抜けだ……どうする？）

悩む城之内だったが、取る方法の一つしかない

「……モンスターをセット、ロケット戦士を守備表示に変更してターンエンドだ」

城之内 LP7100 手札0

「（ふふん、ギア・フリードね。守備力は1600つと）私のターン、ドロー」

デッキの一番上

朝倉 天変地異

「（ライフがちょっと惜しいけど、次のターンのドローがあればちょっとね）デーモンの宣告の効果発動、宣言するのは天変地異」

朝倉 LP4000 3500 手札1 2

デッキの一番上

朝倉 古代の遠眼鏡

「（うわ、次のも微妙）うーんと、スターダストで守備表示のロケット戦士を攻撃」

スターダスト・ドラゴン 攻撃力2500

VS

ロケット戦士 守備力1300

ロケット戦士 破壊！

「ぐっ、ロケット戦士が……」

「カードを一枚セットしてターン終了」

朝倉 LP3500 手札1

「俺のターン、ドロー！」

デッキの一番上

城之内 時の魔術師

（やった！次のドローは時の魔術師だぜ！）

「一応言っておきますが、時の魔術師の効果はギャンブルとはいえどっちの場合でも破壊が確定されてます。よって結局は『破壊効果』に分類され、スターダストの影響下では無効となりますよ」

「……マジでか？」

「マジです」

「……………」

城之内の肩が、誰の目で見ても分かるぐらい落ちた

「……俺はこのままターン終了だ」

城之内 LP7100 手札1

「私のターン、ドロー」

デッキの一番上

朝倉 氷弾使いレイス

「（よしよし、今度は当たりね）デーモンの宣告の効果発動、宣言するのは氷弾使いレイス」

朝倉 LP3500 3000 手札2 3

デッキの一番上

朝倉 マインド・オン・エア

「じゃあ次に、手札から氷弾使いレイスを攻撃表示で召喚」

氷弾使いレイス

攻撃力800 / 守備力800

「さらに破天荒な風を使って、次の私のスタンバイフェイズまで攻守を1000ポイントアップさせます」

「何だと!？」

氷弾使いレイス

攻撃力800 1800

守備力800 1800

「氷弾使いレイスで、裏守備のギア・フリードを攻撃」

氷弾使いレイス 攻撃力1800

VS

裏守備モンスター（鉄の騎士ギア・フリード） 守備力???（

1600)

鉄の騎士ギア・フリード 破壊！

「（最初のターンから伏せられてるもう一枚のカードが気になるけど……さっきロケット戦士に攻撃した時も発動してないし、攻撃阻止系の可能性はほぼ無い！）続けてスターダストでダイレクトアタック！」

スターダスト・ドラゴン 攻撃力2500

城之内 LP7100 4600

「ぐうつ！」

「まあ、一応使っておきますか。メインフェイズ2に魔法カード、古代の遠眼鏡を発動」

ライフ差は一気に縮まり、完全に劣勢

そこでさらに朝倉は城之内へと追い打ちをかける

「相手のデッキを上から五枚見ることが出来ます、というわけですよっと失礼しますね」

「なっ！？」

デッキトップの一枚だけでは飽き足らず、さらに四枚先まで城内のカードを覗き見た

城之内のデッキの上から五枚（朝倉視点、城之内は知ることが出来ない）

時の魔術師

巨大化

スケープ・ゴート

増援

鎖付きブーメラン

（ふむふむ、巨大化を引かれちゃうか……けど装備モンスターがないんじゃないかな）

（何だ！？俺は時の魔術師以降何を引くんだ！？）

本来あまり使い勝手が良くないと敬遠されがちの古代の遠眼鏡だが、こういった『数ターン先まで相手の行動を読みたい』時にはここぞとばかりに真価を発揮する

特に朝倉のように、情報アドバンテージを重視するタイプならなおさらのこと

（いや違う、あの残った一枚の伏せカード！あれがリビングデッドの呼び声って可能が残ってる……次の私のターンの攻撃で城之内さんのライフは、0にはならないだろうけどほぼ確実に下回る）

城之内の墓地に眠るモンスター

その中で一番の攻撃力を誇るのは……

（ガイアナイト！巨大化つけられたら5200にまで上げられる！

私のライフは3000だからかなり危な……いや、ちょっと待つて)

だが朝倉はここで一つ疑問が浮かぶ

どうしたんだと城之内が気に掛けるが、『すいませんもうちょっとだけ考えさせてください』と返し再び思考に入った

(もしあれがリビデだと仮定して、城之内さんは何でスターダストのダイレクト時に発動しなかったわけ？私の手札に除去系カードが無いことは天変地異によって分かっているはず……巨大化のためにわざとライフを削らせた？いやそれも違う、巨大化を二ターン後に引くことは私しか知らない！)

長考の末、朝倉の出した結論は

「(あの伏せはブラフ！リビデの可能性は0！) 私はこのままターン終了！」

朝倉 LP3000 手札1

「俺のターン、ドロー！」

デッキの一番上

城之内 巨大化

(巨大化だ！？ってことは……)

(え？)

自身の中で確信していた朝倉なのだが、突如城之内の行動によっ

て揺らぐ

次に引くカードが巨大化だと知るや否や、城之内は自らの場にたった一枚残る伏せカードに視線を注いだのだ

（どういうこと！？やっぱりあのカードはリビデか、もしくはそれに準するモンスター特殊召喚カード！？）

「……………モンスターを守備でセット、ターン終了だ」

城之内 LP 4600 手札 1

この行動の意図は、伏せカードの正体を知る夕映は分かっていた

（確かに伏せカードと巨大化を組み合わせれば逆転の可能性があるにはあるですが…………いや、そんなことまず成功する筈がありませんです）

「私のターン、ドロー。スタンバイフェイズにレイスの攻撃力は元に戻ります」

氷弾使いレイス

攻撃力 1800 800

守備力 1800 800

デッキの一番上

朝倉 神獣王バルバロス

「（こうなったら最悪の事態を想定して戦うしかないわね。あれがリビデだとしたら最大攻撃力はガイアナイト装備時の5200、対

するスターダストは2500、だったら！）デーモンの宣告の効果は使わずにバトルフェイズ！レイスで裏守備の時の魔術師を攻撃！」

氷弾使いレイス 攻撃力800

VS

裏守備モンスター（時の魔術師） 守備力???（400）

時の魔術師 破壊！

「そのまま、スターダストでダイレクトアタック！」

スターダスト・ドラゴン 攻撃力2500

城之内 LP4600 2100

「くっ……」

「バトルフェイズを終了してメインフェイズ2、レイスを生贄にして手札のモンスター（マインド・オン・エア）を裏守備でセット。これでターン終了」

朝倉 LP3000 手札1

（これで大丈夫！仮に次のターンでリビデ&巨大化が来ても受けるダメージは最大2700、少なくともそのターンで負けることはない！）

（確かにデーモンの宣告でバルバロスを手札に加えて攻撃力190

0で妥協召喚し、攻撃に参加させてもスターダストと合わせて総ダメージは4400。4600ある城之内さんのライフは削りきれませんです……ですが朝倉さんその選択は！)

「俺のターン、ドロー！」

デッキの一番上

城之内 スケープ・ゴート

「……朝倉、俺の勝ちだ！」

「！？」

「メインフェイズ、俺は前から伏せていたこのカードを発動する……」

城之内の手が、先攻1ターン目からそのままいた伏せカードへと伸びる

(リビデじゃないなら何だっていうの！？異次元からの帰還とかは除外されたモンスターがいないから無理、貪欲な壺みたいなドローク系カードならこのタイミングで勝ちだとは言えない、儀式魔法や融合は素材が無くて、畏モンスターの攻撃力もたかが知れてるし……)

(灯台もと暗しです朝倉さん、その答えはあなたのデッキの中にもあるじゃないですか)

そして表に捲られ、城之内本人からそのカードの名を告げられた

「俺のカードはこいつだ、徴兵令！」

「徴兵れ……あああつ！」

全ての疑問が解けた朝倉は、咄嗟に自分のデッキを見て叫ぶ

「相手のデッキの一番上のカードを確認し、そいつが通常召喚可能なモンスターであれば俺の場に特殊召喚するカードだ！お前のデッキの一番上はモンスターカード、神獣王バルバロス！」

「攻撃力は、3000……」

「俺の場に特殊召喚！」

神獣王バルバロス

攻撃力3000 / 守備力1200

デッキの一番上

朝倉 収縮

「一手違い……」

「さらに手札から巨大化をバルバロスに装備！攻撃力を倍にする！」

神獣王バルバロス

攻撃力3000 6000

「な、何でそんなのをデッキに入れたんですか！？私も1〜2枚天変地異とのコンボ用に入れてますけど、それが無ければただの博打カー……あ」

「そういうことだ！ギャンブルと相手カード奪取、俺がそういうカードが好きなことは桜子との決闘^{デュエル}を見てお前も知ってた筈だぜ？まあ、今回は天変地異のおかげもあるがな」

「あはは……私としたことが、これは迂闊だったですね」

「バトルだ！バルバロスでスターダスト・ドラゴンを攻撃！」

神獣王バルバロス 攻撃力6000

VS

スターダスト・ドラゴン 攻撃力2500

スターダスト・ドラゴン 破壊！

朝倉 LP3000 0

第3話 筒抜けの情報戦？

「便乗の効果でドロー！ふっ、来ました、これでまた私の勝ちです！」

「くそーーーー！揃えられちまったかーーーー！」

「図書館島でやったのも合わせて、これで通算二勝二敗か……やっぱり城之内さん強いわね、夕映と普通に互角だわ」

「はいはい！次は私と決闘デュエルだよー！」

朝倉と行った、城之内の新デッキのテスト決闘デュエル

新たに投入したカードを見事に使いこなし、城之内が勝利を手にした

そして現在、夕映&桜子の決闘デュエルの相手を何度もしていたわけなのだが……

「ちょっと待ってよ桜子ー！僕達も相手したーい！」

「ですー！」

ずっと観戦側に回されていた鳴滝姉妹が、ついに抗議を始めた

同じく観戦者の亜子やのどかはそうでもないのだが、彼女らはどうも我慢出来ない様子

「ええー？もう一回くらいやらせてよー」

「ゆえ吉とそれぞれ三回づつもやったんだから充分だってばー！」

三戦の内訳は夕映に一勝二敗、桜子に二勝一敗

詳しい決闘描写は省くが、簡単に書けばこう

夕映一戦目 魔法＆罠によるロックカードで足止め中にエクゾ完成

二戦目 徴兵令でエクゾパーツを奪い、数ターン後ギルフォードの生贄にしてそのまま総攻撃

三戦目 便乗発動後、手札入れ替えカード大連発

桜子一戦目 桜子、ダイス・ポットで6の目を出す

二戦目 ダイス・ポットで引き分けやり直し三回の末、桜子5に対し城之内6

三戦目 徴兵令でリボルバーを奪い、毎ターン効果連発

つまり城之内、ただ今休み無しで七連戦

「城之内さん！次は僕と僕と！」

「お姉ちゃんずるーい！私だってしたいですー！」

風香が右、史伽が左に立って城之内の腕を掴む

そしてそれぞれが思い切り引つ張り

「ちよっ、ちよっと待ったお前ら、少し休憩させ……痛だだだだ！」

この始末

これは何とか朝倉と木乃香が止め、とりあえず城之内はしばし休憩

その間、3 - A生徒同士による決闘^{デュエル}を観戦することにした

「今や！ハルナの攻撃時に邪神の大災害を発動！場の魔法&畏力ー
ドを全破壊するで！」

「えっ！？やめ、ぎゃあああっ！私の場の究極の生命体達が全滅ー
ー！」

「究極と言いつつ結構脆いですよね、そのモンスター達」

「うるわいわね夕映！このデッキにはロマンが詰まってるのよ！」

「仕込みマシンガン発動！場と手札合わせて合計は11枚！220
0ダメージだ！」

「ま、負けましたー……」

「僕の勝ちー！あと2ターンで本屋の勝ちだったから焦ったよー」

「いえーい！また6だー！6000ダメージ！」

「ふえええっ！勘弁して下さいー！」

（しかしこの世界には色んなカードがあるんだな……まあ、ハルナは俺でも見覚えのあるカード使ってたけど）

そんなこんなで十数分経ち、そろそろいいでしょと鳴滝姉妹に急かされ着席

ではやるかと思ったところで今度は、風香と史伽どっちがやるかでまた揉めだす

「僕が先にやるのー！」

「私が先ですー！」

「なあ……やるならやるでさっさと決めてくれないか？」

すると

「あ、ここにいたんですか城之内さん」

店内に一人の少年が入店、城之内を見るや否やそのまま彼のもとへと駆け出した

肩にはオコジヨ、背中には杖

そう、言うまでもなく

「よう！どつしたネギ？」

ネギである

右手に何やら封筒らしきものを持っており、それを城之内に手渡す

「はいこれ、さつき用事で学園長先生の所へ行つた際に『昨日渡し忘れてたから今月分の生活費を城之内君に渡しといてくれんかのう』って頼まれました。寮にもいなかったんであちこち探し回つたんですよ?」

「おおそつか、何か悪かつたな」

封筒を受け取ると城之内は、礼をネギに述べた後中身を確認

直後

「どれどれ……つておい桜子、何勝手に覗いてんだよ」

「えー何ター?城之内さんお給料入つたのー?」

生徒数名が騒ぎ出した、まず桜子が封筒の中の現金を見て声をあげ

「そついえばもうすぐお昼よね」

朝倉が携帯を開いて現在の時刻を確認

「確かにお腹空いてきちゃったかも、するとやっぱり城之内さんがこの中で一番年長者なわけですし……」

ハルナが眼鏡を上げて妖しく笑みを浮かべ

「お昼ご飯を奢ってもらおう!」

「ですー！」

最後に鳴滝姉妹が声高らかに提案（という名のほぼ強制な要求を）した

さらにはタイミングの悪いことに

「んー？お昼ご飯がどうしたってー？ってネギ、あんたどうしてここにいるの？」

城之内らと別れて店内の商品を物色中であつたアスナが、決闘ス
ペースから聞こえる声につられてやって来る

ネギ含め（カモ除く）、この場の人数総勢合わせて十一人

「ちょ、ちょっと待て！ここにいる全員に奢れつてのか！？」

「一回くらいいいじゃん城之内さん、別に高いもんじゃなくてもいいですから」

「そうそうハルナの言う通り、なんならこの近くにあるラーメン屋とかどうです？」

「ラーメン屋……うーん……」

折角入ったばかりの金をそんなに使わされてたまるかと抵抗を見せた城之内だが、ハルナ＆朝倉の言葉を受けて少し悩む

チラリと横目で鳴滝姉妹の方を見てみると

（（ワクワク、ワクワク……）（）

「うっ……」

父親にプレゼントを買ってもらった直前の子供のような目で城之内を見ていた

さらには、隣に立つ桜子まで

「……分かったよ！奢ればいいんだろ奢れば！」

「「「「「いえーい！城之内さん太っ腹ー！」」「」「」」」」

ついに折れ、同時に歓喜の声が店内に響き渡った

「おじさん、私チャーシュー麺！チャーシュー大盛りでー！」

「僕もー！」

「私もそれにするですー！」

「ちよつと待て！チャーシュー大盛りなんかにしたら高くつくじゃねえか！」

「すいませーん、チャーシュー麺もう一杯ください」

「二杯目か！？二杯目まで食う気かお前！？」

「アスナ食べるの速いなー、ほならウチは普通に醤油ラーメンにとくわ」

「あ、ならウチもそれ」

「じゃ、じゃあ私も木乃香さんや亜子さんと同じのを……」

「にんにくラーメン、チャーシュー抜きで」

「私味噌ラーメン、朝倉は？」

「うーんと……じゃあ普通のやつにトッピングでコーンバター」

「（トッピング！？その手があったか！）（」

「双子に桜子！何だその眼！？お前らもうチャーシュー大盛りにしてるだろ！」

「おじさーん！チャーシュー大盛りに加えてトッピングで、わかめとキムチとコーンお願いしまーす！」

「僕は煮卵二個にのりとキクラゲ追加ー！」

「私もですー！」

「……だあああああつ！こうなったら俺も食いまくってやる！オヤジ！チャーシュー麺チャーシュー大盛りにトッピングでネギとメンマとのりと煮卵三個、あと餃子二人前くれ！」

「あいよ！毎度あり！」

かくして麻帆良学園の都市内にある一軒のラーメン屋で、総勢十一人の団体さんによるどんちゃん騒ぎな昼食会が行われたのであった

（あれ？何か忘れてるような気が……ま、いっか！）

〈管理人室〉

「城之内の野郎……」

第3話 筒抜けの情報戦？（後書き）

城之内

「よう読者のみんな！城之内克也だ！」

朝倉

「朝倉和美だよ。前回出た????って実は私だったんだ、みんなは分かったかな？」

夕映

「綾瀬夕映です。勘の良い人なら桜子さんの時点で法則に気付いて確信しています」

城之内

「今回は俺の新デッキが登場！見事勝利をおさめてやったぜ！」

夕映

「といってもあんまり内容変わってませんけどね、前回も言ったように数枚カードを入れ替えただけです」

朝倉

「でも新しくシンクロ要素とか取り入れたから、戦略の幅は大きく広がりましたよね」

城之内

「そういうことだ！これから俺の新デッキをよろしくな！」

夕映

「ではコーナーの進行、まずはデッキ紹介です」

朝倉

「今回紹介するのは私の、【天変地異コントロール】」

城之内

「天変地異を使ってデッキの一番上が何かを分かるようにして、それを利用した多彩なコンボ用カードを駆使して戦うデッキだな」

夕映

「ターンが進めば必然的に、相手の手札を全部把握出来るのもポイントです」

朝倉

「だからマインドクラッシュとかハンデス系も投入してるよ」

夕映

「おかげで私のエクゾディアとは相性最悪、進行状況バレル上にザクザク捨てられるです……」

城之内

「モンスターは結構種族がバラけてんな」

朝倉

「入ってるモンスターは基本、大王目玉みたいなピーピング（覗き）系か『ディバイナーのサーチ用に入れたティーヴァ&グリズリーマザー、それらに対応する下級水属性』なんで。あとはバルバロスやゾンビキャリアみたいな、汎用性の高いカードを数枚。投入出来るモンスターの選択の幅が広がっているのも、このデッキの特徴かな」

城之内

「それじゃあ次は、制作裏話だ」

夕映

「今回は、二人がやった決闘^{デュエル}についての作者の愚痴みたいなものです」

城之内＆朝倉

「……愚痴？」

夕映

「普通の決闘^{デュエル}を書く場合、ターンの初めのドローカードは未公開情報です。よって自由にドローするカードを選ぶ、一ターン一ターン楽に書くことが出来ます」

朝倉

「いわゆるデステニードローとやってやつだね」

夕映

「しかし今回の場合朝倉さんが使った天変地異によって1ターン先のドローカードが明らかになり、『ドロー運で逆転を掴み取る』といった具合の描写が不可能になったわけです」

朝倉

「それで後半は殆ど、城之内さんの伏せカードを巡っての私の推理描写が大半を占めちゃったと」

夕映

「あと二人のアド差が開き過ぎたため、『徴兵令 バルバ奪取 巨大化 攻撃』までの間に妨害が出来ないよう朝倉さんのドローカードを設定したり。とにかく今までで一番制作に手間が掛かった決闘^{デュエル}」

と言えるわけです」

城之内

「また朝倉の決闘話書く時大変だろうな……」

デュエル

夕映

「その予定は暫く無いそうです、今後絶対出さないというわけではないかと思いますが」

朝倉

「アハハ、でも仕方ないかな」

城之内

「じゃあ次は次回予告だ！」

夕映

「今回は、今回の最後にあった昼食の少し後、つまり午後のお話になるです」

朝倉

「城之内さんに麻帆良を案内しようと考えた鳴滝姉妹」

夕映

「あちこち回った末、超さん達のいるロボット工学研究会に辿り着くです」

城之内

「そこで俺達が目にした物とは……って話だ。決闘もそこでやるぜ！」

デュエル

夕映

「では最後に、今回の最強カードを紹介するです」

城之内

「今回はなんと言つても、俺を逆転勝利に導いてくれた《徴兵れ…

…」

朝倉

「私の《天変地異》！」

天変地異

永続魔法

このカードがフィールド上に存在する限り、お互いのプレイヤーはデッキを裏返しにしてデュエルを進行する。

朝倉

「最初のデッキ紹介でも触れたけど、デスクトップデュエルに関する効果を持つカードとは相性抜群！普段とは一味違った決闘が楽しめるよ！」

城之内

「いやいやいや！何で負けたお前のカードが紹介されんだよ！しかも前回はこのパターンだし！」

朝倉

「でも桜子のリボルバー・ドラゴン以上に大暴れしましたけど？」

夕映

「しかもあなたの徴兵令が今回成功したのはこれのお陰です」

城之内

「うつ……」

???

「はっはっは、何やら賑やかでござるな」

城之内

「うおっ！背高え！」

夕映

「女性に対しての第一声がそれですか、失礼極まりないですね」

城之内

「いや、だってお前と並べたらまるで親k……」

ガンッ！

城之内

「痛っ！？何辞書で頭殴っ……ていつかそれ何処から持ってきた！？」

夕映

「黙るです！」

???

「では、次回もお楽しみにでござる」

第4話 超の新発明テスト？（前書き）

どうも一カ月ぶりです、遊戯王JEM第4話をお送りいたします。今回は四本立て、デュエル話が尺的に二話分も使ってしまった。ただ土日はテスト勉強等の兼ね合いで忙しく、月曜とかにまで延期になるかもです、そうなった場合どうかご了承ください。

長々とすいません、ではどうぞ！

第4話 超の新発明テスト？

「はい、ここが僕達の通う麻帆良学園女子中等部の校舎だよ」

「うわ、でっけえ……」

「私達の学年で24クラスの737人、全学年合わせて2000人以上のマンモス校ですー」

朝倉との激戦、ラーメン屋での昼食会が終わって現在午後

食べ終わった後でようやくバクラのことを思い出し、城之内慌てて帰宅

案の定怒り心頭のバクラが待ち構えており、詫びに詫びて急ピッチで昼食を作る

食べ終わると少し収まったか、それ以上怒ることなく『寝る』と言ってベッドの中へ

それから数十分ほどして、鳴滝姉妹が管理人室へと遊びに

もとい、『学園内を案内したいから』という理由で誘いに来た

実際城之内もまだ麻帆良に関する知識は皆無なため、なかなか嬉しい申し出

この双子の性格からして何か裏が有りそうとも思ったが、ここは素直に受けることにした

そして現在、彼女らの通う麻帆良女子中等部を中心に廻っている最中である

「しかもそれだけじゃないんだなー、男女別学だから当然男子中等部もあるし、他にも幼稚園から大学まで教育機関は一通り揃ってる」

「全生徒と職員を合わせれば、普通に万の単位までいくですー」

「凄……確かに学園都市の名は伊達じゃねえみたいだな」

ちなみに、この小説の作者カゲシンの住む某市の人口は約三万五千人

麻帆良学園内の総人口は正確には不明だが、もしかしたら負けるかもしれない

それくらい、ここ麻帆良は果てしなく膨大

じゃあ次は部活動を見て回ろう、と続いて一同はグラウンドの方へ

「グラウンドも広いな……」

「今は陸上部が練習中、ってことは……あ、いたです！」

「美空ー！」

「お、風香に史伽じゃん」

着いてみると、白体操服とハーフパンツ着用で練習中の陸上部員が数名

その内の一人、3 - A生徒が一人の春日美空を風香が大声で呼ぶ
丁度50mを一本走り終わった時だったのでタイミングが良く、
美空は三人の方へと駆け寄った

「えっと、そっちの人は……あ、もしかして噂になってた新しい副
管理人さん？」

「そういうこと」

「さんぽ部の私達で、学園内を案内して廻ってるんですー」

「城之内克也だ、よろしくな。にしても陸上か、懐かしいな」

簡単に挨拶すると、城之内は視線を美空から外してグラウンドへ
どうしたんスカ？と美空が訊くので、城之内は自身の中学時代の

ことを話し出す

「いや、中学の時に少しかじっててよ……本田ってダチと一緒に駅伝の地区大会にも出て、優勝したこともあるんだ」

「優勝！？じゃあ城之内さん足速いんだー！」

「おいおいそんな大したもんじゃねえって……」

「凄いですー！」

「そうか？……へへっ、まあな！」

あまり高校の知人にも話してなかったことだったので、このように称賛されるのは彼にとってかなり久しぶりのこと

少し得意になったか思わずニツと笑うと

「じゃあさじゃあさ！今から美空と勝負してみてよ！100m一本勝負！」

「私も見てみたいですー！みそらー、駄目ですか？」

「私は別に構わないけど……」

「よおしっ！望むところだ！かかってこい！」

本職である美空との勝負を快く引き受け……

「ま、負けた……」

「いやいや、ブランク有りには充分凄いつすから……ていうか私も危うく負けそうだったし」

ギリギリで敗れた

そのまま三人は、グラウンドを跡に

途中、さっきの走りを見ていた何処ぞの男性教員に『陸上部に入らないか』と誘われもしたがとにかく跡に

運動部以外では何があるんだと城之内に訊かれ、鳴滝姉妹はある場所へと連れて行った

「じゃーん！到着ー！」

「ここは図書館島って言って、夕映っち達図書館探検部が……」

「あ、悪い、ここも昨日ネギと行ったわ」

「……………」

じゃあこっち、と腕を引かれ、またも別の場所へ

「ん？何だか周りの奴らの平均年齢が結構上がったような……」

「まあね、ここって大学部のエリアだから」

気付けば一同は、麻帆良大エリアにまで足を運んでいた

もちろん学園内に詳しいさんぽ部の彼女達が、無計画に城之内をここまで連れてきたわけがない

ちゃんとした理由があり、自身らのクラスメイトがいるであろうその場所へと向かって歩いていて

ちなみに『さんぽ部の彼女達』とは現在、鳴滝姉妹の二人だけに

あらず

「なあ、こつち行ったら何があるんだ？」

「ふふふ、着いてからのお楽しみー」

「ですー、楓姉も言っちゃダメですよ？」

「あいあい、着くまでしつかり黙っておくでござるよ」

移動途中で偶然会い、合流した長瀬楓含めて三人である

その際に城之内と彼女の間でそれぞれ自己紹介

楓は副管理人の噂すら耳にしてなかったのですこそ驚いていた
というのも、城之内がやって来た昨日から今日の昼までに掛けて
『山で籠って修行していたので全然そっちの事情は知らなかったで
ござる』

とのこと、何の修行かと城之内が訊いたが『秘密でござるよ、ニ
ンニン』と楓は誤魔化す

まあ『ござる』やら『ニンニン』と言ってるくらいであるし、ち
ゃんと誤魔化せたのかと言われるとかなり怪しいのだが

楓は史伽に口止めされ、いつも通りの糸目を保ったまま素直に了承した

そんなこんなで数分ほど歩くと、目的地に一同は到着

「じゃーん！ロボット工学研究会だよー！」

「……ロボット？」

見れば建物の入り口近くには、確かに『ロボット工学研究会』の文字が

「はい、私達のクラスメイトがちょっと前から凄い物を開発してるんですー！」

「へえ、そりゃ面白そうだな」

「というわけで早速、中に入って見せてもらおう！」

「ですー！」

「いらっら、走ったら危ないでござるよ」

言動から察するに、アポ等も一切無しの模様

しかしそんなことはお構い無し、鳴滝姉妹は中へと駆け入る

それを笑いながら楓が追い、城之内が続いた

（でもこいつらのクラスメイトってことは、歳は14か15ってことだろ？凄えなおい）

中に入るとロボット工学研究会に所属するクラスメイトがちょう

ど二人ともおり、嫌がる素振り一つ見せず四人を通す

超鈴音と葉加瀬聡美

学年一位&二位の成績を誇る超天才タッグ

ついさっきまで作業中だったのか、上に白衣を羽織ったままでの登場

超は中華系の髪型と丸ほっぺ

葉加瀬は額を広く見せた髪型と丸眼鏡が印象的で、城之内もすぐ覚えられた

『折角だから見ていくといいネ』と、超が皆を先導して研究室まで

鳴滝姉妹は、誰が見ても『ワクワク』状態であることは明らか

楓も表に出さぬものの密かにその開発品には期待してるようで、城之内の表情はその三人の中間といったところか

ちょっとばかり歩くと目の前に機械仕掛けの扉が立ちはだかり、超が片手でパスワードを打ち込んですぐに開ける

「実はもう殆ど完成しててネ。後は確認のためにテストを何度かやってお終い、というところまで来てるヨ」

「へー、超りん凄い！」

「早く見せてですー！」

「慌てない慌てない……ほら、これネ」

急かす鳴滝姉妹を宥め、超はテーブルの上に置かれた二台の機械を一同の目の前に

への字状の板、その内側部分からくつつく様な形の円状の何か円状のそれには、何かを入れるためにあるのか四角い空間が二つよく見れば下には、腕を通して固定するための器具まで

「ん？何これ？」

「こんなの見たことないですー」

（お、おい、これって……）

（おや、やはりバクラさんと同じというのは本当だった力）

興味新進にその機械を眺める鳴滝姉妹

一方で城之内は、既視感すつ飛ばしてあまりにも見慣れているそれに驚愕の色を見せていた

「およ？板の上には何か乗せるのでござるか？四角い枠が五つ……」

「あ、側面にも穴みたいのがある！こっちも五つだ！」

「あれ？ちよつと待つですお姉ちゃん、楓姉。何かをセットするの

が五つ×2つてことは……」

「お、鋭いネ史伽サン。そういうことヨ、これは屋外等でも決闘をデュエル楽しく且つ円滑に進められるよう開発した新商品……」

そう、言うまでもなくそれは

デュエルディスク
「決闘盤ネ」

「うわーすげー！本当に立体映像でモンスターが出てきたー！」

「もけもけ可愛いですー！」

「ではでは、お次は拙者のモンスターをば……」

軽く決闘盤の解説をした後、使わせて使わせてと鳴滝姉妹大騒ぎ

一応葉加瀬が監督につきながら、自身らのデッキのモンスターを次々とセツトして実体化させていた

その傍ら、城之内と超は部屋の隅で会話

「成程な……バクラの言ってた『金の入るあて』ってのは決闘盤のことだったわけか」

「そういうことヨ。テストを完全に済ませて今週には学園都市内で販売、バクラさんには協力費として利益のいくらかを渡す手筈となってるネ」

実は城之内同様、バクラも自分のデッキ&決闘盤を所持した状態でこの世界へ

そして決闘盤のことを超が独自のルート（これについては城之内に話さず秘密）で知ったらしく、製品化したいという理由で協力を要請

別段バクラに断る理由はなく、金を貰えるとなれば尚更ですぐに了承した

「折角だし城之内サン、テストに付き合ってもらっても良いかな？」

「別にいいぜ、何すりゃいいんだ？」

「今鳴滝さん達がやてるように、ちゃんとカードが実体化するか、というのが一つ。後は何試合か決闘デュエルをやて、一連の流れを不具合なく進められるかを確かめればOKネ」

「お前ら二人は決闘デュエル出来ないのか？」

「出来るは出来るガ、やはり他の人がやてるのも見ておきたいヨ」

「よし分かった……おーいお前ら！今から決闘盤のテストってこと
デュエルで決闘してくれたとよー！」

超との会話を一先ず終わらせた城之内は三人のところへ行き

「「「じゃんけんぽん！」「」「」

直後、誰が城之内と決闘するかでじゃんけんが始まった
デュエル

勝負はあいこ無く一回で決まり

「ではでは、始めるでござるかな」

「おう！」

双子が二人仲良く出したグーをパーで破った、長瀬楓が城之内の
正面に立った

場所は移動し、ロボット工学研究会がある建物の屋上

風香&史伽は楓から後ろにやや離れた位置でつき、超と葉加瀬は

審判的な立ち位置で城之内らの中間に立つ

「では始めるネ、公式ルールに従いLPは互いに8000」

「先攻は先ほど決めました通り、城之内さんからお願いします」

「楓姉頑張れー！」

「ですー！」

決闘盤のスイッチが入り、コンパクトに畳まれていた部分が変形

ライフカウンターには『8000』の表記

「^{デュエル}決闘ー！！」

第4話 超の新發明テスト？

「俺の先攻、ドロー！」

バクラも城之内同様、この世界に持ち込んでいた決闘盤^{デュエルディスク}

それを基に、超がバクラの協力を得て量産に成功した

約一日ぶりに決闘盤を装着して決闘する城之内^{デュエル}

相手は3-A生徒の一人、長瀬楓

今、二人の決闘が幕を開けたのだ^{デュエル}

「手札から切り込み隊長を攻撃表示で召喚だ！」

切り込み隊長

攻撃力1200 / 守備力400

（ふむ、ということは戦士族デッキでござるかな？）

「さらにこいつの能力で、手札から共闘するランドスターの剣士を
守備表示で特殊召喚！」

共闘するランドスターの剣士

攻撃力500 / 守備力1200

のモンスター効果による攻撃力アップ

切り込み隊長

攻撃力1200 1600

共闘するランドスターの剣士

攻撃力500 900

「そしてレベル3の切り込み隊長に、レベル3の共闘するランドスターの剣士をチューニング！」

「ほう、いきなりでござるか」

城之内の言葉と共に、ソリッドビジョンで映し出されるモンスター達の姿が変化を見せる

切り込み隊長は三つの星、共闘するランドスターの剣士はそれらを囲む三つの輪に姿を変えた

「シンクロ召喚！大地の騎士ガイアナイト！」

大地の騎士ガイアナイト

攻撃力2600 / 守備力800

そしてそれらはさらに姿を変え、ガイアナイトとしてフィールドに颯爽と君臨する

「すっげー！」

「カッコいいですー！」

（ふむ、シンクロ召喚の演出についてはこれで問題なさそうネ）

「俺はこれでターンエンドだ！」

城之内 LP 8000 手札 4 伏せ 0

「拙者のターン、ドロー。……」

数秒思考したのち、楓はカードをセット

「モンスターを裏守備で一体、さらにリバーズカードを一枚セットして終了でござる」

楓 LP 8000 手札 4 伏せ 1

「俺のターン、ドロー！リトル・ウイングカードを召喚する！」

リトル・ウイングカード

攻撃力1400 / 守備力1800

「（ビックシールドガードナーやディフェンドガイみたいな壁なんて、そうそう出ないに決まってる！）ガイアナイト！楓の守備モンスターを攻撃だ！」

「させぬでござるよ、伏せていた月の書を発動でござる」

「なっ！？ガイアナイトが！」

楓が決闘盤のスイッチを押し、伏せられていたリバーズカードが

表に

と同時に、ガイアナイトのソリッドビジョンが消滅

ただの一枚の裏側カードと化し、その場で動きを止められた

「場の表側表示モンスターを一体、裏守備に変更させるカードでござる」

「だがガイアナイト自体が倒されたわけじゃねえ、次のターンからまた攻撃してやる！」

（さて、ガイアナイトに次のターンが来るでござるかな？）

「まだ攻撃モンスターは残ってるんだ、リトル・ウイングガードで攻撃！」

リトル・ウイングガードは城之内の令を受け、剣を振り上げて突撃裏側になっていたカードが表に返り、白い忍び装束を着たモンスターが現れる

その剣は見事、相手モンスターを真っ二つに切り裂くことに成功した

「よっしゃ！敵モンスターを撃破」

「……モンスター効果発動でござる」

大地の騎士ガイアナイト 破壊！

「何い!？」

だがその破壊されたモンスターは、死に際に小型の手裏剣を投げ放つ

手裏剣は裏守備になっていたガイアナイトを捉え、裏側のまま粉々に破壊した

「城之内殿が破壊したモンスターはホワイト白い忍者」

ホワイト
白い忍者

攻撃力1500 / 守備力800

「リバーズ効果は『守備表示モンスターを一体破壊する』、よってガイアナイトを破壊させてもらったでござる」

「俺のガイアナイトが……これでターンエンドだ。エンドフェイズ、リトル・ウインガードを自身の効果で守備表示に変えるぜ」

城之内 LP8000 手札4 伏せ0

「拙者のターン、ドロー。忍者マスターSASUKEを攻撃表示で召喚でござるな」

忍者マスターSASUKE

攻撃力1800 / 守備力1000

「バトルフェイズ、そのまま攻撃でござる」

忍者マスター SASUKE 攻撃力1800

VS

リトル・ウイングガード 守備力1800

(同じ数値同士のモンスターで戦闘だと?)

リトル・ウイングガード 破壊!

「ま、また破壊された!?!」

SASUKEはリトル・ウイングガードの首の後ろにクナイを刺し込み、またも城之内のモンスターは倒される

「SASUKEは表守備モンスターと戦闘をした場合、ダメージ計算を無視してそのまま相手モンスターを破壊する効果を持っているのでござる」

「ぐっ、そんな効果が……」

「力だけが全てではござらぬ、ニンニン」

楓は少し余裕の笑みを城之内に見せると、バトルフェイズを終了させメインフェイズ2に移行

伏せカードを一枚セットしてこのターンを終えた

楓 LP8000 手札3 伏せ1

「俺のターン、ドロー！ならこいつだ、パンサーウォリアーを召喚する！」

漆黒の豹戦士パンサーウォリアー

攻撃力2000 / 守備力1600

これなら攻撃力はこっちの方が強いぜとニヤリ笑う城之内

しかし攻撃のための生贄要員が場に存在しないため、伏せカード一枚でこのターンを終える

城之内 LP8000 手札3 伏せ1

「拙者のターン、ドロー。忍者義賊ゴエゴエを召喚でござる」

忍者義賊ゴエゴエ

攻撃力1500 / 守備力1000

（あれ？なんかこいつ、遊戯の家でやったTVゲームのキャラに似……）

「さらに装備魔法、風魔手裏剣をゴエゴエに装備。忍者と名の付くモンスター1体の攻撃力を、700ポイント上昇させるでござる」

「何！？」

ゴエゴエは右手に持っていた巨大煙管を左手に持ち替える

直後その空いた右腕に、『魔』という文字が中央に書かれた巨大手裏剣が装備された

忍者義賊ゴエゴエ

攻撃力1500 2200

「ゴエゴエでパンサーウォリアーに攻撃でござる！」

そしてそれを、楓の言葉と同時に投げ放つ

「させるか！伏せていたマジックアーム・シールドを発動！」

だがその対象であるパンサーウォリアーの手に、突如盾が出現

そこからマジックハンドが飛び出し、SASUKEを掴もうと伸びていく

「相手モンスターの攻撃宣言時に発動し、他の相手モンスターのコントロールを奪って強制的に戦闘させるぜ！」

「しまった、拙者のSASUKEが！」

マジックハンドはSASUKEを捕まえ、パンサーウォリアーの目の前に強制連行

両者の戦闘は余儀なくされ、そのまま実行に移された

忍者義賊ゴエゴエ 攻撃力2200

VS

忍者マスターSASUKE 攻撃力1800

忍者マスター SASUKE 破壊！

「よし！パンサーウォリアーは無傷！」

「しかし戦闘時、SASUKEのコントロールは城之内殿に移っている……よって戦闘ダメージはそちらが受けるでござるな」

城之内 LP8000 7600

「これくらいなんともねえぜ！」

「……拙者はターン終了でござる」

楓 LP8000 手札1 伏せ1

「俺のターン、ドロー！ロケット戦士を召喚！」

ロケット戦士

攻撃力1500 / 守備力1300

「む、そのモンスターは確か……」

「ロケット戦士でゴエゴエを攻撃！無敵モードに変形！」

ロケット戦士は城之内の言葉通り変形

見た目が完全にロケットそのものと化し、ゴエゴエに突撃する

ロケット戦士（無敵モード） 攻撃力1500

V S

忍者義賊ゴエゴエ 攻撃力2200

「ロケット戦士の効果で自身の戦闘破壊、及び戦闘ダメージは発生しない！さらに、攻撃した相手モンスターの攻撃力を、ターン終了時まで500下げる！」

忍者義賊ゴエゴエ

攻撃力2200 1700

「むむっ……」

「ロケット戦士を生贄にして、パンサーウォリアーで攻撃！」

漆黒の豹戦士パンサーウォリアー 攻撃力2000

V S

忍者義賊ゴエゴエ 攻撃力1700

忍者義賊ゴエゴエ 破壊！

「ゴエゴエを撃破！」

楓 LP8000 7700

「やるでござるな、しかしゴエゴエに装備されていた風魔手裏剣の効果を発動！」

「何!？」

「このカードが墓地に送られた時、相手ライフに700ポイントのダメージでござる!」

城之内 LP 7600 6900

「ぐっ……」

「さて、どうするでござるか?」

「……リバースカードを一枚セット、ターンエンドだ!」

城之内 LP 6900 手札2 伏せ1

「拙者のターン、ドロー。……」

楓はドローしたカードと、自身の場の伏せカードを交互に見て、長考に入る

といってもその思考時間は三十秒とかからず、手札からモンスターを攻撃表示で召喚した

「悪シノビを召喚でござる」

悪シノビ

攻撃力400 / 守備力800

(な、何だ!? 攻撃力400のモンスターを攻撃表示!?)

「そして伏せカードを一枚、これでターンを終了するでござる」

楓 LP7700 手札1 伏せ2

「その瞬間伏せカード発動！スケープ・ゴートだ！」

（リリース要員を確保されたでござるか……）

城之内は自分のターンに移る直前、伏せていたスケープ・ゴートを発動

パンサーウォリアーの両脇に二体つつ羊トークンが出現し、場を埋める

羊トークン×4

攻撃力0 / 守備力0

そのまま城之内のターンに入ると、メインフェイズには何もせずそのままバトルフェイズへ

「羊トークンを生贄に、パンサーウォリアーで悪シノビを攻撃だ！」

羊トークン一体がパンサーウォリアーの剣に吸収され、パンサーウォリアーは突撃する

「では悪シノビの効果を発動。攻撃表示のこのカードが攻撃対象に選択された時、デッキからカードを一枚ドロースるでござる」

楓 手札1 2

「（なるほど、やけに弱いモンスターだと思ったらそんな効果が…）だが、パンサーウォリアーの攻撃は止まらねえ！」

漆黒の豹戦士パンサーウォリアー 攻撃力2000

VS

悪シノビ 攻撃力400

「いやいや、止まるのでござるよ。罨カード、血の代償を発動」

「血の代償!？」

「500のライフコストを払い、自分メインフェイズもしくは相手バトルフェイズ中に通常召喚の権利を発生させるでござる。よって拙者は手札から、モンスターを裏守備でセット」

楓 LP7700 7200 手札1

「拙者の場のモンスターの数が変わったことで戦闘の巻き戻しが発生、改めて攻撃対象を選び直していただくでござるよ」

「え？」

（そう、これが悪シノビの効果の面白いところヨ。『攻撃対象に選ばれる』だけでカードが引ける、つまり選ばれた後は罨で迎撃しようとかカードの発動コストにしようと問題なしネ）

「ってことは、また羊トークンを生贄にすんのか!？」

「それは心配要らぬ、あくまで『攻撃対象の選択』をやり直すだけでござるからな、攻撃宣言は既に終了したものととして扱われるでござる」

「だったらもう一回、パンサーウォリアーで悪シノビを攻撃だ！」

「悪シノビの効果で一枚ドロでござるな」

楓 手札 1 2

漆黒の豹戦士パンサーウォリアー 攻撃力 2000

VS

悪シノビ 攻撃力 400

「では再び血の代償の効果を発動。500払ってモンスターを一体、手札からさらにセットするでござる」

「なあああっ!?!」

楓 LP 7200 6700 手札 1

「これでまた巻き戻しが発生。さあさあ、攻撃対象を選び直してください」

「ぐぐぐぐ……もう一回パンサーウォリアーで悪シノビを攻撃！」

「悪シノビの効果で1ドロ」

楓 手札 1 2

漆黒の豹戦士パンサーウォリアー 攻撃力2000

VS

悪シノビ 攻撃力400

「では伏せていたもう一枚のカード、くず鉄のかかしを発動でござる」

突如パンサーウォリアーの目の前にかかしが出現、攻撃を代わりに受け止める

「しまった！そのカードか！」

「相手モンスターの攻撃を無効にする効果でござる、そして発動後再び効果で場にセット」

「結局倒せなかったぜ……くそつ、俺は不意打ち又佐を召喚してターンエンドだ」

不意打ち又佐

攻撃力1300 / 守備力800

城之内 LP 6900 手札 2 伏せ 0

「拙者のターン、ドロー。何もせずこのままターン終了でござる」

楓 LP6700 手札3 伏せ1（くず鉄）

（くず鉄のかかしは一枚、対するこっちは不意打ち又佐の能力も合わせて三回攻撃、今度こそ破壊出来る！）

城之内はバツとカードをドローし、そのままバトルフェイズ

「羊トークンを生贄に、パンサーウォリアーで悪シノビを攻撃だ！」

「ではくず鉄のかかしで防ぐでござる、それと悪シノビの効果で1ドロー」

楓 手札3 4

かかしはまたも現れ、パンサーウォリアーの攻撃を食い止める

「だがもうこれで俺の攻撃は止め切れねえ！不意打ち又佐で攻撃！」

血の代償でモンスターを増やし続けて巻き戻しを起こそうが、最終的に攻撃権は不意打ち又佐に残ったまま

これで今度こそ破壊と踏んだ城之内だったが

「では悪シノビの効果で一枚ドローし、血の代償の効果を発動」

楓 LP6700 6200 手札4 5

（へっ！何と呼んだってもう一回悪シノビを攻撃して……）

「悪シノビをリリースし、モンスターを裏守備でセットでござる」

楓 手札 5 4

あと一歩、考えが足りていなかった

「……何だとおおおおおお！？」

（あーあ……完全に弄ばれてるネ）

「戦闘ダメージは勘弁でござるからな。では、また巻き戻しが起こったので戦闘対象を選び直してください」

楓の場に並ぶ、裏守備でセットされた三体のモンスター

どれを攻撃するか、カツカする頭を必死に冷やしながら城之内は考える

（今楓がセットしたモンスターは、5〜6つ星の上级モンスター……パンサーウォリアーの2000ならまだしも、不意打ち又佐の1300じゃ倒せる可能性はかなり低い……なら！）

城之内が指差したのは、一番左側にあるセットモンスター

前のターンに楓が出した、下級モンスターへの攻撃を選択した

「そいつに攻撃だ！いけ！不意打ち又佐！」

「あいあい、伏せモンスターは青い忍者でござる」

フルー
青い忍者

攻撃力300 / 守備力300

不意打ち又佐 攻撃力1300

VS

青い忍者 守備力300

青い忍者 破壊！

「楽勝！」

「青^{ブルー}い忍者のリバー^{リバー}ス効果は『フィールド上の魔法カードを1枚破壊する』でござるが……」

「魔法カードは場に一枚も無い！不発だぜ！」

続いて城之内は、不意打ち又佐の能力で二回目の攻撃

もう一体の下級モンスター、忍犬ワンダードッグを倒すことにも成功した

忍犬ワンダードッグ

攻撃力1800 / 守備力1000

「ふむ、一気に減らされたでござるな……」

「どんなもんだ！俺はカードを一枚伏せて終了だぜ！」

城之内 LP6900 手札2 伏せ1

「拙者のターン、ドロー」

楓の場に残っているモンスターは僅か一体

だが手札は悪シノビの効果のおかげもあり五枚にまで増えている

（あれだけの手札だ……きつとこのターン、何か仕掛けてくる！）

城之内の予想は、半分当たり

「ではまず、拙者は場の裏守備モンスターを反転召喚でござる」

楓は伏せられたカードを手に取り、表側にして置き直す

するとソリッドビジョンもそれに連動

「出でよ！^{シルバー}渋い忍者！」

全身銀色の甲冑に身を包んだ、今までのとは『格』の違いを感じさせる忍者モンスターがその場に出現した

^{シルバー}
渋い忍者

攻撃力2300 / 守備力2200

「攻撃力、2300……」

「それだけではござらぬぞ、城之内殿」

続いて楓は墓地ゾーンに手を伸ばし、その中にあるカードを四枚

取り出す

「^{シルバー}渋い忍者のモンスター効果を発動。リバーす時、墓地もしくは手札から「忍者」と名のつくモンスターを任意の数だけ、場に裏守備で特殊召喚出来るのでござる。拙者は墓地からモンスターを四体特殊召喚！」

そしてたちどころに、楓の場は新たに出現した四体のモンスターで完全に埋められた

仕掛けたのは手札からではなく、場と墓地から

手札消費0のまま、場を自身に有利な状況へと変えた

「出た！楓姉の忍者大量召喚コンボだ！」

「ですー！」

「一気に四体のモンスターを特殊召喚だと！？」

「一応言っておくと、城之内殿から見て左から忍者義賊ゴエゴエ、^{ホワイト}白い忍者、忍者マスターSASUKE、^{ブルー}青い忍者でござる。さらに手札から魔法カードを発動、太陽の書」

次に発動した楓の魔法カード

そこからまばゆい光が発せられ、それは楓の裏守備モンスターの内の一体に対して放射される

「このカードにより場の裏側表示モンスターを一体、攻撃表示に変

更させるでござる。選ぶのは拙者の^{ホワイト}白い忍者」

「げっ！確かそいつのモンスター効果は……」

「その通り、リバーズ効果が発動し、守備表示の羊トークンを破壊するでござる」

出現と同時に手裏剣が投げられ、羊トークンを破壊した

「ではバトルフェイズ。^{シルバー}渋い忍者でパンサーウォリアーを、^{ホワイト}白い忍者で不意打ち又佐を攻撃でござる」

^{シルバー}渋い忍者 攻撃力2300

VS

漆黒の豹戦士パンサーウォリアー 攻撃力2000

^{ホワイト}白い忍者 攻撃力1500

VS

不意打ち又佐 攻撃力1300

漆黒の豹戦士パンサーウォリアー 破壊！
不意打ち又佐 破壊！

「ぐっつ……」

城之内 LP 6900 6600 6400

「メインフェイズ2に伏せカードを一枚、これでターン終了でござる」

楓 LP 6200 手札3 伏せ2（内一枚はくず鉄）

「俺のターン、ドロー！……………よしっ、桜子！力を借りるぜ！」

「ん？」

「場に残った最後の羊トークンをコストに、モンスターゲートを発動！」

城之内の場に魔法陣が突如出現、羊トークンはそれに飲み込まれる

「モンスターゲート……………そういえば、桜子殿がよく活用しているカードでござるな」

「（ラーメン屋で飯食った後、『余ってるからお礼に一枚あげる！』ってことで譲ってもらってたんだよね……………）デッキの上から通常召喚可能なモンスターが出るまでめぐり、それ以外を墓地に送る！」

一枚目 クイズ

二枚目 人造人間サイコショッカー

「よって、サイコショッカーを特殊召喚！」

人造人間サイコショッカー

攻撃力2400 / 守備力1500

「畏封じのモンスターでござるか、しかも攻撃力は2400……」

「これでかかしも血の代償も怖くねえ！^{シルバー} 渋い忍者を攻撃だ！」

人造人間サイコショッカー 攻撃力2400

VS

^{シルバー} 渋い忍者 攻撃力2300

^{シルバー} 渋い忍者 破壊！

楓 LP6200 6100

（先程新たに伏せたカードも畏カード……これは少々困ったことになってきたでござるな）

「これで俺はターンエンドだ！」

城之内 LP6400 手札2 伏せ1

（さて、楓サンのデッキには除去系の魔法カードはあまり入ってなかたナ……どうするネ？）

「楓姉頑張れー！」

「負けるなですー！」

「拙者のターン、ドロー（ぐっ、やはり二枚目はそう簡単に引けぬでござるか……）」

ドローカードを見て表情を苦める楓、引いたのはこの現状では無意味の罠カード

楓の場にいる忍者マスター SASUKE

これに装備魔法、風魔手裏剣を装備すれば攻撃力は700上がって2500となりサイコソッカードを倒せる

だが今の楓の手札には、それが無い

（城之内殿もそのことは分かっている筈、となれば次のターン真っ先に狙われるのは SASUKE……）

何とかして SASUKE を守りたい

しかし、手札には防御系のカードが無い

（城之内殿はさっきのターンに通常召喚を行わなかった、つまり手札に下級モンスターは0………リスクは高いが、やってみるでござるか）

（おや、何をする気力？）

楓は意を決し、場に伏せられた一枚のカードを表に

「拙者は裏守備の青い忍者を、反転召喚でござる！」
フルー

「攻撃力300を攻撃表示に変更だと!？」

「効果で場の魔法カードを一枚破壊、対象は城之内殿の伏せカード!」

青い(ブルー)忍者は持っていたさすまたを構え、城之内のフィールドへ猛進

伏せカードへ攻撃するが、破壊されず場に留まる

「ふむ、罠カードでござったか………あ、普通の場合は本当かどうか確認するゆえ、何のカードか教えてほしいでござる」

「……伏せてあるのは墓荒らしだ」

「あいあい、では白い忍者^{ホワイト}を守備表示に変更してターン終了でござる」

楓 LP6100 手札4 伏せ2(内一枚はくず鉄)

続いて城之内のターン、ドローしそのままバトルフェイズ

ここで城之内の中には、二つの選択肢があつた

(さて、どうすっかな……風魔手裏剣^{ブルー}の装備を考えてSASUKEか、ダメージ重視で青い忍者か……)

(ああ成程、攻撃力の低い青い忍者^{ブルー}を囷にSASUKEを守る作戦力)

「…………サイコショッカーで青^{ブルー}い忍者を攻撃だ！」

結局城之内は、後者を選択

前のターンの行動から、現在手札に風魔手裏剣が無いのは明白

残り一枚か二枚を次のターンで引き当てるのは難しいだろうという判断

人造人間サイコショッカー 攻撃力2400

VS

青^{ブルー}い忍者 攻撃力300

青^{ブルー}い忍者 破壊！

「くっ、結構効いたでござるな……」

楓 LP6100 4000

「よし！俺はモンスターを裏守備でセットして終了だ！」

城之内 LP6400 手札2

「拙者のターン、ドロ………おや」

「ま、まさか引いたのか！？」

「いやいや、風魔手裏剣ではござらぬよ」

「なんだ、驚かせやがって（っていうか、俺が風魔手裏剣のこと考えたのを分かったのか？）」

ダメージ重視で動いたのはどうやら正解か

そう城之内が安堵したのもつかの間

「……もつと当たりを引いたようでござる」

「え？」

楓が彼に笑みを見せ、墓地ゾーンからカードを取り出す

「拙者は、墓地の悪シノビと忍犬ワンダードッグをゲームから除外」

「お！ついに登場だ！」

「渋い^{シルバ}忍者と肩を並べる、楓姉のデッキの切り札ですー！」

「切り札だ！？」

すると突如、二人の周りに少々だが黒い霧が発生

薄暗い雰囲気を作り出すと楓はフッフッフと語り出し、

「城之内殿、もう分かっていると思うでござるが……拙者のデッキは忍者デッキ、まあ拙者自身は忍者ではござらんがな」

（そりゃ出てくるカード見りやすぐ分かったけど……ていうかお前

も忍者じゃないのか？)

「しかし、だからといってモンスターは忍者だけだと侮ってもらっては困る。忍は時として自然に生きる生物を自在に操るでござる、獣、昆虫、そして……鳥を」

手札のモンスターカードを一枚、攻撃表示で決闘盤に叩きつけた

「今こそその姿を見せるでござる！闇夜に潜む最強の妖鳥、ダーク・シムルグ！」

ダーク・シムルグ

攻撃力2700 / 守備力1000

「なあああっ！？7つ星モンスターをいきなり召喚だと！？」

そして、そのモンスターは姿を現した

全身を黒く染めた体色に、サイコショッカーを上から見下ろすほどの巨躯

正に迫力満点であり、城之内を驚愕させるには充分過ぎるものであった

「さて、それではいかせてもらうでござるかな。またまたこちらの反撃開始でござる」

第4話 超の新発明テスト？

現在の状態

楓

モンスター 4

裏守備モンスター（忍者義賊ゴエゴエ（守備力1000））

白い忍者（守備力800）

ダークシムルグ（攻撃力2700）

裏守備モンスター（忍者マスター SASUKE（守備力1000）

）

魔法・罠 3

伏せカード（くず鉄のかかし）

血の代償

伏せカード

LP 4000 手札 4

城之内

モンスター 2

人造人間サイコショッカー（攻撃力2400）

裏守備モンスター

魔法・罠 1

伏せカード（墓荒らし）

「このカードの召喚条件は、墓地の闇属性と風属性のモンスターを一体つつ除外すること。まあ召喚制限が無いので、普通に通常召喚しても問題無いのでござるがな」

圧倒的威圧感

楓のモンスター、ダーク・シムルグは明らかにそう感じさせるものがあつた

場にいるモンスターの中で一番の攻撃力というのも大きいが、他にも何かある

城之内はそう直感した

「伏せカードは墓荒らしと分かっているでござるし、怖くないでござるな。まずS A S U K Eとゴエゴエを反転召喚、そして白い忍^{ホワイ}者を攻撃表示に変更してバトルフェイズに入るでござる」

総勢四体のモンスターが、攻撃態勢

「まずはダーク・シムルグ、サイコショッカーを攻撃でござる!」

ダーク・シムルグ 攻撃力2700

V S

人造人間サイコショッカー 攻撃力2400

人造人間サイコショッカー 破壊！

「サ、サイコショッカー！」

城之内 LP 6400 6100

「（守備力2000クラスだとしてもSASUKEで倒せるでござるし、まずはこちらかな）続いて、ホワイト白い忍者で伏せモンスターを攻撃！」

ホワイト白い忍者 攻撃力1500

VS

裏守備モンスター 守備力？

「伏せていたのは、ワンショットブスターだ……」

ワンショットブスター

攻撃力0 / 守備力0

ワンショットブスター 破壊！

「残る2体で直接攻撃！」

忍者マスター SASUKE 攻撃力1800

義賊忍者ゴエゴエ 攻撃力1500

城之内 LP 6100 4300 2800

「ぐあああああっ！」

この決闘^{デュエル}において、初めて成立したダイレクトアタック

城之内のいた世界と同様、ソリッドビジョンの体感システムによつて大きく衝撃が走った

「うわっ！ビックリした！」

「どうしたですー一体！？」

「気にすることないヨ。これは仕様で、ダメージを受けるとプレイヤーへ衝撃を与える仕組みになるネ。けど身体に影響の無いレベルにしてあるヨ」

「要するに、戦いをリアル体験するための特別機能ですね」

驚く鳴滝姉妹に、問題無いと超と葉加瀬が説明

「拙者はこれでターン終了でござる。さて城之内殿、このモンスターを倒せるでござるかな？」

楓 LP 4000 手札 4 伏せ 2（内一枚くず鉄）

「俺のターン、ドロー！倒せるさ！俺は時の魔術師を攻撃表示で召喚！」

時の魔術師

攻撃力500 / 守備力400

「ほう、確かそのカードの効果は……」

「そう、どっちかの場のモンスターが全滅するギャンブルカード！
さっそく時の魔術師の効果発動！タイムルーレット！」

城之内が声をあげると同時に、時の魔術師は右手に持った杖を掲げる

そしてその先端にあるルーレットの針が回転

高速で回転していた針も、次第に速度が低下

「いけええええっ！」

針が止まった先は

「……よっしゃあああつ！大当たりだ！」

城之内の望み通り、『当』の箇所

「膨大なる時の流れは、あらゆるモンスターを破壊する！」

『タイムマジック！』

時の魔術師は杖を楓のモンスター達に突き出し、突如周りの風景が急変

伴って忍者三人は目に見えて急激に老い始め、ダーク・シムルグ

も徐々に痩せていつて羽が抜け落ちる

忍者義賊ゴエゴエ 破壊！

ホワイト
白い忍者 破壊！

ダーク・シムルグ 破壊！

忍者マスター SASUKE 破壊！

黒い霧は晴れ、最後には四体全てが破壊された

「くつ、拙者のダーク・シムルグ達が！」

「これで場はガラ空き！時の魔術師でダイレクトアタックだ！」

時の魔術師 攻撃力500

「もう忘れたでござるか？くず鉄のかかしを発動でござる」

「あつ、しまった！」

杖で殴りかかろうとした時の魔術師だったが、またもかかしが現れて攻撃を止める

「だったら俺は、カードを一枚セットして終了だ」

城之内 LP2800 手札1 伏せ2（内一枚は墓荒らし）

「拙者のターン、ドロー」

（前のターンの総攻撃でモンスターを新たに出さなかったってことは、おそらく手札にモンスターは無い筈。このターンを凌いで、次

のターンで一気に畳み掛ける！)

「……………城之内殿、先程拙者は言い忘れていたことがあったござる」

「え？」

「ダーク・シムルグの効果でござるよ」

楓は墓地からダーク・シムルグを取り出し、城之内に表面を見せる

「このカードは表側表示で場にいる間、相手のセット行為を封じる効果を持つのでござる」

「セット行為……………モンスターを裏守備で召喚したり、罠を張れないってことか？」

「いかにも」

先程、それを話すまでもなくアツサリやられてしまったござるか
らな

と楓は笑い、話を続けた

「そして最後にもう一つ、これはダーク・シムルグが墓地に存在する時に発動可能な効果」

(手札、場、そして墓地……………あらゆる場所から効果が発動できるモンスターってわけか)

楓は五枚ある手札から、二枚のカードをスツと抜く

「手札の風属性と闇属性を一体つつ除外することで、復活するのでいいよ」

「……復活!？」

「あいあい 拙者は手札から、速攻の黒い忍者とドラゴンフライをゲームから除外」

またもフィールドに現れる黒い霧、デジャヴ

「墓地からダーク・シムルグ、特殊召喚でござる!」

ほどなくして、最凶の妖鳥が再臨する

「手札のモンスターをコストにつて……つまり前のターン、モンスターを出せたにもかかわらず出さずにいたってことか!？」

「もし除去されたら大変と思い、念には念を入れさせてもらったでいいよ」

ダーク・シムルグは、目下に位置する時の魔術師を一睨み

楓が取る次の行動は、既に決まっていた

「ダーク・シムルグで、時の魔術師を攻撃でござる!」

ダーク・シムルグ 攻撃力2700

V S

時の魔術師 攻撃力500

時の魔術師 破壊！

「うわあああっ！」

城之内 LP2800 600

「これで、2000のライフコストを必要とする墓荒らしも封じたでござる。拙者はターン終了」

楓 LP4000 手札3

「お、俺のターン、ドロー！」

モンスターを攻撃表示でしか出せないこの状況、しかもライフは風前の灯

手札に打開のための術を持たぬ城之内

「……ものマネ幻想師を召喚！攻撃表示だ！」

ものマネ幻想師

攻撃力0 / 守備力0

このドローで、一時繋ぎではあるが何とか引き入れることに成功

「召喚時、相手の場のモンスター一体の元々の攻守をコピーする！

対象は当然ダーク・シムルグ！」

（まあ、他に楓サンのモンスターはいないしネ）

ものマネ幻想師

攻撃力0 2700

守備力0 1000

（手札にある、右手に盾を左手に剣をの効果は1ターン限り……くず鉄のかかしに攻撃を止められるから、召喚前に使って攻守を入れ替えてたとしても意味はねえ。あとは前のターン伏せたこのカードだが……）

このターン、城之内が取れる行動はもはやなく

「……ターン終了、お前のターンだ」

モンスターを一体召喚するのみで、楓にターンを渡す

城之内 LP600 手札1 伏せ2（内一枚は墓荒らし）

「拙者のターン、ドロー」

楓はドローカードを見やり、フツと笑み

（引いたのか！？モンスターカードを！）

ダーク・シムルグを復活させた前のターン、楓は通常召喚を行っていなかった

もし行っていれば攻撃に参加させ、通れば残り600のライフを削りきって楓の勝利

しかし、それをしなかったということは今度こそ手札のモンスターは0

伏せカードを警戒するにしても、『決まればこれ一撃で勝ち』の可能性を捨てるのは有り得ない

これが城之内の推測、今度こそは外しなかった

（楓の場には血の代償、つまり1ターン中にモンスターを何体でも呼べる……もし俺の考えてることがまた外れだったら……）

生唾をゴクリと、喉へと下らせる

「拙者は手札から、先程ドロした女忍者ヤエを攻撃表示で召喚でいざる」

女忍者ヤエ

攻撃力1100/守備力200

「なら伏せカードオープン！罠カード、落とし穴！」

「むっ」

「召喚、もしくは反転召喚した攻撃力1000以上のモンスターをそのまま破壊する！」

召喚され、カードから飛び出したヤエはそのまま足元にできた落

とし穴へ落下

ヤエの小さな叫びが聞こえたと思うと、すぐ穴は閉じられ（消滅し）た

（ここまでではいい！問題は次だ！）

他に、手札から呼べるモンスターがいるのかどうか

もしいたら、城之内の負け

（頼む！）

「……………」

楓の手札（楓視点）

忍法空蟬の術

おろかな埋葬

シエンの間者

（参ったでござるな…………シエンの間者でヤエを送りつけ、ダーク・シムルグで攻撃しようと思ったのでござるが）

城之内の予測は、今度こそ完全に当たっていた

（流石にここで同士討ちはない…………残った伏せカードの墓荒らしは既に死に札、そしてこちらはまた下級モンスターをドロースれば確実に勝てる…………仮に魔法カードか何かで対策をされても、計2枚のくず鉄のかかしで守ることが可能でござる）

なにより、ダーク・シムルグのセット封じ効果は維持しておくべき

「（一応今の内に使つてござるか）拙者は手札からおろかな埋葬を発動し、デッキのキラートマトを墓地へ」

そしてこれで、二枚目のダーク・シムルグを引いた場合も召喚が可能

「ターン終了でござる」

楓は同士討ちの実行を見送り、自身のターンの終了を宣言した

楓 LP4000 手札2 伏せ2（どちらももくず鉄のかかし）

「俺のターン、ドロー！俺は手札から魔法カード発動！」

（何を引いたでござるか？）

「カップ・オブ・エース！コイントスをして表なら俺、裏だったらお前が2枚ドローする！」

引いたのは、中古カードを買った際新たに投入したドロー系カード発動と同時に巨大コインが場に出現し、回転しながら上に飛び上がる

そしてある程度上がると、落下を開始

チャリンチャリンと音を鳴らし

「よっしゃ！表だぜ！」

表の面が出たことを一同に示す

「よって2枚ドロー！こっから反撃開始だ！」

（一気に手札補充……ここでキーカードが引いて何とかしないと、逆転はちよと厳しい力？）

「手札から、ハリケーンを発動！」

「なっ！？」

（引いたネ！）

ここで引き入れた、城之内の主力魔法

大風が巻き起こり、計4枚のカードをそれぞれの手札へと戻す

（伏せていたくず鉄が2枚とも……）

「そして手札から、ジャンク・シンクロンを攻撃表示で召喚！」

ジャンク・シンクロン

攻撃力1300 / 守備力500

「召喚成功時に効果で俺の墓地のレベル2以下のモンスター、時の魔術師を守備表示で特殊召喚！」

「え、嘘！？ジャンクロン！？」

「ここで引いたですか!？」

(すると召喚するのは、やはりあれか……)

「いくぜ!レベル2の時の魔術師に、レベル3のジャンク・シンク
ロンをチューニング!」

2 + 3 = 5

「シンクロ召喚!」

「カードショップ(ラーメン屋にみんなで行く直前)」

「よし!食いまろう!」

「いえーい!」

「ちょっとは遠慮してくれよ、ったく……」

「城之内さん城之内さん」

「ん？どうした木乃香」

「折角お金入ったんやし、さっき買おうとしてたあのスターターデ
ッキ買ったらええんちゃう？」

「あ、そうだな、一つ買っておくか」

（ラーメン屋の店内（食ってる最中））

「げ、こっちにもガイアナイト入ってたのか、ダブらせちゃったな
……」

「シンクロモンスターやったら、種類揃ってないうちは同じの二枚
あってもええと思うで？」

「まあそうか……へー、色んなチューナーが入ってんな。さて、ど
いつをデッキに入れてみるか……」

「城之内さんって戦士族多いし、サポート受けられるこれでいいと
思いますよ？」

「お、確かに！サンキューな、ハルナ」

「まったく……そのくらい普通、一人で判断出来ないものですかね
？」

「~~~~~!」

「じよ、城之内さん! ストップストップ! 夕映もいい加減それやめなつてば!」

「ジャンク・ウォリアー! 攻撃表示!」

ジャンク・ウォリアー

攻撃力2300 / 守備力1300

「そしてこいつのモンスター効果を発動! シンクロ召喚成功時、俺の場のレベル2以下のモンスターの攻撃力の合計分攻撃力を上昇させる!」

「ものマネ幻想師のレベルは、1……」

「そう! よって効果の対象内、攻撃力が2700ポイントアップ!」

ジャンクウォリアー

攻撃力2300 5000

「攻撃力5000!？」

「凄いですー!」

「さあいくぜ!まずはものマネ幻想師でダーク・シムルグを攻撃!」

現在ダーク・シムルグとまったく同じ姿になっているものマネ幻想士

攻撃方法も同様で、同じ攻撃を互いにぶつけ合う

ものマネ幻想師 攻撃力2700

VS

ダーク・シムルグ 攻撃力2700

ものマネ幻想師 破壊!

ダーク・シムルグ 破壊!

結果、同士討ちで場から消え去った

「トドメだ!ジャンク・ウォリアーでダイレクトアタック!」

ジャンク・ウォリアー 攻撃力5000

楓 LP4000

「ぐっぐっぐっ!」

そしてガラ空きとなった楓にジャンク・ウォリアーが攻撃を叩き込む

楓 LP 4000 0

「よっしゃ！俺の勝ちだ！」

楓のライフカウンターから、ライフが0になったことを示すピーという電子音

勝負は決着し、場に映っていたジャンク・ウォリアーのソリッドビジョンはスッと消える

「楓、いい決闘だっデュエルたぜ！」

「あいあい、拙者も同じくでござる」

城之内は楓の方へ近付くと、スッと右手を差し出す

楓はそれに応じ、同じく差し出した自身の右手でそれを強く握った

第4話 超の新発明テスト？

「さて、使い心地はどうだったか？城之内サン、楓サン」

「全然問題無かったぜ」

「あいあい、楽しませてもらったでござるよ」

テスト決闘は無事終了し、一旦屋内へ戻った一同

城之内と楓は左腕に装着していた決闘盤を外して超へと返す

それと同時に言った感想に満足したのか、超は嬉しそうにそれらを受け取った

「そう力そう力、ならあとは微調整さえすれば大丈夫ネ」

「ねえ超りーん！僕達も使ってみたーい！」

「ですー！」

すると、鳴滝姉妹が駆け寄ってきて超へ使用要求

フムと少し考えた後、『OKネ、ではまた屋上へと戻る力』と了承した

一方で葉加瀬はなにやらコンピュータと向き合っており、どうも先ほど行った決闘のデータ解析をしてるとかなんとか

楓も二人に行こうと誘われ、彼女は了解

城之内も当然了解

計五人は再び屋上へと戻り

「残念城之内さん！僕はここでおジャマトリオを発動！」

「なっ！？俺の場が変なモンスターで埋められた！」

「これで城之内さんは、新たにモンスターを呼べなくなったよ！」

「はっはっは、伏せていた魔封じの芳香を発動でござる」

「うわーん！ロックを完成されたですー！」

「これで史伽殿は魔法・罾が一切使えず、モンスターを攻撃表示で

出すことしか出来なくなっただでござるな」

（うっわ、えげつねえ……）

夕方になるまで延々と決闘^{デュエル}を続けたのであった

「……ことがあつてよ」

「……なんだ城之内、テムエあの中国娘のトコ行つてたのか」

そして現在は夜、場所は管理人室

夕食を取り終え、城之内は今日あった出来事を報告

最初は適当に聞き流していたバクラだったが、超の部分になると少し気になったか耳を傾けた

「まあな、決闘盤のことも聞いたぜ」

「やっぱりか、まあ別に構わねえけどよ」

バクラはすつくと立ち上がると、『もう寝る』とベッドに入ろうとする

が、ここで城之内があることを思い出した

「そういえばバクラ、お前この世界に来て新しいデッキとか作ったのか？」

「は？」

バクラは足を止め、城之内の方を振り返る

城之内は自身のデッキを取り出し、既に準備万端

「部屋の中じゃ流石に決闘盤はちよつと無理だけどよ、普通にテーブルの上とかならやれるだろ？」

「……やれつてのか？」

「おう！そう簡単には負けないぜ！」

大方、バクラの使うデッキは想像がつく

バトルシティ
決闘都市でも使用した、悪魔・アンデッド族を中心としたオカルトデッキ

それに、こちらの世界にあるカードを新たに加えた強化版なのだろう

本来、バクラのデッキ（主に投入モンスター）は苦手である城之内しかし今は『この世界には他にどんなカードがあるのか』と『バクラはこの世界でどれほど強くなったのか』という二つの興味の方が勝っていた

「……チッ」

しかしながらその当人バクラは舌打ちを一回し、再びベッドへ

「お、おい！待てよバクラ！」

「うつせーな、テメエと決闘デュエルやってるほど俺様は暇じゃねえんだよ」

誘いを一蹴したバクラは、食い下がってきた城之内に対してもシッシッと手の平を払う

が、城之内もこのまま引き下がる男ではない

二段ベッドに片足を突っ込み、身体を潜り込ませようとするバクラへ

「へー、つまり俺と戦って負けるのが怖いわけか」

「あ？」

挑発し、煽る作戦に出る

耳に城之内の言葉が入ったバクラは、一層顔を怖く変えて顔を城之内の方へ

「言っておくが、俺のデッキはかなり強化されたぜ？今ならマリク相手に完全勝利が出来たっておかしくねえ」

「調子に乗るんじゃないよ……俺だってそのくらい今は余裕だ、てんで自慢にもなりやしねえ」

「なら決闘デュエルといこうじゃねえか。本当にお互い強くなったのか、証明するには一番だ」

「だからしねえって言って……」

「しねえんだったら明日の朝、『バクラが俺に尻尾巻いて逃げた』って朝倉やハルナに言いふらしてやる」

「は！？」

おいこら待て！と声を荒げ、バクラはベッドから完全に出て城之内に掴みかかる

「んなこと言ってみろ！そいつらもともコイツで、魂を食玩のチビ人形にでも入れ……」

「無暗に使つと、学園長の爺さんにバレるんじゃないのか？」

「デメエ……」

千年リングを目の前にチラつかせた脅迫を受けながらも平静を保つ城之内は、へへッと笑ってさらにバクラを挑発

バクラは顔を怒りに歪めたまま、掴んでいた手を離して突き飛ばす踵を返したバクラは自身専用の棚からケースを取り出し、その身をバンツとテーブル上に叩きつけた

「いいぜやってやる！ただし負けた方は、明日の仕事を一つ残らず全部やれ！異論は認めねえぞ！」

「面白え！」

叩きつけられたバクラのデッキを手に取り、シャッフルを始める城之内

バクラも同様、ほどなく両者のデッキを持ち主に返す

「俺様を怒らせたことを後悔させてやる！」

「上等だ！」

「「^{デュエル}決闘！！」」

「ハッハッハッハ！ゾンビ・キャリアと馬頭鬼^{めずき}をチューニング！デスカイザー・ドラゴンをシンクロ召喚するぜ！」

デスカイザー・ドラゴン

攻撃力2400 / 守備力1500

「効果によりシンクロ召喚成功時、相手の墓地のアンデッド族モンスターを俺様の支配下へと置く！」

「しまった！今はフィールド魔法のせいで俺のモンスターまでアンデッドに……」

「テメエのサイコショッカーはいただきだ！」

人造人間サイコショッカー

攻撃力2400 / 守備力1500

「さらに墓地の馬頭鬼の効果発動！墓地のこのカードをゲームから除外し、闇より出でし絶望を墓地から特殊召喚！」

闇より出でし絶望

攻撃力2800 / 守備力3000

「こ、今度は攻撃力2800のモンスターだと！？」

「まだだ、俺様は聖者の書 禁断の呪術 を発動！墓地のゾンビキヤリアを蘇生すると同時に、テメエの墓地の時の魔術師をゲームか

ら除外！」

「げっ！？」

「そしてゾンビマスターとゾンビキャリアをチューニング！お次は、蘇りし魔王ハ・デスをシンクロ召喚！」

蘇りし魔王ハ・デス

攻撃力2450 / 守備力0

「ちよっ！ちよつとタンm……」

「最後に仕上げだ！魔法カード、異次元からの埋葬を発動！除外されている馬頭鬼を墓地へ戻して再び効果を発動！地獄の門番イル・ブラッドを蘇生！」

地獄の門番イル・ブラッド

攻撃力2100 / 守備力800

「全軍、城之内にダイレクトアタック！」

「ぎゃああああああっ！」

城之内	LP	4200	1800	-	600	-	3400	-	5
850	7950								

「これで分かったか、テメエごときが俺様に齒向かうなんて百年早えんだよ！」

「も、もう一回だバクラ！あと一回だけやらせてくれ！」

「デメエこれでもう三度目だろうが！しつけえんだよ！」

かくして城之内の、麻帆良二日目の夜は更けていった

第4話 超の新発明テスト？（後書き）

城之内

「よう読者のみんな！城之内克也だ！」

超

「超鈴音ネ」

楓

「長瀬楓でござる」

城之内

「というわけで今回は作品中初、決闘盤デュエルディスクを使った決闘デュエルをお送りしたぜ！」

超

「モンスターがソリッドビジョンで実際に出てくるから力、描写を幾分か増やして総合的な文字数が大幅に増加。開始から決着までに二本も掛けてしまったヨ」

楓

「ではでは、コーナーを進行するでござる」

城之内

「まずは楓のデッキ紹介だな」

楓

「あいあい、拙者の使うデッキは【忍オールスター＋】でござる」

超

「様々な忍者系モンスターを詰め込んだファンデッキの一種ネ、しかしながらダーク・シムルグや渋い（シルバー）忍者が出てくるとなかなか厄介ヨ」

楓

「ドロー用に悪シノビ、アタッカーにワンダードッグ、それと今回は出なかつたくノーウォリアー。特にワンダードッグは獣族ゆえ、変化の術から呼べるのもいいでござるな」

城之内

「それと今回は活躍が少なかったが、専用の魔法・罠もなかなか味のあるのが多いぜ。……ってあれ？これって悪シノビとかには使えないのか？」

楓

「それが拙者的にはとても残念なのでござる、あくまで対象になるのは『忍者と名の付いたモンスター』だけでござるからな」

城之内

「分かるぜその気持ち、俺が使うパンサーウォリアーやワイバーンも『戦士』なのに増援で呼べねえんだ」

超

「見た目重視のモンスター選択力……いやー二人とも、本当に古とやてることが同じネ」

城之内

「古？そついや前にも朝倉から名前聞いたな」

超

「一応デッキ構成は作者の中で完璧に出来てるらしいから、リクエストがあれば2〜3話中に出してもいいらしいヨ」

楓

「では続いて、制作裏話でござるな……とは言っても、話すことは今までとあまり変わらぬでござるが」

城之内

「？」

超

「要するに楓さんのデッキについてネ。楓さんが忍者デッキというのは構想を練った最初期で確定、まあ一時六武衆にしようかという気の迷いもあつたらしいガ」

城之内

「……なんかこの話、前に感想ページでも無かったか？」

楓

「いかにも、その際拙者のデッキ予想として『忍者+ダークシムルグ』というのを挙げられていたんでござる」

城之内

「……そのまんまだな」

超

「どうしてもダーク・シムルグ以外、変化の術で呼ぶ切り札モンスターを選出出来なかったわけヨ。友人数名に相談してみても、返ってくるのはダムルグばかり」

楓

「というわけで、感想のをまんま使わせてもらった。というのが今回の制作裏話でござる」

注・一応『忍者』じゃない忍者を入れる等の工夫はしましたが、なににせよ朱鳳鈴さんありがとうございます

城之内

「じゃあお次は次回予告だぜ！」

超

「今回は一日明けて月曜日、私達は普通に学校ネ」

城之内

「そして俺はバクラと女子寮で仕事……っておいおいおい！これだと俺とあいつらが接触しねえから、話が成立しないじゃねえか！」

超

「別に毎回、城之内さんの決闘^{デュエル}をお送りするという決まりがあるわけじゃないヨ」

楓

「今回は3 - A生徒同士の決闘^{デュエル}をお送りするでござる」

城之内

「……え？じゃあ俺次回は出番無し？」

超

「少なくとも、このコーナーに出られるほど目立つことは無いネ」

城之内

「主人公俺なのに……」

楓

「まあまあ城之内殿、たまにはゆつくり休むことも重要でござるよ。では最後に、今回の最強カード紹介でござる。今回は拙者のダーク・シム」

城之内

「俺の《ジャンク・ウォリアー》だ！！三連続で乗っ取られてたまるか！」

ジャンク・ウォリアー

星5 / 闇属性 / 戦士族 / 攻撃力2300 / 守備力1300

「ジャンク・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードの攻撃力は自分フィールド上に表側表示で存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力の合計分アップする。

城之内

「ガイアナイトに続く俺の新しい切り札！作中にもあった通り、ものマネ幻想師とのコンボは強力だぜ！」

楓

「購入したスターターデッキに収録されていたのを投入したんでござるな」

城之内

「ああ！ちなみに『ガイアナイトが被った』という台詞から分かると思うが、俺の買ったスターターデッキは今からかなり昔のアレだ」

超

「作者はどうしてもあの三体のシンクロモンスターを城之内さんに与えたかったらしいヨ。『品揃えがとても良い店だった』ということとで了解頼むネ」

???1

「それにしてもやっぱり、高い攻撃力のモンスターで相手をぶっ倒すってのが一番スカッとするわね」

城之内

「だよな！攻撃力5000なんて俺も初めてだったから爽快だったぜ！」

???2

「けど、それだけに特化した馬鹿力デッキを使うというのも考え物ですわね」

???1

「なによ！あんだだって4000以上になる高攻撃力モンスター使っじゃない！」

???2

「私は他のカードでしっかりバランスを取ってるからいいんです！現に貴方、この前のどかさん相手に何も出来ず無様に負けたじゃないませんの！」

???1

「あれは相性が悪かっただけ！」

????2

「だとしてもあれは酷すぎますわ」

????1

「余計なお世話よ！」

超

「……とまあ、二人の喧嘩がしばらく終わりそうにないから今回はここまでネ」

楓

「ではでは、次回もお楽しみにでござる」

第5話 発明品テスト？ 純粹に、『力』？（前書き）

今週は定期試験のため、ネギドラ！ではなくこちらになります。
更新をお待ちくださっていた方、大変お待たせいたしました。

今回も4本の投稿を予定しております。あと前回のあとがきにも
書きましたが、小説中初めて城之内が絡まない決闘をお送りいたし
ます。

ではどうぞ！

第5話 発明品テスト？ 純粹に、『力』？

「ふああああああ……ねみい」

早朝

麻帆良学園女子中等部の女子寮の敷地内において、欠伸をしながら箒を動かす者が一人

一昨日からの成り立て副管理人、城之内克也である

昨晚、管理人であるバクラとの賭けに敗れた城之内

その結果本日全ての業務を彼の分までこなすこととなり、今に至る

ちなみにバクラは部屋の中で未だ眠っており、城之内が朝食を作るまで目覚める気はさらさらない

「ちつくしよーバクラめ……今度こそは俺が勝ち越してやる」

一戦だけのつもりが城之内の我が儘によって延々と続けられた昨
晩の決闘デュエル

結果は一勝九敗と城之内ボロ負け、唯一の一勝は最後の十試合目
その勝利でとりあえずであるが気が晴れた城之内は、深夜0時を
過ぎたその時間に就寝をしたのである

「……さて、ここも大体終わったかな。んじゃ次は」

「あ、城之内さんおはようございまーす」

「ん？」

仕事に一区切りをつけた城之内は掃除場所を移動しようとするが、その時後ろから声を掛けられる

振り返るとそこにいたのは、まだ早朝で肌寒いためか少々服を重ね着していたアスナだった

「お前どこ行ってたんだ？こんな朝っぱらから」

「新聞配達のアルバイトですよ」

聞くところによると、アスナは月々金曜日はこのように早起きしてバイトに勤しんでいるとのこと

自身もそういう経験が多かった城之内は感心し、頑張れよと激励してアスナが寮に戻るのを見届ける

「さて、そんじゃあ俺もさっさと掃除済ましちまうかな！」

アスナに感化された城之内はヨッシャと意気込み、箒片手に次の場所へ向かうのであった

「……ところで前から気になってたんだけどよ」

「あ？」

そして時は流れ、午前九時ごろ

朝食も食べ終え、生徒達が登校するのを見届けた城之内はバクラと共に部屋の中にいた

生徒が皆学校へ行っている平日、この時間帯はやはり暇

カードショップに行ったところで客は当然殆どおらず、しかもまだ開店まで時間がある

それぞれ適当に本を読んだりデッキを弄ったりして時間を潰していたのだが、そんな時に城之内がふと何か思い出してバクラへ向け口を開いた

「お前って、俺が記憶する限りでは今んとこずっと、お前のままだよな？ 獏良と代わったりしねえのか？」

「ああ、そのことが……」

バクラは悪態を突きながらも、首にかけている千年リングを右手で持ちながら城之内に返答する

「出来ねえんだよ」

「は？」

「だから出来ねえつつってんだろ。こっちに来てから今日までずっと、宿主と代わろうと思っても全然代われねえんだよ。うんともすんとも反応が無い、だからここの仕事も押し付けられなくて全部俺様がやってた」

「それって、お前の中から獭良が消えちゃったってことか！？」

城之内はその答えにひどく慌て、すぐさまバクラに近づいた

そして有無を言わず千年リングの紐を掴んで（当然バクラは首にかけたまま）手元へ引き寄せ

「おい獭良！いるなら返事しろ！獭良！獭良――！！」

「やつかましい！んなことやって出てくんだったら苦労しねえ！つか握ってるその手離せ！」

大声で捲し立てるように獭良の名を呼んで叫ぶが、たまらずバクラが腹へ蹴りを飛ばして黙らせた

「まったく……これについてはまだ原因不明だ。テメエの言う通り本当に消えちゃったかもしれねえし、何らかの原因で出てこれねえだけかもしれない。何にせよこっちの世界に来たことが要因の一つ」

てのは、まず間違いねえわな」

「痛てて……… だったら、学園長の爺さんとかに相談したらどうだ？」

「んなこと出来るか、第一あんな奴らにこのことを話してみろ、『この身体に本来宿る魂がその獏良なら、お前の魂は何なんだ』って話になんたろうが」

「そうしたらお前の素性を話すことになって、色々面倒くさいと……」

「そう、しかもあいつらの内何人かは読心術持ちだ。今までは何とか避けてきたが、さっき言ったみたいな事態になったらまず逃げられねえだろ」

そう言うたバクラは姿勢を崩し、身体を横に倒してカーペットの上に寝転んだ

左腕を枕にし、城之内とは逆の方向を向いて

「……なあバクラ、確かに俺も前から気になってたんだ。お前もひよつとして、遊戯みたいに昔の」

「話すようなことでもねえよ、それともうこの話はやめだ」

「け、けどよ」

「いいつつつてんだろ、黙れ」

「……………」

これを最後に、バクラは昼食まで城之内に対して口を開くことはなかった

さて、舞台は大きく移って麻帆良学園女子中等部

さらには時間も大きく移り、現在は昼休みである

「さて、では早速クラスのみんなにもお披露目といくかな」

教室の中央に立ち、超は茶々丸に持ってこさせたアタッシュケースを開く

周りにはクラスの半分以上が集まっており、超はケースから二台の機械を取り出して皆に見せた

「今大流行のデュエルモンスターズ、それをより楽しむためにロボット工学研究会で独自に開発したマシン、それがこの……」

デュエルディスク
「決闘盤だ！すごいだろー！」

「お、お姉ちゃん、別にお姉ちゃんが作ったわけじゃないのに……」

途中で鳴滝姉妹の姉、風香が胸を張って自慢するのを妹の史伽が
恥ずかしそうに止める

他にもこの決闘盤について認知している楓、葉加瀬はやや離れた
位置でそれを見やり、

「なにになに！？どうやって使うの！？」

「おっもしろそー！」

「へー、ロボット工学研究会が何か開発してるって噂は前々から聞
いてたけど……ズバリこれはスクープね！」

残りの面々は興味津々といった様子で決闘盤を触ったり、見たり、
弄ったり

「今週半ばくらいには、学園内での発売を予定してるネ。あ、クラ
スのみんなには特別サービスで定価の4割引きで売ってあげるヨ」

「えー、お金取るのー？」

「超りんのケチー！」

「ハハハ、これもれっきとした商売だから許セ。というわけで本題
に入るわけなのだが、みんなの中から二人ほど、これの試運転の協
力をお願いしたいネ」

超は決闘盤を持っていたまき絵と朝倉から二台とも取り上げ、わざわざ教室に持ち込んできた理由を一同に話す

史伽が『昨日やったのもう大丈夫じゃないんですか？』と尋ねてきたが、どうやら今度は『屋内での決闘^{デュエル}』のデータを取りたいらしい

前回は屋外でやったためにスペースは全く問題が無かったが、屋内、つまり閉鎖的空間ではどれ程余裕があれば可能なのがまだ明確ではない

要するに販売の際、『使用されます際には、半径 ほどのスペースを確保の上お使いください』的な注意書きを記すために必要だとか

「おっもしろそー！じゃあさじゃあさ！早速くじ引きで決めようー！」

「桜子さんを混ぜてくじ引きで決めるのは不公平ではないですか？……まあ、くじ引きを不公平と言ってる時点でどこかおかしい気がします」

「前に城之内さんのテストデュエルやったのと同じ考え方をしたら？『１キルや特殊勝利のギミック』がなくて、『基本的には戦闘型』のデッキ二人でやれば問題ないっしょ。というわけで私、朝倉和美が取材も兼ねて実際に体験を……」

「いやいや、和美殿のデッキはピーピング混じりで少々悪質ゆえ、やめた方がいい気がするでござるよ。拙者の忍者達を再びお披露目ということ……」

「楓姉のはダーク・シムルグ絡みのロックが掛かっちゃうですー（前話参照）、やっぱり戦闘型でもロック絡みは駄目ですー」

「そうそう！試運転なんだからそういうのはやっぱり駄目だって！モンスター同士がガンガン戦闘しなきゃ！」

「ふむ、難しいでござるな……とはいっても、二人のデッキもバーンやキュア主体ではござらぬか？」

「「うつ……」」

各々がそれぞれ意見を出す、言えは自身のデッキをダメ出しされてなかなか進まず

見るに見かねて超本人が

「……………では、私の方から決めてもいいか？つまり『１キル』『特殊勝利』『ピーピング』『ロック』『バーン』みたいな要素に該当しない戦闘型デッキの人を選出すればいいわけネ？」

こう提案し、一同了承

「じゃあ明日菜サン、お願いするヨ」

「え？私？」

そして、超が指名したのはアスナだった

明日菜は少々驚いた様子だったが、自身のデッキを取り出して中

身を見ながら納得

「あゝ、確かにそんな要素私のデッキには全然無いわね。攻撃力増強カードが何枚か入ってはいるけど、別段１キル狙いつてわけじゃないし」

「明日菜サンは本当に戦闘オンリーだからネ、大型モンスターも多いし試運転にはちょうどいいヨ」

「分かったわ、じゃあ協力させてもらうけど……私の対戦相手は誰にするの？」

アスナは超から決闘盤を受け取り、左腕に装着

他の面々は机と椅子を教室の隅へ片付けにかかり、スペースを確保

これで大体の準備は出来たが、肝心の『もう一人のプレイヤー』
がまだ決まってはおらず

「私みたいな戦闘主体のデッキだと……裕奈や葉加瀬や古ちゃん？
茶々丸さんは１キル要素が結構強いからちよつとアレだし、パルは
戦闘主体といってもモンスター同士の戦闘は極力しないし」

「ウム、そうなるかな。古は昼休みになつてすぐネギ坊主と何処か
行てしまたし……葉加瀬、相手を頼むヨ」

「はい、了解しまし……」

そこで、既に何回か使っていて慣れている葉加瀬がなし崩しのに
選出

葉加瀬は超から決闘盤を受け取ろうと手を伸ばすが

「ちょっとお待ちになってください。超さん、葉加瀬さん」

「「？」」

別の人物が一人、二人の間に割って入って受け渡しを阻止

そのままパツと決闘盤を手中に収め、装着

さらにはデッキホルダーに自身のデッキを入れて、アスナと向かい合う

「明日菜さんの相手なら、この私がさせていただきますわ！」

「げ、いいんちょ!？」

腰まで届く金髪ロングヘアをたなびかせた3-Aクラス委員長、雪広あやかだった

第5話 発明品テスト？ 純粹に、『力』？

「『決闘！』」^{デュエル}

麻帆良学園女子中等部、3 - A 教室

皆が机や椅子を片付け、大きく空いた中央のスペース

そこに二人の少女が立ち、向かい合い、決闘^{デュエル}をたった今開始した

一方は神楽坂明日菜、自他共に認める超戦闘型デッキ

対するは雪広あやか、アスナとはこれまで幾多も対戦しており相手としては文句なし

「にしてもいいんちよも強引だなあ……あ、ちなみに今回の驚き&解説役は、私朝倉和美と夕映っちの二人でお送りするよ」

「随分とまあメタ発言を………そういうわけなので、アスナさんといいいんちよさん以外の台詞が入ったら基本的に私達二人のどちらかです」

説明ありがとうございます

さて、先攻は決闘盤に内蔵されている『先攻後攻決定システム』によりアスナ

互いにシャッフルし合い、デッキホルダーに装着したデッキから

計6枚のカードがアスナの手に

「早速行くわよ！私は怒れる^{バーサーク}類人猿^{ゴリラ}を攻撃表示で召喚！」

^{バーサーク}怒れる類人猿^{ゴリラ}

攻撃力2000/守備力1000

出現したのは、炎属性でもないのに口から火を吐く巨大なゴリラ

^{デュエル}決闘をしている当人の二人、さらには残りのギャラリーもこのソリッドビジョンには驚かされていた

しかし驚いてばかりでは進まないの、やや時間を置いて再開

アスナがこのカードを使用するのをあやかは見慣れているのか

「それにしても、おかしな光景ですわねえ……目の前にアスナさんがもう一人」

「うっさいわね毎回毎回！」

と、落ち着きを取り戻した後に余裕ぶつた態度で挑発

「……私はこれでターン終了よ！」

アスナ LP8000 手札5

「では私のターン、ドロー。モンスターを一体セット、続いてリバースカードを二枚セットして終了ですわ」

あやか LP8000 手札3

あやかは手堅く、裏守備モンスターと伏せカードで様子を見る

「うーん、これじゃまだどっちのデッキが分かんないなー」

「いいinchよさんは二種類のデッキを扱いますからね、しかしおそらく私の予想では……」

「私のターン、ドロー！次はこいつよ！味方殺しの女騎士を攻撃表示で召喚！」

味方殺しの女騎士

攻撃力2000 / 守備力2000

これでアスナの場には攻撃力2000のモンスターが二体

「怒れる類人猿で、いいinchよの伏せモンスターを攻撃！」

二枚の伏せカードを目の前にしても、躊躇なく攻撃を宣言

怒れる類人猿は拳を振り上げ、伏せモンスターに殴りかかる

「臆せず攻めてきたのは褒めてさしあげますわ……しかしそんな野蛮なお猿さんの攻撃では、このモンスターは倒せません！」

あやかはそれに合わせて、裏守備にしていたカードを表に反転

目の前にあるソリッド・ビジョンも同様に表側に返り、出現したモンスターが怒れる類人猿と戦闘

放たれたその拳を、自身の強固な体で見事受け止めきった

「私が伏せていたのは、宝玉獣 エメラルド・タートル!」

宝玉獣 エメラルド・タートル
攻撃力600 / 守備力2000

「数値は互いに同じ2000、両者共に破壊や戦闘ダメージは発生しませんわね」

「やっぱりそれか……私はカードを一枚伏せてターン終了よ」

アスナ LP8000 手札4 伏せ1

「やはり今回は宝玉獣デッキで来ましたか……」

「エメラルド・タートルが出る前から予想してたけど、何か確信でもあったの?」

「いいんちよさんが使うもう片方のデッキだと大抵、1ターン目から上級モンスターを展開したり、コンボパーツの永続魔法を予め発動することが多いのでそう思っただけです」

「ふーん、さっすがー」

夕映と朝倉の会話の間に、あやかはドローフェイズを終了

スタンバイフェイズにおいては特に何も仕掛けず、すかさずメインフェイズに入って行動に移った

「宝玉獣 サファイア・ペガサスを召喚、召喚時に効果でデッキからルビー・カーバンクルを魔法・罨ゾーンに。さらに手札から装備魔法、宝玉の開放を発動してサファイア・ペガサスに装備ですわ」

一連の流れを「」一つの内に全て収めてしまったが、順に説明していくところ

まずあやかは自身の場に、攻撃力1800のアタッカーであるサファイア・ペガサスを攻撃表示で召喚

宝玉獣 サファイア・ペガサス
攻撃力1800 / 守備力1200

続いて、召喚時に発動したサファイア・ペガサスの効果

デッキから『宝玉獣』と名のつくモンスターを一体選択し、自身の魔法・罨ゾーンに永続魔法扱いとして表側で置くというもの

選択し、場に出されたルビー・カーバンクルは名前の通りルビーの宝玉となり、サファイア・ペガサスの真後ろでフワリと浮かぶ

最後に使ったのは宝玉獣専用の装備魔法『宝玉の開放』

『宝玉獣』と名のつくモンスターの攻撃力を800ポイント上げる効果があり、サファイア・ペガサスの攻撃力は上級モンスターと同等以上のレベルにまで達したのだ

宝玉獣 サファイア・ペガサス
攻撃力1800 2600

「サファイア・ペガサスで、怒れる類人猿を攻撃！」

宝玉獣 サファイア・ペガサス 攻撃力2600

VS

怒れる類人猿 攻撃力2000

怒れる類人猿 破壊！

「うつ……」

アスナ LP8000 7400

「私はこれで、ターン終了ですわ」

あやか LP8000 手札2 伏せ2 宝玉1

「ちよつと待った！あんたのエンドフェイス時に速効魔法発動！手札断殺！」

「！？」

あやかが先制を決め、ターン終了を宣言したところでアスナが発動したのは手札断殺

以前にも夕映が対城之内戦で使用した、手札入れ替えカード

「互いに手札を2枚墓地に送って、2枚ドローする！そっちは2枚

だから選ぶことなく全部よ！」

アスナが墓地に送ったカード

レベル・ステイラー

黄泉ガエル

「くっ、小癪な真似を……」

あやかが墓地に送ったカード

召喚僧 サモンプリースト

宝玉獣 コバルト・イーグル

改めてエンドフェイズ、続いてアスナのターン

「私のターン、ドロー！スタンバイフェイズに墓地の黄泉ガエルの効果を発動するわよ！」

「……チェーンはありませんわ、どうぞ」

「いやー、にしてもいいタイミングで墓地に送れたねアスナ」

「いいinchよさんが女騎士でなく類人猿を攻撃したのは、結局裏目というわけですか」

「自分の場に魔法・罠カードがないから、特殊召喚！」

黄泉ガエル

攻撃力100 / 守備力100

「そして味方殺しの女騎士の効果、自分のスタンバイフェイズにモンスターを一体リリースして場に維持。その後もう一回黄泉ガエルの効果を発動するわ、これでまた墓地から特殊召喚」

「なるほど、これで実質ノーコスト」

「上手いですね、アスナさん」

「メインフェイズ。味方殺しの女騎士をリリースして、^{グレート}偉大魔獣ガーゼットをアドバンス召喚よ！」

偉大魔獣ガーゼット

攻撃力0 / 守備力0

「ガーゼットの攻撃力は、リリースしたモンスターの攻撃力の二倍！」

偉大魔獣ガーゼット

攻撃力2000 × 2 = 4000

「いいinchよのペガサスを攻撃！」

偉大魔獣ガーゼット 攻撃力4000

VS

宝玉獣 サファイア・ペガサス 攻撃力2500

宝玉獣 サファイア・ペガサス 破壊！

あやか LP 8000 6500

「ではサファイア・ペガサスの戦闘破壊をトリガーに畏カード、宝玉の双壁を発動！」

「うわ、序盤からそれ？」

「私はデッキからトパーズ・タイガーを選択、魔法・畏カードゾーンに置きますわ。続いて破壊されたサファイア・ペガサスも、ルール効果で同様に置きます」

あやか 宝玉1 3

「加えて、サファイア・ペガサスに装備されていた宝玉の開放の効果も発動。破壊されたことでデッキから宝玉獣を一体、私はアンバー・マンモスを選択して魔法・畏ゾーンへ置きますわ」

あやか 宝玉3 4

これで魔法・畏カードゾーンには四つの宝玉が

さらには伏せカードも一枚あり、完全に埋められた状態

「宝玉の双壁にはそれに加え、発動以降の戦闘ダメージをターン終了時まで0にする効果があります。アスナさんの場に攻撃可能なモンスターは0、つまり……」

「いいんちよの手札のカードには、戦闘ダメージを度外視してまで宝玉を増やすだけの価値が……」

「ですね」

「私はこれで、ターン終了!」

アスナ LP 7400 手札 4 伏せ 0

「私のターン、ドロー! 手札よりフィールド魔法を発動ですわ!」

「やっぱりあつたです!」

「宝玉獣デッキのキーカード!」

「虹の古代都市 レインボー・ルイン!」

あやかは決闘盤の側面にあるボタンを押し、それによって現れた新たなスロットにカードを挿入

途端に二人の周りの景色は一変する

虹が
古代闘技場のような場所の中央に二人が立つ形で、空には綺麗な

今いる場所が学校の教室であることすら忘れさせてくれる臨場感
デュエル
決闘をする彼女らはもちろん、ギャラリー達の驚きも最初以上に
大きかった

「そして私の魔法・罨ゾーンに宝玉獣が四体存在しているため第4の効果を発動、1ターンに一度だけデッキから1枚ドローですわ」

あやか 手札2 3

「モンスターを一体セットして、終了！」

あやか LP6500 手札3 伏せ1 宝玉4

「あれ？いいんちよまだ仕掛けないんだ」

「なにせ攻撃力4000のモンスターですからね、それにまだ7枚が揃っていません。……となると鍵はあの伏せカード、発動条件を早く満たして空きを作りたいですね」

「私のターン、ドロー！墓地のレベル・ステイラーの効果発動よ、ガーゼットのレベルを1下げて墓地から特殊召喚！」

レベル・ステイラー

攻撃力600/守備力0

偉大魔獣ガーゼット

6 5

「さらに私は場の黄泉ガエルとレベステをリリース、絶対服従魔人をアドバンス召喚！」

「絶対服従魔人ですって！？」

展開されているフィールドとはまるで不似合いな、全身真っ赤な巨人が出現する

絶対服従魔人

攻撃力3500 / 守備力3000

「この前カードショップに単品30円で売ってたから、買って新たに投入したのよ！」

「そ、そんな攻守が高いだけの木偶の坊モンスターを……」

そう、この絶対服従魔人、とんでもないデメリットを背負ったとても使いづらいモンスター

普通の決闘者^{デュエリスト}であれば、まず入れることはない

「ねえ夕映っち、確かあのモンスターの効果って……」

「はいです。手札が0枚で場には自身一枚のみ、この条件を満たさなければ攻撃は出来ません」

「続いて手札から魔法カード、^{デュアル・サモン}二重召喚発動！これでこのターン、私は二回の通常召喚が可能になるわ！」

「「！？」」

しかし、アスナのデッキだと話は変わってくる

「私はさっき召喚したばかりの絶対服従魔人をリリースして……」

このカードを入れた理由は極単純

リリース要因として、『元々の攻撃力が高いモンスター』が欲し

かったからに他ならない

「二体目の偉大魔獣ガーゼット、召喚！」

「っ！」

現れた二体目のガーゼットは、一体目よりも二回りほどの大きさ

その大きさの違いは、攻撃力の違いを示していた

「ガーゼットの攻撃力は絶対服従魔人の二倍！」

「こ、攻撃力7000……」

偉大魔獣ガーゼット

攻撃力3500×2＝7000

「バトルフェイズ！4000のガーゼットで緑亀、7000ので裏
守備のを順番に攻撃するわ！」

偉大魔獣ガーゼット 攻撃力4000

VS

宝玉獣 エメラルド・タートル 守備力2000

宝玉獣 エメラルド・タートル 破壊！

「場が埋まっているので、エメラルド・タートルはそのまま墓地で
すわ」

偉大魔獣ガーゼット 攻撃力7000

VS

裏守備モンスター 守備力？

「……しかし、こちらの攻撃にはこのカード！伏せていた罠カード、マジック・シリンダー魔法の筒発動！」

「はあああつ！？」

続く二体目であやかのもンスターの全滅を試みたアスナだったが、あまりにも痛すぎるカウンター

ガーゼットの攻撃は跳ね返され、攻撃力分そのままに7000のダメージがアスナを襲った

「う、うぎゃあああああ！」

アスナ LP7400 400

「うつわ、悲惨……しかも前のターンで使わなかったんだいいんちよ」

「宝玉を4つ揃えたかったというのもあるでしょうし、おそらく4000以上のモンスターが後々召喚されると見越しての判断でしょう。アスナさんのデッキは伏せ除去カード少ないですし、」

「どうですのアスナさん？お得意の馬鹿力が見事空回りした時の気

分は」

「うつさい……っていうか超さん！何か今物凄くビリビリってきたんだけど！」

「演出としてダメージ量に比例した衝撃がプレイヤーに与えられる仕組みで、ダメージ体感システムというヨ。一応設定すれば強弱やOFFも可能だが明日菜サンということもあたシ、実験も兼ねてかなり高めの設定にさせてもらたネ」

「それを早く言って！」

「7000じゃ相当効いただろうね……」

「ですね……」

「ああもう！私はカードを一枚セットしてターンエンドよ！」

アスナ LP400 手札1 伏せ1

「私のターン、ドロ！。メインフェイズにまずはレインボー・ルイン第4の効果で1枚ドロ！」

あやか 手札4 5

「（残りは二枚、早急に揃えますわ！）宝玉が2つ以上あるので手札から魔法カード、宝玉の導きを発動！デッキから二枚目のサファリア・ペガサスを選択して守備表示で特殊召喚し、ペガサスの効果でデッキからアメジスト・キャットを魔法・罫ゾーンへ置きます」

宝玉獣 アメジスト・キャット
攻撃力1200 / 守備力600

「そして宝玉が5つあるためレインボー・ルイン第5の効果、宝玉となつているルビー・カーバンクルを守備表示で特殊召喚。続いてルビー・カーバンクルの特殊召喚成功時の効果で、サファイア・ペガサスとアンバー・マンモスを守備表示で特殊召喚、さらにサファイア・ペガサスの効果で魔法・罨ゾーンにデッキからコバルト・イーグルを置きますわ！」

「ちよつ、いいんちよ飛ばしすぎ！読者混乱する！」

「またメタですか……」

つまりカード効果の説明は置いておくとして、一連の動きの後あやかの場はこうなつた

モンスター：ペガサス×2、カーバンクル、マンモス（四体とも守備表示）、裏守備モンスター

魔法・罨：宝玉3（キャット、イーグル、タイガー）

「とりあえず、このターンは終了です」

あやか LP6500 手札4 宝玉3 伏せ0

「私のターン、ドロー！攻撃力7000の方のガーゼットのレベルを1下げて、墓地のレベステを守備表示で特殊召喚！」

偉大魔獣ガーゼット

「さらに手札から、ジャイアント・オークを召喚！」

ジャイアント・オーク

攻撃力2200 / 守備力0

「そして前のターン伏せていたこのカードを発動よ！装備魔法、ビッグバン・シュート！対象は7000のガーゼット！」

「うおおおっ！ここであつた貫通カード！」

「装備されたモンスターの攻撃力を400上げるばかりか、戦闘時に攻撃力が相手モンスターの守備力を上回っていればその分だけダメージを与える強力な効果です！ですがこのタイミングでは！」

「ふん、相変わらず頭のお悪いことですわねアスナさん。ならば私はレインボーライン第3の効果を使つまで！ルビー・カーバンクルを墓地に送つて効果発動！」

あやかが宣言すると、ルビー・カーバンクルはその姿を光に変える

同時にその光は開かれたビッグバン・シュートに向かってぶつかり、それぞれを跡形もなく消滅に至らせた

「場のモンスター減らせたんだからいいのよ！三体で表になってる宝玉獣へ総攻撃！」

偉大魔獣ガーゼット 攻撃力4000

V S

宝玉獣 アンバー・マンモス 守備力1600

偉大魔獣ガーゼット 攻撃力7000

V S

宝玉獣 サファイア・ペガサス 守備力1200

ジャイアント・オーク 攻撃力2200

V S

宝玉獣 サファイア・ペガサス 守備力1200

宝玉獣 アンバー・マンモス 破壊！

宝玉獣 サファイア・ペガサス 破壊！

宝玉獣 サファイア・ペガサス 破壊！

「そんなことで場のモンスターを減らしても無駄ですよ？私は効果でペガサス二体を魔法・畏ゾーンへ」

あやか 宝玉3 5

「うっわ、これでまたレインボー・ルインの効果で特殊召喚されちゃっよ……」

「……いや、違います朝倉さん！」

「え？」

「見るです！いいんちよさんの場を！」

「あ！」

そう、先程の総攻撃であやかのモンスターは裏守備の一体のみ

「もしかして宝玉獣0！？だとすれば第3の効果が使えない！」

「そういうことよ朝倉！メインフェイズ2に移ってジャイアント・オークは守備表示に変更され、その後私は手札からもう一枚の魔法を発動！」

「！？」

アスナがカードをスロットに差し込むと、突如巻き起こる強大な大風

サイクロンか、ハリケーンか、いやそれ以上の強風

「大嵐！みんなまとめて吹っ飛べー！」

「きゃあああああっ！」

永続魔法扱いにされている宝玉達には、為す術もなかった

あやか 宝玉5 0

第5話 発明品テスト？ 純粹に、『力』？

あやか of 戦術を根底から崩しにかかった、アスナ必殺の一手

結果は、見事成功

始めに、手札の魔法一枚を匣に

加えて、裏守備モンスターが宝玉獣ではないという直感を信じて
の博打

だがこうして、アスナの大嵐は場を大いに荒らし回った

あやかの目の前に宝玉は、もう一つとして残っていない

だがフィールド魔法で二人の周りを覆う闘技場だけは、頼りなさ
げだが唯一残っていた

「で、ですがレインボー・ルイン第1の効果！大嵐は同時破壊です
から、このフィールド魔法は発動されませんわ！」

「宝玉0個のそれなんて、怖くもなんともないわよ！ターン終了！」

アスナ LP400 手札0 伏せ0

「私のターン、ドロー。私は手札から魔法カード、打ち出の小槌を
発動ですわ。戻す手札は三枚」

あやか is デュエルディスク
デッキを決闘盤から抜き、手札四枚の内三枚をデッキに

戻してシャッフル

十回ほど切った後再びセットし、そこから三枚をドロ―した

「……………さて、そろそろ仕上げと参りましょうか」

「げ、まさか」

「今度は、こちらのエースモンスターを呼ぶまでのこと。私の墓地にはサファイア、ルビー、トパーズ、エメラルド、アメジスト、コバルト、アンバーの七つ全ての宝玉が揃っています。お出でなさい！レインボー・ドラゴン！」

あやかは右手に持った一枚のカードを高く掲げると、それを次に決闘盤の上へ少し強めに叩き置く

そうして場に出現したのは、七色の輝きを神々しく放つ巨大な竜

究極宝玉神 レインボー・ドラゴン

攻撃力4000/守備力0

今回の決闘で召喚されたモンスターの^{デュエル}の中では、一番の迫力だった

「ついに来たわね……………けど、攻撃力7000を誇る私のガーゼットの敵じゃないわ！」

「それも問題ありませんわ。手札から魔法カード、宝玉の恵みを発動。効果で墓地のペガサスとカーバンクルを魔法・罠カードゾーンに置きますわ」

あやか 宝玉0 2

「さらに、もう一枚発動。選択するのはタイガーと二枚目のペガサス」

あやか 宝玉2 4

「これでまた、レインボー・ルインの効果が……」

「四つ溜まったので早速第4の効果を発動、一枚ドロですわ」

あやか 手札1 2

「バトルフェイズ、守備表示のジャイアント・オークを攻撃」

究極宝玉神 レインボー・ドラゴン 攻撃力4000

VS

ジャイアント・オーク 守備力0

ジャイアント・オーク 破壊！

「カードを一枚セットし、終了」

あやか LP6500 手札1 宝玉4 伏せ1

「ねえ夕映っち、これマズくない？」

「はい、おそらくあの伏せカードはガーゼットの攻撃からレインボ

ー・ドラゴンを守るカード。次のターンに全体除去効果を使われれば、ライフ・手札共に劣っているアスナさんの負けは濃厚です」

「私のターン、ドロー！私の場に魔法・罫は無いけど、墓地の黄泉ガエルの効果は使わない！」

「？」

「その代わりこいつ！メインフェイズに貪欲な壺を発動！あなたの場には宝玉獣がないから文句なく使えるわ！」

レインボー・ルイン第3の効果で墓地に送る宝玉獣は、表示の裏表を問わない

大嵐の時に使わなかったことから、あやかの裏守備モンスターは宝玉獣でないと容易に想像できた

「選択するのはこの5枚！」

- ・怒れる類人猿
- ・味方殺しの女騎士
- ・黄泉ガエル
- ・絶対服従魔人
- ・ジャイアント・オーク

「デッキに戻して、2枚ドロー！」

アスナ 0 2

「来た！サイクロンを発動！対象はその伏せカード！」

「おおっ！アスナのディステニードロー！」

「これなら！」

「甘いすわ！チェーン発動、威嚇する咆哮！」

「！？」

単なる攻撃時に誘発する罠とアスナは読んだが、外れ

フリーチェーン、結果は空振り

サイクロンは無に帰した

「このターン、あなたはバトルフェイズを行うことが出来ませんわ」

「くうううう……もうちょっとだったのに！」

「さあ、どうしますの？」

「……攻撃力4000のガーゼットを守備表示に変更、カードを一枚伏せて終了よ！」

アスナ LP400 手札0 伏せ1

「私のターン、ドロー！」

これで勝負あった、一同はそう思っていた

その理由はレインボー・ドラゴンの持つ、召喚した次のターン以降使える特殊効果

それは墓地の宝玉獣全てを墓地から取り除くことで発動する、場のカードを全部デッキに戻す超強力除去効果

全て消え去った後豊富にある手札から下級モンスターを召喚して殴れば、残り400のライフを削ることなど容易い

しかし

「……………レインボー・ルイン第4の効果発動、1枚ドローですわ」

あやか 手札2 3

それをあやか、一枚も引けない

（くっ！引ければ確実に勝ててましたのに！）

「あれ？いいんちよ、全体除去効果使わないね」

「手札にモンスターが無いんでしょう、となれば……………」

（少々リスクが絡むプランB。問題はアスナさんの伏せカード、もし攻撃反応系の罠だとしたらかなりマズいですわね）

レインボー・ルイン第2の効果は、1ターンに一度だけ使えるダメージ半減効果

7000の攻撃を3500まで減らすことも可能だが、だとして

も手札にモンスターが無い現状では不安が付きまとう

選択肢は三つ

全体除去を使うか、何もせずターンを返すか

（ん？けどちょっと待ってください、守備表示に変えたのは攻撃力4000のガーゼットだけ？ということは……………ならば、これしかないませんわ！）

「っ、いいんちよさんが動くです！」

攻めるか

あやかが選んだのは三つめ

「まずは手札から魔法カード、宝玉の契約を発動！魔法・畏ゾーンのカーバンクルを守備表示で特殊召喚ですわ！さらにカーバンクルの効果で残りの三体も守備表示で特殊召喚し、これによって特殊召喚されたペガサス二体の効果でデッキからカーバンクルとタイガーを宝玉として魔法・畏ゾーンへ！」

あやか 宝玉4 3 0 2

「……………使う気ね、あっちの効果を」

「その通り、そしてレインボー・ドラゴンのもう一つの効果を発動！モンスターカードゾーンの宝玉獣達を全て墓地に送り、その数×1000ポイント攻撃力をアップさせます！」

モンスターとして場にいた宝玉獣達は皆が宝玉へと姿を変え、前方にいるレインボー・ドラゴンの中に吸収される

レインボー・ドラゴンの輝きは一段と増し、その輝きと共に攻撃力も増加

究極宝玉神 レインボー・ドラゴン
攻撃力4000 8000

倍になり、7000を誇ったアスナのガーゼットをも上回る

「良いのいいんちょ？もう手札にはモンスター無いんですよ」

「構いません、このターンで決着をつけるつもりですから」

あやかは右手をスツと上げ、人差し指をアスナのモンスターに向けた

「バトルフェイズ！レインボー・ドラゴンでアスナさんのガーゼットを攻撃！」

究極宝玉神 レインボー・ドラゴン 攻撃力8000

VS

偉大魔獣ガーゼット 攻撃力7000

「この攻撃が通れば！」

「いいんちょさんの勝ちです！」

「勝負を焦ったわねいいんちょ！今は素直に、全体除去を選ぶのが正解だったわ！」

しかしアスナはあやかの攻撃を待っていた

素早くボタンを押し、伏せカードを発動させる

「速効魔法発動！禁じられた聖杯！」

「うつそ！？アスナがそんなレアカード使っなんて！」

「うつさい朝倉！ちよつと前木乃香とトレードしたの！というわけでモンスターを一体選択してターン終了時まで攻+400&効果無効！選ぶのは勿論レインボー・ド」

「残念でしたわね、アスナさん」

「……は？」

レインボー・ドラゴンを選択することで、攻撃力を4000ポイントも上げたあのモンスター効果は無効

よつて8000-4000+400=4400であり、ガーゼツトで余裕撃破

宝玉も尽きたことでレインボー・ルインによるダメージ半減効果も使えず、こちらの逆転勝ちのはず

しかし目の前のあやは、アスナの伏せカードを見て不敵な笑み

を浮かべていた

「ミラフォや次元幽閉のような単なる除去罠が一番怖かったんですが……そのカード！まさしく私の理想のそれですわ！」

「な、なんですって!？」

「理由は簡単、4000のガーゼットを守備表示にしたことですね」

前のターン、一番安全と考えられるプレイングはガーゼットを二体とも守備表示に変えること

仮に伏せカードを無力化されても、ダメージは受けずに終わる可能性が残る

だが、そのリスクを負ってまで7000の方を攻撃表示のままにした理由

下級モンスターを召喚されて倒されることを恐れても考えられたが、それ以上に重要な理由が一つ

『戦闘』によってレインボー・ドラゴンを返り討ちにし、あやかへダメージを与えるという目的があったのだ

「聖杯を使われた場合のレインボー・ドラゴンとそのガーゼットとの攻撃力差は400、そしてあなたの残りライフも400。400と7000のモンスターがいれば、攻撃力操作系のカードを危惧して普通は前者を選びますもの」

「さつきから長々と（まあ合ってるんだけど）……だからそれでどうなるっていうのよ！今はもうダメステ入った上伏せカードは無いし、使えるカードなんて殆ど無いじゃない！」

「分かりませんかアスナさん？ガーゼットを一瞬で無力化する、あなたもよく知ってるカードですよ」

「……………！？まさか！」

「はい。禁じられた聖杯チェーンして手札から速効魔法、収縮を發動ですわ」

「やられたああああああっ！」

アスナは両手で頭を抱え、絶叫

続けて場に収縮のカードが出現し、選択されたガーゼットがカード名そのままに収縮する

偉大魔獣ガーゼット

攻撃力70000

「うーん、やっぱりいつも思っちゃうけど収縮の効果ってややこしいね」

「ですね」

「改めて、バトルですわ！」

究極宝玉神 レインボー・ドラゴン 攻撃力4400

V
S

偉大魔獣ガーゼット 攻撃力0

偉大魔獣ガーゼット 破壊！

「負けたーーーーー！」

アスナ LP 4000

第18話 発明品テスト？ 純粹に『力』？

「ま、ざっとこんなもんですわね」

「何よ、収縮無かったら私があのまま逆転勝ちしてたのに！」

アスナVSあやか、決着

互いに高攻撃力のモンスターを展開した、超白熱の決闘デュエル

最終的にはあやかアスナの手を読み切り、見事勝利を収めた

二人は腕に装着された決闘盤デュエルディスクを外し、制作主の超へと返す

「で、どうだたネ？二人とも」

「とても楽しませていただきましたわ、ありがとございます超さん」

「私も！けど強いて言えば、あのダメージ体感何とかはもうちょっと出来れば出力を……」

（まあ、合計で12000のダメージを喰らたからナ……しかもその内7000を一発で）

前に城之内がやったテストでも、一回に発生したダメージは最大5000

やはりもう少し下げておくべきだったかと、今更ながら超は胸の内で呟いた

「さて、ギャラリーのみんなにも訊いてみるヨ。どうだた力？」

「凄かったよ超りーん！」

「最高！」

「早く私もそれ欲しい！」

クラスメイト一同、決闘盤には好感触の模様

だが

「うーん、せやけどちよっぴり残念やったなー」

「ん？どゆことネ？木乃香サン」

「いやな、レインボー・ドラゴンや絶対服従魔人みたいなでっかいモンスターを出した時、上の方が天井とぶつこおて若干見えない時があったんよ」

「あ、それ私もちよっと思っただ！」

「ボクも！」

（ふむ、するとやはり屋内使用は少々検討した方が……いや、ソリッド・ビジョンの大きさを調節する機能も付ければあるいハ？だと

しても発売日までには無理だから、やるとすれば出来次第追加パツチを売り出すくらい力」

「ねえねえ超りん！次は私にもやらせて！」

「あ、私も！」

すると今度は別の二名、柿崎美砂と明石裕奈が名乗り出る

「そうだな、まだ昼休みの終わりまでには時間があるシ、みんなで順番に回す力」

「やりー！」

二人は早速、アスナ達の決闘を見て手順を覚えたのか決闘盤を装着

「決闘！」
デュエル

こうして3 A一同は、5限の授業に英語があるネギが教室に帰ってくるまで延々と

「次は私のターン！ドロー！まずはモンスターを裏守備でセッ」

「あ、ごつめーん。伏せてた誘惑のシャドウ発動」

「あああつ！ディフェンダーのリバース効果が不発に！」

代わる代わるに決闘三昧
デュエル

数十分後昼休みが終わり、教室に戻って来たネギは大迫力のソリ

ッドビジョンに思わず腰を抜かしてしまうのであった

「……というようなことがありました、マスター」

「私が屋上で昼寝をしてた間にそんなことを……するとそろそろ、アレを販売するのか」

「はい。超鈴音によれば今日明日で今度こそ最終調整を済ませ、明後日の放課後から販売するようです」

そこから時はまたまた流れ、既に放課後

アスナ達が住む女子寮とは別に、麻帆良の敷地内に建てられた口グハウス

中にいるのは、人形だらけのソファに腰を下ろす少女が一人

その脇に立つたまま少女へ話すガイノイドと、少女の向かいのソファにいる人形がそれぞれ一体づつ

「そうか……そういえば茶々丸、お前は試しに何度かもうやったそ

うだな」

「はい、以前に研究所の方で四回。ハカセや四葉さんと対戦して二勝二敗でした」

この家の主、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

彼女の従者、絡繰茶々丸

「ケツ、ソツチハ最近マタデツキ強クシヤガッタヨナ。コチトラ全然好ミノカードガ出ナインデツマンネーゼ。オ陰デズツト負ケツパナシダ」

そして同じくエヴァの従者、チャチャゼロ

「こう言うのも失礼かと思うのですが、姉さんのデツキはやはりもう少々中身を替えた方が」

「煩エナ、ファンデツキダカラアノママデイーンダヨ」

「最早あれはネタデツキだろ……振り子刃の拷問機械を入れてるデツキなんぞ、麻帆良中を探しても一つしかあるまい」

「馬ヤラキヤリアヤラ氷結界ヤレ入レテ、ガチ化シタ御主人二八判ラネーンドヨ」

エヴァの魔力が制限されていることによつて自由に動けないチャチャゼロは、首だけをエヴァの方に回して愚痴を吐く

ちなみにチャチャゼロが決闘する時はエヴァか茶々丸、チャチャ

ゼロと対戦しないどちらかにカードを出してもらっている

「ところでマスター。実は帰宅前に超鈴音から、マスターと私用にと二台決闘盤を頂いたのですが」

「ほう、これがか」

エヴァとチャチャゼロが話している間に、茶々丸は部屋の脇に置いておいたジユラルミンケースを運んできてエヴァの前で開く

今日は帰宅順がエヴァ 茶々丸で、茶々丸がつい先ほど帰ってきたばかりだったため本日見せるのは初めて

「俺ノハネエノカ？」

「あるわけないだろ……だが中々だな。そろそろばーやが来るだろうし、稽古と決闘^{デュエル}の両方でボコボコにしてやるのも悪くない」

ドンドン

「……早速、餌食になりに来たようだな」

「私が出ましよう」

毎日ここへ修行をしにやって来るネギを待ち構えていたところで、来客を告げるドアの音

エヴァはネギ相手に圧勝する自身の姿を浮かべて思わずニヤリとし、そんな彼女をよそに茶々丸は応対しようと玄関へ

ノブを掴んでドアを開け、出迎える

「お待ちしてました、ネギ先せ……」

だが茶々丸の声はアイカメラで捉えた視覚情報を基に急遽ストツブが掛かり、止まった

ドアを開けた目の前にいたのは、ネギではなかったから

「悪かったな、ガキ先公じゃなくて俺で」

「……いえ、貴方がこちらへいらっしゃったのは初めてなものでしたから」

「邪魔するぜ、テメエの主人に話があつて来た」

「あつ……」

了解の言葉をもらつより先に、家の中へ

数歩進んでエヴァを視界に捉えると、向かいのソファからチャチャゼロ＋その他の人形をどかしてドカツと座り込む

彼の訪問を快く思わなかったエヴァは、睨みを効かせて一言

「おい、いきなり貴様何の用だ？よくもまあ、主である私の許可なく堂々と入ってきたものだな」

「そいつは悪かったな、じゃあ改めて言わせてもらつ。話がある、邪魔するぜ」

しかし怯える様子を一つも見せずに返され、よりエヴァの不機嫌具合は加速をみせた

「まあそんな邪険になんなよ、他にアテが無いんで頼ったんだ。闇の魔法使いのアンタにな」

「ほう……」

最後の言葉にエヴァは反応を見せ、向かいの相手の胸元に目をやった

言葉には発しなかったが、彼女が理解したのだと察した男はそのペンダントをチラつかせチャリリと鳴らす

相互で確認した両者

エヴァはソファから立ち上がり、家の奥へと歩き始めた

「……………誰にも話を聞かれないなら、地下にいい場所がある。そこで話を聞いてやろう」

「話が早くて助かるぜ」

「茶々丸はここであーやが来るのを待て。ただし私達が入って十分以上経つまでは決して中に入れるな、いいな？」

「はい」

茶々丸に指示した後、エヴァは左手の人差し指だけを立ててクイ

クイと動かし

「さっさとして来い、猥良了」

「バクラ、でいいぜ」

訪問者、バクラを家の地下へと招き入れたのだった

第18話 発明品テスト？ 純粹に『力』？（後書き）

朝倉

「やつほー読者のみんな、朝倉和美だよ」

アスナ

「神楽坂明日菜よ」

あやか

「雪広あやかですわ」

夕映

「綾瀬夕映です」

朝倉

「というわけでこの小説も連載から五カ月半ほど経過し、本編も5話目」

夕映

「1〜4話目まで城之内さんが決闘^{デュエル}しっぱなしだったので、今回はアスナさんといいいんちゃんのお二人にしてみましたです」

あやか

「結果は見事、6500対0で私の圧勝でしたわ」

アスナ

「紙一重よ紙一重！6500くらいガーゼットで殴れば一瞬で吹っ

飛ばしてやるわよ!」

朝倉

「というわけでまずはデッキ紹介、今回は二人分の紹介ね」

雪広

「まずは私の【宝玉獣】ですわ」

夕映

「宝玉獣達を素早く揃えてレインボー・ルイン等でアドを稼ぎつつ、レインボー・ドラゴンや宝玉の氾濫で相手を撃破するデッキですね。何かに特化した特別な型ではなく、スタンダードな構成です」

アスナ

「特殊召喚手段が多くて、場をなかなか空に出来ないのが厄介なのよね。ダイレクトアタックが一発でも決まれば……」

朝倉

「サイクロン三積み＋大嵐が可能な現環境（投稿した2011年12月現在）だとちょっと厳しいけど、いいんちょ好きだもんねそれ」

雪広

「当然ですわ!」

アスナ

「しかもデッキ予想されて当てられてるし」

朝倉

「ちなみに作中で触れた二つ目のデッキについてだけど、実はこっちも結構当たりだったりするんだよね。本編で出すのはまだ未定だ」

「つたりするんだけど」

夕映

「サファイア・ドラゴンやエメラルド・ドラゴンといった宝石ドラゴンのモンスターを主軸とした、通常モンスター中心のドラゴンデッキです。青眼も入ってます」

朝倉

「感想読んだ時、心底驚いたらしいからね作者……楓のは『まあ普通わかるよな』って開き直ってたそうだけど」

アスナ

「それじゃ今度は私のデッキの紹介ね、私のデッキは『ぶん殴りガーゼット』よ！」

夕映

「取る戦術は至極単純。高攻撃力モンスターをリリースして強力なガーゼットを呼び出し、デッキ名そのままにぶん殴って勝つデッキです」

アスナ

「デッキのモンスターは殆どがノーマル！単品買いして低価格で揃えられるわ！」

あやか

「読者の方からは『無効』系を予想されてたそうですけど、初めからパワーデッキしか作者は考えてなかったそうですわ」

朝倉

「加えて主力のガーゼットの弱点がその無効化系統つても……な

「んだか皮肉だよな」

アスナ

「い、一応対策はあるわよ！？スキルドレイン使われたら絶対服従魔人や女騎士で普通に攻撃すればいいし、黄泉ガエルやレベステは墓地からだから無効化されないし！」

あやか

「けどガーゼットの戦闘時急に発動されれば、今回みたいに悲惨になりますわね」

アスナ

「うつうつ……」

夕映

「さて、では気を取り直して次のコーナー。制作裏話です」

朝倉

「今回は、二人の決闘^{デュエル}についてだね」

アスナ&あやか

「？」

夕映

「実を言うとこの小説、第1話でお二人が決闘^{デュエル}して始めるという構想があったんです」

アスナ

「え、マジ！？」

朝倉

「『昼休みにふとした理由で二人が喧嘩　ネギ君が制止に入る　ならこれで決着をと超が決闘盤を持って登場　二人の決闘開始　この時ネギ君決闘を知る　ネギ（僕もやってみようかな……）』っていう構想」

夕映

「当初城之内さん達の登場予定は無く、単にネギ先生が決闘者として成長していく話を考えてたそうなんです。結局クロスさせて大幅に変えましたが」

朝倉

「しかも、紙に殴り書き状態での原稿も残ってるの。この時いいんちは通常ドラゴンデッキで……」

アスナ

「私は？」

朝倉

「アスナは殆ど同じ、しかも最初のターンに怒れる類人猿出していいんちよに挑発されるとこまで」

あやか

「その頃から、『アスナさん』ゴリラ』のイメージだったんですね。オホホ」

アスナ

「うるさい！」

朝倉

「さあ、お次は次回予告だよ！」

夕映

「次回のお話は、今回の？の続きの話になりますね」

アスナ

「エヴァちゃんの家我突然やってきたバクラさん！」

あやか

「そのまま二人で家の奥まで……一体何のお話をするつもりなんでしょうか？」

朝倉

「何かこのままだと、次の話は城之内さんの出番さらに無さそうだね」

夕映

「現在禁止カードのハリケーンの扱いに作者も困ってますし、もしかしたら第7話もそうなるかもですね」

あやか

「そして最後に今回の最強カード！今回は言うまでも無く私の《究極宝玉神 レインボー・ドラゴン》ですわ！」

究極宝玉神 レインボー・ドラゴン

星10 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻撃力4000 / 守備力0

このカードは通常召喚できない。

自分のフィールド上・墓地に「宝玉獣」と名のついたカードが合計7種類存在する場合のみ特殊召喚する事ができる。

このカードは特殊召喚したターンに以下の効果を発動できない。

自分フィールド上の「宝玉獣」と名のついたモンスターを全て墓地へ送る事で、このカードの攻撃力は墓地へ送った数×1000ポイントアップする。

この効果は相手ターンでも発動する事ができる。

自分の墓地に存在する「宝玉獣」と名のついたモンスターを全てゲームから除外する事で、フィールド上のカードを全て持ち主のデッキに戻す。

あやか

「私のデッキの切り札！何度も使用すれば10000以上も夢ではない攻撃力増強効果、そしてブラック・ローズに匹敵する全体除去効果が魅力的ですわ！」

朝倉

「攻撃力増強効果で墓地に送れるのは、あくまでモンスターカードゾーンの宝玉獣だけだから注意してね」

夕映

「魔法・罨カードゾーンのは不可能です、次からは作者さんも気を付けましょう」

注・すみません、マジで油断せずwiki見ます

あやか

「今はもう修正しましたけど、ご指摘を受ける前までは普通に魔法・罨ゾーンから送ってましたわね」

アスナ

「こういうミスは今後無いことを祈るわ……」

???

「全くだ、特にカードの出入りが激しい決闘^{デュエル}で起こると致命的だぞ」

???

「俺様のデッキもそれにあたるぜ？主に場と墓地からな」

???

「奇遇だな、私のもだ」

朝倉

「それじゃ、次回をお楽しみに！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4049u/>

遊戯王JIM

2011年12月1日15時57分発行